平成２７年３月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

３月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、インターネット実施基準と実施計画について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
佐野真理子（主婦連合会参与）
龍井　葉二（連合総合生活開発研究所客員研究員）
東儀　秀樹（雅楽師）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
和田　　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜インターネット実施基準と実施計画について＞

○　テレビとインターネットの両方をうまく使うことによって情報生活をより豊かにしていくことはいい取り組みだ。テレビの電波が届かず、インターネットしか使えないような地域等も多少はあるのか。

国際標準から見て、インターネットによる放送の同時提供は日本が先駆けなのか、それとも後発なのか。

ＮＨＫにとってはプラスとなり、民放とは差が付いていく気がするが、どう考えているのか。

新しい機能について、多くの人が関心を持つと思うが、例えばテレビでの総理記者会見は、会見の途中までしか放送しないことが多いが、インターネットでは最後まで見られるようなことになるのか。

災害時に特化したメリットとはどういったものがあるのか。大津波や震度６以上のときに放送と同時提供されるということで、全国に設置されているロボットカメラがどういう形で役に立つのか。被災者や行政側にとってどういったメリットがあるのか。具体的に教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

今回の柱の一つとして災害時の情報発信の強化を挙げた。東日本大震災発災直後、被災地では多くの地域で停電となり、テレビが視聴できず、情報が途切れる状況となった。今回の実施計画により、停電してもインターネットで、スマートフォンなどを利用して放送を見ていただくことが可能になり、極めて大きなメリットであると考えている。もう１つの柱である教育については、現在Ｅテレでは、学校教育用の番組を、学校の授業時間帯に放送しているが、放送した番組をインターネットを活用していつでも授業に使えるようになればメリットになると考えている。来年度については、この２つを柱としてインターネットのサービスを考えていきたい。

インターネットによるサービスが国際的に見て日本が遅れているのかについてだが、放送をインターネットで同時に提供するサービスについては、欧米ではすでに始まっている。今回放送法が改正されたことに合わせてＮＨＫで試験的に提供することにした。一部の民放局は番組のいわゆる見逃しサービスを始めているが、ＮＨＫのインターネットサービスと民放のインターネットサービスが同じプラットフォームという設計にはなっていない。

総理の記者会見など、関心のある記者会見について、最後まで見たいという要望があることは承知している。常に放送と同時に提供するというわけにはいかないかもしれないが、ＮＨＫのテレビカメラが現地に出ていれば、インターネットで中継の模様を提供することは可能であると思う。そのほか、スマートフォンなどは位置情報を持っており、より身近な情報をテレビの放送画面よりもはるかに多く伝えることができ

る面ではメリットだと思っている。

○　よい取り組みだと思う。インターネットによるサービスが始まれば民放とＮＨＫが競い合い、利用者にとって便利になると思う。パソコンは充電すれば停電しても１日程度使用することが可能だ。テレビにも充電器を付け、停電しても１日ぐらいは視聴できるようにしたらどうかと以前の審議会でも伝えたところ、ラジオがあるため不要だと言われたが、ラジオをいつでも使えるようにしている人はあまりいないと思う。

タブレットを活用した学校の授業については、先生方が黒板に書くペースが学生にとっても理解のはかどる授業だと思っているので、タブレットなどを使ったスマートな授業を中学校、小学校で行うことはよくないと思う。

放送事業者によるインターネットサービスについて、欧米は進んでいるということだが、ＢＢＣやＣＮＮなどの事例紹介があるとＮＨＫの進捗状況が分かると思う。

（ＮＨＫ側）

例えばイギリスのＢＢＣでは「ｉＰｌａｙｅｒ（アイ・プレイヤー）」という、パソコンやタブレットなどで放送番組の視聴が可能になるサービスを開始している。

○　ロンドンオリンピックの際には、どの程度インターネットで提供していたのか。次のオリンピックや東京オリンピック、場合によってＦＩＦＡワールドカップに向け、あらゆる試合、種目でのインターネットでの提供を検討しているのか。もしくは、ある程度選択的なのか。

（ＮＨＫ側）

基本的には放送権だけではなく、インターネットで配信する権利をＮＨＫが持っていないと提供できない。放送だけではなくインターネットまで含め、ＮＨＫが権利を確保しているスポーツの国際大会は多くなく、オリンピックの場合、ジャパンコンソーシアムという民放も含めた形で放送権とネット権を保有している。ロンドンオリンピックの際は２６競技中２０競技についてライブストリーミングを実施し、日本の選手が出場せず、放送しなかったものも含めて見ていただいた。最もアクセスがあったのは男子テニスの決勝で約５万人がインターネットによる同時提供で視聴し、これまでで最高の人数となっている。次回のリオデジャネイロオリンピック、

その先の2020年東京オリンピックを見据え、ＮＨＫのサービスをどう進めていくのかということを考え、サービスを向上させていく。

○　日本国内で行っているスポーツの放送権その他は、ＮＨＫが多く持っているのか。

（ＮＨＫ側）

放送権は国内のものでも、地上波、ＢＳ、ＣＳ、ネットなど、メディアごとに細かく分かれている。ＮＨＫが放送しているものを簡単に何もかもネットで提供できるわけではなく、逆に今の段階では極めて少ないのが現状だ。

○　災害情報の発信強化や、学校で使う教育コンテンツの充実・強化についてはよいと思う。ＮＨＫがインターネットによる提供の権利を有するスポーツイベントのような場合、ネットで視聴できるということは受信料を払っていない方も視聴できることになる。受信料を使ってインターネットで提供できる権利を得たものを、受信料を払っていない人たちが視聴することについて、説明を求められたときにどのように答えるのか。

（ＮＨＫ側）

２７年度については、「試験的提供Ａ」という形で一般の利用者に向けてスポーツイベントの試験的な提供を行い、さまざまな課題を検証したい。その後のサービスの在り方、受信料の公平性に対する説明、インターネット配信のための財源をどのように確保するのかも含めて検討する。そういう目的で試験的提供を設計した。

○　「試験的提供Ｂ」は、アクセスを受信契約者のみに限定するということか。

（ＮＨＫ側）

来年度はそのように考えている。

○　放送のほかにインターネットでさまざまなサービスが提供されることは視聴者にとって幅の広いサービスが提供されることであり、大変結構なことだと思う。一方で、どの番組が有料のＮＨＫオンデマンドで見られ、どの番組が誰でも見られるのか、その区別が分かりにくくなる。「この番組は有料」というような判断基準が

あるのか。

（ＮＨＫ側）

インターネットによる放送番組の丸ごと提供については、災害時など受信料を払っていない方々も含め皆さんに見ていただきたいという特別な事情があるものについて判断し実施していくことになると思う。ＮＨＫオンデマンドでは、見逃し番組サービスや過去番組サービス(特選ライブラリー)について利用者の負担でサービスを提供することを基本としているが、その仕組みとは齟齬(そご)が起きないように設計しながら進める。

＜放送番組一般について＞

○　３月１日(日)のＮＨＫスペシャル「史上最大の救出～震災・緊急消防援助隊の記録～」を見た。緊急消防援助隊の方々が被災者を救うために努力している姿に頭が下がった。一方で多数の消防隊がヘリコプターを出動させても、指示がうまく出せず救助に回れなかったり、燃料が足りなかったなど、災害時に起きる問題についてうまくまとめていた。今後の震災に生かせるようなよい番組だったと感心した。

○　東日本大震災の関連番組については、バランスの取れた報道だったと思う。３月８日(日)のＮＨＫスペシャル　東日本大震災「震災４年　被災者１万人の声～復興はどこまで進んだのか～」(総合　後 9:00～10:13)で取り上げた１万人アンケートによって、４年後にあらためて問題が顕在化すること自体がショックだった。この貴重なデータを企画などで今後使う予定はあるのか。アンケート結果をまとめた数字だけでは分からないこともある。地域差や状況の違いによって、不満や不安をどう評価するかはもっと詳細な分析が必要だ。現状の復興政策が本当にうまくいっているのか、予算の使われ方だけでなく、なぜ使われないのかも含めた分析が必要で、そういった深掘りをしてほしい。また、ほかの震災関連番組を見て思うことだが、上からの目線だけではなく、住民目線で見ていくことが重要で、場合によっては住民の中で意見が分かれていることがどのように合意形成されていくのかということも取材していってほしい。

原発の問題については、発生してから４年たった今もまさに進行中で、汚染水の問題、処理場の問題など、むしろ深刻化している面がある。３月１１日(水)の時論公論「遠い廃炉への道」、３月１０日(火)の「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」、３月７日(土)

のＮＨＫスペシャル「それでも村で生きる～福島“帰還”した人々の記録～」など、ずいぶん現状について取り上げていたと思う。終わったという認識ではない視点に立って引き続き取り組んでほしい。「ＮＨＫスペシャル」で、せっかく開墾した土地が処理場になってしまい戻ることができない現状が伝えられていたが、住民だけではなく、市町村や県もはざまに立たされ、さまざまな問題にぶつかっている。そのような立体的な問題を明らかにする企画に引き続き取り組んでほしい。

（ＮＨＫ側）

１万人アンケートについては早稲田大学と共同で継続的に取り組んできた。震災から丸２年のときもこのアンケート調査を生かし、福島についての番組を制作した。３月１１日（水）のクローズアップ現代「“帰りたい･･･帰れない･･･”～福島の避難者　それぞれの選択～」（総合 後 8:00～8:43）でも取り上げている。大学とは今後も企画に生かせればと話をしている。大学の先生方も学術的な意味で発表されると聞いている。今後も継続し、放送に反映していきたい。

ＮＨＫスペシャル「それでも村で生きる～福島“帰還”した人々の記録～」へのご指摘については、まず、これまでも市町村、県、国の関係についていろいろな角度からさまざまな番組で取り上げてきた。川内村は早く帰還が始まった村で、村長を中心にしたドキュメンタリーを当初から制作し、その後もフォローしている地区だ。今回村の人々から見た視線で、市町村、県、国の縦構造について、全国の人に感じてもらおうとしている。

宮城県名取市閖上地区の状況を見てきたが、がれきは片づいたものの、復興は進んでいない。復興の地域差も大きくなってきており、例えば、隣の町は海岸の５つの集落が合意し、人口を減らさずにいち早く内陸に移転することができた。このような地域差が如実に出ている。今回も「ＮＨＫスペシャル」で集中的に６本編成したほか、年間で２５本の震災関連の「ＮＨＫスペシャル」を放送しており、被災３県でも、夕方の県域放送で継続的に取り上げている。復興が進まない、高齢化と過疎化が同時に進行しているなど、さまざまな問題がある。そういった問題に寄り添って報道を続けている。

原発事故は、収束するまでに４０年かかると言われている。

汚染水が別なところから漏れていた、屋上から漏れていたという話など、ニュースでは節目で伝えている。ＮＨＫスペシャル「シリーズ廃炉への道」は昨年４月に第１回と第２回を放送し、続編についてはこの４月以降に放送する予定だ。収束するまで長い道のりであり、日本が背負っていくテーマであるため、継続的に取材をしていく

○　３月５日（木）のクローズアップ現代「子どもの心が折れていく～震災４年　被災地で何が～」を見た。この問題を取り上げたのはよかったと思う。被災地の子どもの、家族を失った心の傷について伝えていたが、後半は母子家庭を中心とした貧困によって折れていく子どもの心に焦点が移っていた。「母子家庭の貧困」は、被災地だけの問題ではなく、全国的な問題だと思うが、被災地の問題だというニュアンスで取り上げていた。被災地においてそういったケースが多いのであれば、全国平均と比べ、被災地は特に多いという比較が明確にあったほうがよいのではないか。それがないと被災地以外で同じような状況にある方が、被災地だけではないのにという印象を持たれてしまうのでないかという気がした。被災地の独自性が何なのかがあいまいだったことは残念だった。

（ＮＨＫ側）

被災地で両親が離婚するケースもあり、シングルマザーは職も得にくく、貧困につながるという連鎖がある。アンケート調査などで、それを懸念する声が相次いでいることも番組のベースになっている。

○　３．１１に関する番組を全部見たわけではないが、質、量的によいものが多く、ＮＨＫにしかできないという意味で高く評価したい。原発事故という未だ解決していない現在進行形の問題について、深掘りし、いろいろな側面、局面からどう報道するのかが重要だと思うが、今後も重層的に取り上げていく予定があると聞いて安心した。ＢＳ１スペシャル「ヤンキー原発　閉鎖～米・バーモント州　５年の記録～」（ＢＳ１　3 月 13 日（金）前 0:00～0:50）を見た。アメリカのバーモント州で、住民が草の根運動を起こし、政治を動かし、州の決定によって原発を閉鎖に追い込んだというドキュメントだったが参考になった。世界のいろいろな例は、日本の状況を考えるときに参考になると思う。ＮＨＫとの共同制作とのことだが、どのレベルでどういう協力をしたのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

共同制作にはいろいろな形態がある。ＮＨＫが主導し、世界中の制作者に呼びかけて一緒に制作するもの、先方が先に企画し、あとからＮＨＫが参加する形態など、さまざまある。ご覧いただいた番組はアメリカの制作プロダクションが企画を進めていたものだ。３．１１以来、原発を巡る問題は日本の視聴者にとっても関心事であることを踏まえ、番組の国際マーケットでいろいろな企画を探していたときにこの企画を見つけ、日本人にとっても示唆に富むものであろうということで参加させてもらった。ドキュメンタリー制作の世界では、世界中のいろいろな知恵が巡っており、その中からいち早く日本の視聴者にとって興味がある、役立つような企画を見つけ、日本の視聴者に提供することもわれわれの重要な仕事だと思っている。

○　それは資金的な関与なのか、人間的な関与なのか。

（ＮＨＫ側）

今回は資金的な関与だ。すばらしい企画だが、資金が足りず完成が難しい作品があったとき、ＮＨＫが資金を少し負担することで最終的によい作品を世に送り出すということはある。

○　２月２２日(日)のＮＨＫスペシャル「腸内フローラ～解明！驚異の細菌パワー～」について何を食べたらよいのかという問い合わせがあるということだが、続編の番組を制作するとよいのではないか。視聴者の関心が高いのではないかと思う。

○　３月１４日(土)のＮＨＫスペシャル「世界“牛肉”争奪戦」を見た。３月８日(日)のＢｉｚ＋サンデー「日本の食を守れるか？密着！世界牛肉争奪戦」も同じようなテーマだった。牛肉の例を通し、中国の爆発的な購買力に苦戦する日本の姿が浮き彫りになっていた。中国のなりふり構わぬ爆発的な購買が日本の食の安全、安心をも脅かすものになっていることに国民が気付いたのではないか。量の確保の前に質の確保がままならないということではないかと思った。食料争奪戦の中で輸入に依存する日本の食卓の姿がダイレクトに伝わった番組だったと感心した。また、日ごろ私たちが気づかない食料の先物取引に、インデックスファンドが絡んでいるということ、投機が行われていることの紹介もあった。環境破壊も顧みない農業開発や地球規模の自然の限界に対して警鐘を鳴らし、持続的な農業と食の確保が守られる

ようなルールづくりが改めて求められていると強く感じた。自然条件が制限されている中で育まれる日本型農業を維持し、持久力を考慮すべきだということも一方で伝えてほしかった。

○　２月２４日(火)に認知症キャンペーン「認知症　わたしたちにできること」(総合　後 10：00～10：49)を見た。生放送で視聴者からの意見や質問に答える構成で、認知症にはさまざまな種類や症状があることも分かりやすく説明されており、とてもよい番組だと思った。認知症と診断された際に、家族は動揺し不安に思うが、１人で抱え込んではいけないということが一番大切だと思った。介護の不安や負担を上手に周囲の人と共有できる人もいればできない人もおり、介護のつらさが人それぞれ違ってくることがよく分かった。認知症と生活習慣の関係や認知症予防体操がインターネットでも紹介されていること、地域によっては認知症カフェがあり、認知症の方、家族の方、地域の方が集まっていろいろな意見交換ができることなど有益な情報も知ることができた。また、一番大切なのは笑顔で、認知症の方や周りの方が笑顔でいられるようにならないとよい対応につながっていかないと思った。認知症について、イロハのイである基本的な情報で番組は終わっていたが、このイのレベルである基本的な情報はまだたくさんあるはずなので、ぜひ続けていってほしい。

東日本大震災関連番組で気になったのが３月１１日(水)のハートネットＴＶ「明らかになったＤＶ被害～東日本大震災後の女性たち～」だ。電話相談からＤＶ、家庭内暴力の実態がよく分かった。相談の中の４．８％がＤＶ関係で、被災３県の岩手、福島、宮城はその１．７倍の８．３％であることに驚いた。地域的にＤＶが多いというわけではなく、被災し、例えば体育館でいろいろな人と一緒に過ごし話をするなかで、自分の今までの生活を見直した結果、自分が受けていたことがＤＶだと分かったという事実に衝撃を受けた。ＤＶは肉体的な暴力だけではないと分かっていたつもりだったが、殴られない限りＤＶではないと思っている方が多いことが分かった。ＤＶの問題が顕在化し、被災３県で新しい対応が始まったことはよいことだが、被災３県以外でももっとＤＶの問題があるのではないかと思った。被災を違う角度から見るとこれ程に大きなテーマがあるのかと分かった。ＤＶも認知症もそうだが、１人で抱え込まないために、誰かと話ができる環境作りが大切だ。ＮＨＫが関わって、どこで相談できるのかを伝える番組をこれからも作ってほしい。２つの番組は、テーマは重たいが、いずれもキーワードは笑顔だと思う。そういう意味で、３月１５日(日)の「着信御礼！ケータイ大喜利」はレジェンド・オブ・レジェンドという設定で、視聴していて楽しかった。このような、違う意味で笑顔になれる番組もいろいろ見ていきたい。

○　過激派組織ＩＳの報道について。２月２８日(土)の週刊　ニュース深読み「脅威を食い止めるには？　過激派組織ＩＳ」で扱われたので期待して見たが、重要な問題の指摘はしていたものの物足りなかった。背景にあるものをもっと洗い出すことが必要だと思った。「英米が支援するＩＳの飛行機がイラク軍に撃墜された」という一部の報道すらあるぐらいで、われわれには真偽の程が分からない世界だ。そういった真偽の解明もさることながら、日本には、イギリスやアメリカとは違う立ち位置や信頼感が確実にあり、それが新たに醸成されるかが大事だと思う。そのような視点での報道、ドキュメンタリーの制作をしていってほしい。

（ＮＨＫ側）

ＩＳの問題について、日本の立ち位置をどう考えるのかは難しい問題だ。ロンドンの３人の少女たちが巧みな勧誘につられてＩＳに加わるため出国するという事件があったが、ＩＳが一体どういう仕組みで勧誘を行うのか、それに対し地域はどうやって少年少女たちを守っていくのか、番組や企画で取り上げていきたい。全貌(ぼう)を捉えていくことは難しいが、そういう形での啓蒙(もう)、報道に努めていきたい。

○　３月７日(土)の突撃　アッとホーム「最終回も感動ＳＰ」では、娘を津波で亡くした宮城県山元町のイチゴ農家の男性が、山元町はイチゴで復興するしかないと立ち上がり、町民が一丸となっていく姿が描かれており、ドラマ「限界集落株式会社」を地でいくようなすばらしいドキュメンタリーだった。その山元町のドキュメンタリーが終わって、スタジオでゲストの１人が感動し涙ぐんでいたので、ほかのタレントがハンカチを渡そうとしたが、ポケットから出したものが１万円札の束だった。農家の方々が血のにじむような思いで復興しようとしている紹介のあとで、笑いをとろうとする姿勢にびっくりした。その後もスタジオではバラエティー的な受け答えが続いていた。「突撃　アッとホーム」は、バラエティー番組であることは分からなくもないが、ＮＨＫとしてはどうなのかと思った。すばらしいドキュメンタリーを紹介していただけに考えさせられた。

（ＮＨＫ側）

スタジオ演出の件については反省点があると思う。今回が最終回となっているが、次の番組はいろいろ考えたうえで取り組みたい。

○　土曜ドラマ「限界集落株式会社」を見た。有機農法で限界集落を村民が一丸となっ

て立て直すというドラマだったが、大変心を打たれる最終回だった。農業は日本の基本でもあり、農家の方が有機農法を懸命に立ち上げていく姿に親近感を持って毎週楽しみに視聴していた。すばらしい番組だと思った。

○　Ｅテレの月曜日と火曜日にアニメ「わしも」(後 6:00～6:10)を放送しているが、子どもたちの間で話題になっている。あの時間帯は「おじゃる丸」と「忍たま乱太郎」がずっと続いていたが、「わしも」は、おばあちゃん型ロボットのアニメで、独特な雰囲気を持ち、子どもたちの間で火がついているようだ。

○　３月１３日(金)の団塊スタイル「妻として　母として～女優・高橋惠子～」を見た。先月、あるイベントで高橋さんにお会いしたが、大変丁寧ですてきな方だったため、どんな方なのだろうと思って番組を見た。番組では、高橋さんの人間らしさ、自然体の姿がよく映し出されていた。義理の母にその話をしたところ、母が楽しく見ている番組だった。番組のホームページも母の喜びそうな内容が充実していると思った。

○　「ＢＳ世界のドキュメンタリー　シリーズ　危険な時代に生きる」(3 月 3 日(火)～6 日(金))を見た。４回連続で、地球温暖化の問題、気候変動の問題、森林破壊の問題、石炭火力の問題を取り上げていた。俳優のハリソン・フォードさんが出演していたが、自分の意思に基づいて出演していたのだと思う。インパクトのある番組で、台風の被害、乾燥化に伴うアメリカの山火事の映像など、大変迫力のある内容だった。地球温暖化による気候変動で起こる大きな災害は日本では今のところ少ないかもしれないが、日本にとっても貴重な情報だと思うので何らかの形で多くの人が見られる時間に放送してほしい。番組は全９回あるそうだが、続きはいつ放送するのか。

（ＮＨＫ側）

「ＢＳ世界のドキュメンタリー　シリーズ　危険な時代に生きる」の第５回以降は４月６日(月)から放送する予定だ。

○　「ザ・プレミアム　ロマノフ秘宝伝説　栄華を支えた女たち」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　2 月 7 日(土)、14 日(土) 後 7:30～8:59)を見た。ＮＨＫだからこそあそこまで制作することができ、すばらしいと思った。２日間にわたる長い番組だったが、女性の生き様と宝飾を中心に据えながら、ロシアの歴史について考える番組だった。登場人物が多く、ロシアの生活などの紹介も含まれていて、旅行番組のようになっていたところもある。せっかくあそこまでの映像を撮ったのであれば、もう少しテーマ

を絞って深める場面があってもよかったと思った。

○　佐村河内氏関連番組へのＢＰＯ（放送倫理・番組向上機構）の見解に対し、自己検証結果を何らかの形で公表をする予定はあるのか。第三者機関などの仕組みを設け、まとめるのか。

（ＮＨＫ側）

ＢＰＯから検証が十分ではないと指摘された点は３点ある。１点目は、佐村河内氏がピアノ曲全体の流れを書いた全体構成図が実際の曲と一致するのかどうかについて、検証段階では専門家の意見を求めた方がよかったのではないかというのがＢＰＯの見解だ。２点目は、佐村河内氏を取り上げたアメリカのニュース雑誌「ＴＩＭＥ」の記事を番組で紹介した際の表現について。３点目が、佐村河内氏がテレビのスピーカーやバイオリンに指先をあて、音を感じ取り、音色を知るという場面についてだ。これらの指摘について、ＮＨＫとして今後見解をまとめたいが、どのような形で示すかは検討する。佐村河内氏関連番組に関しては、本部の１０部局、５３の放送局、関連団体６社を対象に勉強会を行った。こうした再発防止に向けた取り組みについてはこれからも続けていく予定だ。

○　実際に作曲する場面を撮影させないことには違和感を覚える。神聖な場面だという理由で作曲するところを絶対に見せないことについて、本当に作曲しているのかという検証を十分行ったのか、やや疑問はあった。

○　頭の中で曲が全部できてしまうタイプの作曲家も存在するため、作曲のシーンを撮影のしようがない場合もある。佐村河内氏がうそをついているのか、ついていないのかという以前に、そういう作曲家も実際にいるということだ。そう言われてしまえば、恐らくそれを信じるしかないのが取材する側だ。そのこと自体を検証することに本当に意味があるのか。本人が発言したことを、純粋に信じて撮ることが基本的な取材の方法だとすれば、このケースではみんながだまされてしまったということだ。悪いのは本人であり、報道のしかたが悪かったのかということを一生懸命に検証する必要が本当にあるのかと違和感を覚える。

○　「グローバルディベートＷＩＳＤＯＭ」という番組があるが、これはどういう番

組なのかと感じる。日本語で表現できないものかと思うことがＮＨＫの番組に限らずある。ＮＨＫはまだしもと思っていたが、最近はカタカナ表記が多く、余計に分かりにくくなっている。介護を扱う番組は多いが、「ケアマネージャーが来る」と言っても高齢者はどんな外国人が来るのかとびっくりする。「介護の達人が来る」と簡単に分かりやすく言えるのではないか。スポーツ番組で「１点ビハインドで迎えた」などと言うが、ビハインドとは勝っているのか負けているのか分からない人もいる。わざわざ使わなくてもよいカタカナや英語表記があふれていて、知らなくても今さら聞くことができない人もいるはずだ。今回のインターネットサービスの説明でも、イベントのストリーミング提供、ハイブリッドキャスト、ＶＯＤ、オンデマンドなどのことばが出てくる。日本語の美しさについて、もっと考えてほしい。おじいさんやおばあさんが子どもに対して四字成語の説明を丁寧に教えるときに使うことばが、テレビの中で使われていることばでもあったと思う。そういう空気を取り戻してほしいとＮＨＫには特に思う。

（ＮＨＫ側）

私も分からないことばの意味を周囲に尋ねるが、意外と答えられない人が多い。分かっている人が分かっているだけで、聞いている人、見ている人が理解できるかについてはあまり考慮されていないのではないか。その点はわれわれも反省しなければいけないと思う。できるだけ多くの人に理解されることばづかいをするべきだと思う。

○　カタカナが悪いということではない。担当者同士でそのほうが便利で分かりやすいときはむしろ使ったほうがよいと思うが、公的な場では日本人に対してきれいな日本語を示すぐらいの気持ちでいてもらいたい。

テレビの番組欄では、見てもらいたいためにいろいろとことばを連ねている。これがＮＨＫなのかと目を疑ったのは「激ヤバ」という表現で、残念な気持ちになった。勘違いだったら申し訳ないが、このような表現はあまりしてほしくない。

○　ニュースの原稿を読み上げる際はきれいな日本語だと思うが、会話の中ではそうでもない。気を付けていただきたい。

○　英語のことばを本来の意味と異なる意味で使っている場面をよく見る。例えば、さまざまなところで「リアル」ということばが使われていることに驚いたことがある。英語の本来の意味とは離れた使われ方が氾濫しており、これが英語の本来の意味だと思って使ったらとんでもないことになると感じた。日本語に訳しきれないこ

とばもあるとは思うが、英語本来と違う意味で使ってしまうことに気をつける必要がある。

○　災害の世界でも、地震や津波を「ハザード」、それによって受ける被害を「ディザスター」、被害を受けることに対してもろくて弱いことを「バルナラビリティー」と言う。高齢者の前でそういうことばを使って説明しても理解できないと思う。「平成２７年度インターネットサービス実施計画」を見ると確かにカタカナ表記が多い。誰にでも分かるようにもう少し工夫してもよいと思う。

○　カタカナ表記については同感だ。ＮＨＫだけではなく、役所などにおいてもカタカナ表記が増えている。私たちは分かっている気になっていることが多く、はっきり意味を答えなさいと言われるとなかなか答えられないことも多い。そういうことを考慮していただきたい。

○ カタカナ表記もさることながら、略語が番組のタイトルになっていることも多く、かえって分かりにくい。以前の番組だが、「Ｂｉｚスポ」などがそうだ。日本語を省略することによって出るインパクトはあると思うが、番組のタイトルとして使うのは、分かりにくい面もあると思う。きれいな日本語を維持するＮＨＫの役割を考えてほしい。

○　これから起こると言われている、東南海、首都直下地震に対し、３．１１を教訓にどう対応するのかも重要で、ＮＨＫに大きな役割があると思うが、これから先どういうプランがあるのか。

（ＮＨＫ側）

災害報道体制の整備について簡単に申し上げたい。機能面いわばハード面の整備と、実際にどう動かすかというソフト面の整備を両輪で行っている。３月で終わる現行の３か年の経営計画では、災害体制整備推進委員会を作り整備してきた。首都直下の地震が起き、仮に東京の放送センターから放送を出せなくなった場合でも、大阪や福岡から放送を行う体制整備はほぼ終了した。南海、東南海については政府の想定が変わり、南海トラフと名前も変わり、浸水地域がかなり広範になった。それに合わせ、被害が想定される高知局、津局、函館局、高松局、徳島局については、ラジオも含めた放送が継続できるようにサブステーションを高台に作り、その地域が

属する拠点局、例えば高知であれば松山からどういうバックアップをするかという計画も進めた。全国の放送局で非常電源を高いところに設ける、燃料は１週間分を確保するということも取り組んできた。次の３か年計画でも引き続き整備を続けていくが、かなりの部分まで整備はできている。ソフトの部分は３．１１の反省から、いかに被害を少なくするか、多くの人を救うかという減災報道にさらに力を入れる。地震だけではなく、台風なども含め報道に取り組んでいる。広島の土砂災害では、災害の被害だけではなく、ライフラインの情報もインターネット、ラジオ、テレビで伝えた。以前は、放送関連の職員が中心になって災害情報を伝えていたが、今は部門を越えて全職員が関わる全局体制の形に移行している。災害報道の整備、在り方はこれで完成したということはない。次々と新しい技術も採用しながら、さらによりよい情報の提供の仕方はないか、改良を重ねている。

○　戦後７０年の歴史認識についてどう考えるのかということもある。これから政府がいろいろ検討し、談話を出すわけだが、その過程の中で国民の判断材料になるような素材をどれだけＮＨＫが提供できるかにも注目している。率直な計画としてあるもの、ないものについて聞きたい。

（ＮＨＫ側）

戦後７０年談話について意見を交わす有識者の懇談会もあるが、そうした結果も見つつ、どういう談話となるのかを伝えていく。安倍総理大臣は歴代内閣の立場を全体として継承するという話をしているが、さまざまな意見があると思う。自民党の中にもあるし、公明党の中にもあるし、野党側の意見もあると思う。海外でも関心が高いようだ。そういう面も含め多角的に伝える。視聴者がいろいろな判断をする際に役立つようなさまざまな情報も合わせて伝えたい。

○　４月１日から食品表示法が施行されるが、食品表示は消費者にとって大切である。大変複雑なため、基本的な情報から消費者に分かりやすく説明するような番組を作ってほしい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２７年２月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、戦後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか　知の巨人たち 第７回「昭和の虚無を駆けぬける　三島由紀夫」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
有森　裕子（元マラソンランナー）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
小田　尚（読売新聞東京本社専務取締役論説担当）
鎌田　實（諏訪中央病院名誉院長）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
佐野真理子（主婦連合会参与）
龍井　葉二（連合総合生活開発研究所客員研究員）
東儀　秀樹（雅楽師）
谷口　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
和田　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜戦後史証言プロジェクト　日本人は何をめざしてきたのか　知の巨人たち
第７回「昭和の虚無を駆けぬける　三島由紀夫」について＞

○　今の日本において、国の強さを感じる機会が少ない気がする。必ずしも国が強いことがよいとは言えないが、思い返すと国が強い中国は、四川大地震から３年で復興を果たしている。日本は私権が強く、災害から復興しようとしても例えば土地所有権の問題などがあり、復興スケジュールが遅れてしまうことがある。今後、仮に

東京で大地震が起きれば、同じ問題にぶつかることが予想されるが、私権をコントロールできるかが課題になるのではと考えてしまう。もう少し国が強いのがよいのか、それとも国民の強い国がよいのか、私も悩んでいるところだ。大きな災害があると国民は一致団結するということがあると思うが、関東大震災と大恐慌以降、日本は国全体で急速に軍国主義に傾き、戦争に突き進んだという歴史がある。東日本大震災から４年がたつが、最近の日本を見ていると「強い国」を望む声が多く、関東大震災後に戦争へ突き進んだ日本の状況とよく似ている感じがし、若干怖さを感じる。そういった自分自身が悩んでいる事柄も含めて、番組を見ていろいろと考えさせられた。

○　証言者の人選は、えりすぐられた納得感があった。徴兵検査を受けた際の三島さんの様子などを語れる証言者をよく探してきたと思った。また、最初から答えを決めずに、証言を積み重ねた結果「三島とは何だったのか」という問いに対して、「虚無」ということばを引き出したのも、新しい三島論、三島文学論だと思った。

興味深かったエピソードは全共闘との対話だ。対話を行った方々が、今、三島さんとの議論をどう総括しているかがよく分かった。また、“解放区”とは何かという議論の中で、全共闘側は「場所」を重要視していたのに対し、三島さんは「時間」を重要視し、「場所」という一時的なものはつまらないと語っていた。このことは非常に現代的な意味があると感じた。またこうした思想から、三島さんが重要だと主張していた「伝統」や「永遠」「天皇」という思想が生まれたこともよく分かった。

三島さんは、経済繁栄だけを追い求める日本に対する残念な気持ちでいろいろな文学活動や政治的な行動をしたわけだが、没後４５年がたち、今や経済繁栄はなく、日本はそれを取り戻そうとしている。この時代において、三島さんについて改めてどう評価するのか。番組の中では、長岡實さんと中曽根康弘さんという、どちらかというと経済主義、政治主義的な人からの証言が紹介され、対立概念として興味深かったが、彼らは今、経済主義で生きてきた日本が正しかったのかどうか、改めてどう考えているのか、その点ももう少し掘り下げてほしかった。

○　三島さんの心の葛藤を描きながら、作家としての三島さん以上に、“憂国の士”としての三島さんを最大限に評価した番組だと感じ、バランスが問われる内容だと思った。作家としての三島さんへの評価と、割腹自殺に至った「楯の会」創設者としての三島さんへの評価の間には私の中でも、私の周りの方の中にも大きな隔たりがある。三島さんが選択した割腹自殺という方法、自衛隊市ヶ谷駐屯地での「自衛隊よ立ち上がれ」という檄(げき)文の内容などを見ても、単に“大義に死す”と評価してよいのか、そのように美化してよいのか、三島事件はその課題をずっと引き

ずっていると考えている。しかし、そのような苦慮や悩みが番組からは感じられなかった。三島さんの「楯の会」の主張は単なる４５年前の過去の問題ではなく、現在も政治的主張としていろいろなところで引用されている。つまり、三島事件は極めて現代的な政治問題と位置づけられていると感じる。だからこそ、バランスを取った中立的な扱いが必要だと思う。番組を作る際にはその点を前提にしてほしかった。三島さんにゆかりのある人々だけに三島さんについて語らせるのでなく、同時代の三島さんを批判する人々の意見も聞きたかったし、三島さんの行動そのものについても述べてほしかったと思う。残念ながら番組制作の意図が不透明に思えた。この番組を当審議会の視聴番組にした理由は何なのか。また、割腹自殺や三島さんの檄文内容についてＮＨＫとしてはどのように伝えようと考えていたのか。三島事件を三島さん側から伝えるということは、その主張を追認することになるのでないか。

（ＮＨＫ側）

この番組はＥテレの番組としては反響が大きかった番組であり、いろいろな年代の方から意見を頂いた。そういう番組だからこそ、番組審議会の場でご意見を伺うのに適当だと判断した。

三島さんの割腹事件をどう捉えるかは難しい問題だ。基本的に証言で構成した番組だが、中曽根さん、長岡さんの証言で、三島さんの割腹事件についての疑問やそれに対する否定的な見解も表現したつもりだ。十分に伝わらなかったとすれば申し訳なかったと思う。シリーズ「知の巨人たち」では、第三者的に批判する視点を基本的に入れない方針で番組を制作している。例えば吉本隆明さんを取り上げた回でも、生前に吉本さんと対談し、批判し合った方に出演していただいている。こちらが希望する方すべてが出演に応じていただけるわけではないという難しさもあり、バランスを失していると見えたことについては考えなければいけないと思う。新聞社のインタビュー記事で長岡さんは、「自分は経済発展、国民の富を増やすことが最も大事な戦後だと考え取り組んできたが、今振り返ると経済主義的な戦後日本だけで果たしてよかったのかと、三島の言っていた疑問が今は自分の中でも少し感じられる」と発言している。長岡さん一人を見ても、三島事件について当時感じたことと、戦後７０年を迎えた今感じるこ

とは変化してきており、そこには深い問題があると思う。そういったことが、９０分という時間の中で十全に伝わらなかったことは今後の課題としたい。

「知の巨人たち」は８本のシリーズで構成されていて、いろいろな立場の方の戦後史を見ることにしている。戦後民主主義的な価値観なるものを構築することに力を注いだ方を前半の４本で紹介し、今回はあえて戦後民主主義に異議を唱えた方も紹介するという、シリーズ全体のバランスをご理解いただければと思う。シリーズの大きな流れの中の一つという形でご覧いただけるとありがたい。

○　「知の巨人たち」は、私の世代がよく知る出来事が取り上げられているため、当時の関わりなどを思い返しながら見ている。当時、三島さんの事件についてニュースで聞いた際、あまりインパクトはなかった。当時大学内で激論を交わしていた反体制右翼の人たちのほうが理路整然としていて、逆に三島さんの行動はパフォーマンスとして冷めた目で見ていた。証言の中から虚無感を引き出したのは分かるが、当時は、長い間負い目を抱えてきた一人のナルシストが最後の演出を試みたぐらいに私は突き放して見ていた。番組を見た限りではやはりそうだったのかという感想を持った。

オーラルヒストリー番組を制作する場合には、ある仮説や課題を立て、そのために場合によっては話したくないことを引っ張り出すことがインタビュアーに求められるのではないか。ある程度コンセプトを明確にし、証言者を選ぶ際にも、そのコンセプトに添って探す、オーラルヒストリーとはそういうものだと思う。証言を聞いてからテーマを考えるというのは番組として限界があると思う。吉本隆明さんを取り上げた回も若干同様の事を感じたが、吉本さんの番組では、一応戦後をずっと追っていた。今回の番組で言えば、ドナルド・キーンさんが文学者としての三島さんについて語る部分がもう少しあれば、違う三島像が見えたのかもしれない。三島事件一点に収れんしてしまったのは番組を見てもよく分からなかったところだ。それはあらかじめ意図したことなのか、インタビューをした結果なのか、お聞きしたい。

（ＮＨＫ側）

オーラルヒストリーに関しては、まったく先入観なしに制作しているわけでもない。番組を制作するにあたって、三島さんの「豊饒の海」を読み直したが、最後を読んだとき、虚無感のようなものを強く感じた。今の時代に、三島さんが抱

いていた虚無感は振幅するのでないかと最初から思っていたが、その先入観だけを切り取って番組にした途端につまらないものになると思って制作にあたった。

○　当時私は中学生だったが、「楯の会」のいでたちに怖い印象を持っていて、以来三島さんの思想や思いからは距離をおいて過ごしてきたが、今回番組を視聴して大変よかったと思っている。番組では、戦前と戦後の時間の移り変わりの中で、自分が生まれ育ってきた文化や伝統が破壊され、また一方で多くの友人を失った三島さんが大虚無を抱えて生きてきたことを伝えたかったのだろうと思う。詩人の高橋睦郎さんが言うように「(三島さんは) 生きている実感を失い、幻であることを確かめていたようだ」という一言は、私にも理解できた気がする。最近のグローバル化から起こる変革や改革、ほかの国々と同様に日本も戦力を持つべきだという議論が起こる状況を見ていると、三島さんの「日本という国は何か」という問いかけが耳に残り、この番組が今放送されたことについて腹に落ちたような気もした。しかしながら、４０代以下の人たちとこの番組について話をしてみたところ、「分かりづらかった」という意見があった。確かに私の世代までがぎりぎり理解できる世代かと思った。

○　今回の番組は刺激的でよい番組だったと思う。この「戦後史証言プロジェクト」自体を知らなかったが、今回視聴することができて非常によかった。三島事件が起こった時、私は高校を卒業した年だったが、どういう場面でこのニュースを知り、周りの友人とどういう会話をしたのかも覚えている。「知の巨人たち」と銘打つ以上、戦後７０年の中で三島さんの存在は外せないだろうと思う。

証言者が非常に豊かな内容の証言をしていたが、特に事実上の狂言回しの役割を担っていた小島千加子さんが大変よかったと思う。また、三島さんが抱えていた虚無が最終的に浮かび上がってくるということも、高橋睦郎さんの話を聞いてよく分かった。全共闘との対話のエピソードは、当時自分自身が全共闘側の立場から三島さんを見ていたせいもあり、大変おもしろかった。“解放区”の議論の中で、「時間」対「空間」という整理のしかたも興味深く見た。また、さまざまな証言が積み重ねられる中で、「楯の会」のメンバーの方の証言に思想的な深みが感じられなかったことは、恐らく意図していないところからの結果として 「楯の会」の思想的な深みの程度を浮き彫りにしていたと思う。

私も当時「豊饒の海」を読んで意味が分からなかったが、「水のない海」を意味していたことが解説され、そういうことだったのかと納得できた。

三島さん賛美にならないように配慮したとのことだが、中曽根さんの証言は興味深かったし、また、「やめろ！」「もう降りろ！」という声が飛び交う中で三島さん

が演説をしていた様子を紹介していたのもよかった。長岡さんが長岡さんなりに三島さんをどう見ているかも興味深かった。番組に対する厳しい意見もあるとは思うが、そういうところだけではないと思う。

○　全体を通してとにかくおもしろかった。文学、思想、哲学、宗教観などが入り交じって語られる中で、人間はこんなことをしてしまうのかということを分からせてくれた。三島さんという、あれだけの文学を創作した人が、体へのコンプレックスなどから、こんなにも葛藤し、劣等感を持って、最終的に決起してしまうのかと考えた時に、自分も含め、人間はそういった危うさを持っているということが感じられた。

日本人が「過激派組織ＩＳ・イスラミックステート」に人質に取られるという事件のさなかでこの番組が放送されたことについては、批判もあったようだ。しかし、全体を通して見ればそうではないと思う。現在、ヨーロッパや世界全体で、他民族、他宗教に対して排他的な思想を強くする流れがあり、また日本でも、ネット右翼などを通じて同様の動きがある中で、今回の番組では、もう一度「われわれの社会は、いつでもそういう危険をはらんでいる」と考えさせてくれたと思う。そういう意味で、世界にとっても、日本にとってもタイムリーな放送であり、番組だったと思う。

番組では、何らかの答えを出しているわけではないため、いろいろなことを考える人にとっては、非常に深いよい番組になっていたと思うが、三島事件や三島文学を知らない若者たちが、表層的に民主主義や自由に価値を見出さず、日本という国は三島さんが叫んだとおりなのかと思ってしまうとすると、どこかに歯止めがあったほうがよかったとも思う。制作者が勝手に答えを決めてはいけないこともよく分かるので、９０分の番組構成の中で、勝手に答えも決めず、誘導もしないが、表層的な判断をさせないような要素が隠されていればよかったように思う。

○　これまで、三島さんに関しての情報もなく、あまり考えたこともなかったので、今回番組を視聴してよかったと思う。私にとっては今のタイミングで番組を視聴したことで、深く考え、感じたものが残った。４０代以下の世代にとっては、三島さんの事を改めて知ろう、見よう、考えようというタイミングはなかなかない。没後４５年ということである意味古い内容かもしれないが、さまざまな証言を聞いて、今に当てはまるようなことばが自分の中に落とし込まれたような気がする。そういう意味で、現代に当てはまる番組だったと思う。私の世代やもっと若い世代に対して、何か方向性を示すものではないが、「もう少し考えて生きないといけない」と突きつけられたところもあったし、考えてみたいと思わせる内容だった。

今の若い世代は政治家や官僚の発言に対して、いろいろな受け止め方をしていると思うが、番組の中で取り上げられた政治家や官僚の証言者が２人しかいなかった

のが残念だった。あの時期の政治に関わった政治家や官僚の証言がもう少し聞きたかった。

現代は、いろいろな意見を持つ人が対話や討論を行う機会が減少しており、そのことでさまざまな誤解を生んでいると思う。そういう意味で、全共闘の東大生との対話の内容はもう少し掘り下げてほしかった。どういった議論をぶつけあったのか、何がお互いに伝わり合ったのかということをもっと感じたかった。そういった対話を行うようなエネルギーは、今失われているような気がする。対話の内容がもう少し掘り下げられていれば、若い世代も自分自身に置き換えて見ることができたと思う。

○　番組では、二つのアイデンティティーという軸が交錯していると思った。一つは日本とは何か、あるいはこれから日本人はどうあるべきかということだ。これは大事なアイデンティティーであり、経済発展だけでよいのか、民主主義はどうあるべきか、一人一人の若者がどういうアイデンティティーを持って日本をこれからどう構築していくのか、重要な軸だと思った。もう一つは文学者である三島さんのアイデンティティーがどう形成されたのかで、よく構成されていると思った。生育歴、自身の肉体に対するコンプレックス、作品の評価の浮き沈みによって高揚感を持ったり傷ついたりする人間三島のアイデンティティーの行方が、特異な割腹自殺だったということを、極めてリアルに、いろいろな方の証言をもとに紹介され、見事だと思った。ただ、それが果たしてもう一方の軸の、これからの日本の若者がどうあるべきかというアイデンティティーの軸とどう絡めていくのか、どう絡めたいとＮＨＫは思って番組を作ったのかが分かりにくかった。そのため、放送の時期のことも含めて、少し危ないと思う方がいるのも当然かと思った。ＮＨＫはこの二つの軸をどう絡めたかったのか関心がある。

○　大変興味深い番組だった。三島さんの思想・信条はともかく、三島文学や評伝は読んだことがあるが、そういうものにとどまらない、ぜいたくにいろいろな方の証言を集めている点でＮＨＫらしいおもしろい番組だと感じた。番組が目指していたことはかなり達成されたのでないかという感覚を持った。

「戦後史証言プロジェクト」が取り組み、表そうとしているものについて、一つ一つの番組を見るだけでは、到達するのが難しいと思う。「戦後史証言プロジェクト」の締めくくりに、全体を振り返って議論する場があってもよいかもしれないと思った。

戦後の思想もさることながら、思想や思考をつくっていく過程そのものを知ることは、どの時代にも生きることではないかと思う。三島さんや手塚治虫さんは、戦後の社会で一度価値観が壊れたところから作り上げようとしてきた人たちだ。今私

たちはある意味、出来上がっているものを変えていく苦労をしているわけだが、そこから学ぶことはある。何もないところから価値観を作ろうとした人たちの苦労、情熱の大きさを感じたのは意義があったと思う。

○　私はこの番組を大絶賛したい。今の時代にも通用することを４５年前に発言し、その発言も全く古くさくなく、日本とは何か、日本人とは何かを考えにくい今の時代によい刺激を与えることができたと思う。この番組は、政治的な価値観、右や左であるということを超越していると思う。これを見て右に傾く人も左に傾く人もいないと思う。そんな薄っぺらな番組ではないと感じた。それだけにとどまらず、三島さんの小説で、ことばが美しく、印象的な話だったとこれまで感じてきたものの裏には、こういう思想があったのかと自分の中で改めてつながり、大変気持ちのよい理解のしかたをさせてもらった。

今の若い世代にとっても、何か答えがすぐに見つかる番組ではないが、みんなで考えるきっかけとなる効果的な番組だったと思う。

○　見応えのあるよい番組だったというのが単純な感想だ。三島さんに関わったいろいろな方たちが、４５年間をかけて当時のことをそしゃくした結果としての証言が出ており、それらは三島事件が起きた当時や、三島さんが生きていた時代のものとはかなり違うのだろうと思った。また、今のタイミングでやらなければ証言者の年齢的にもこれだけの証言は得られなかったと思う。そういった意味で今この番組が作られたことの価値を感じた。

日本の価値、日本という国はどうあるべきかと国民みんなが考えなければいけないときに、この番組が何か影響するのか考えた。今われわれが抱えている問題について、三島さんが４５年前に考えていたということは先見の明があり斬新だと思うが、今の時代とはそれなりに違う時代背景の中で、違った生い立ちの人が苦悩していたという意味で、三島さんの思想がすぐにわれわれにオーバーラップすることはないと思う。その点はあまり危惧しなかった。

番組審議委員の中にもいろいろな年代の方がおり、この事件が起きたときにそれぞれ違った取り方、受け止め方をしたと思う。番組の中で残念だったのは、全共闘との対話の部分が興味深かったが、当時の全共闘を理解していない人には分かりづらかったということだ。私もそこまで深く理解しておらず、もう少し掘り下げて伝えてほしかったと思う。

○　全体としてはよい番組で、ＮＨＫらしい、ＮＨＫでなければ出来ない番組だと思う。「戦後史証言プロジェクト」という意味でも、証言できる方が生きている間に制作していることもよかったと思う。残念だったのは番組審議委員であるにもかか

わらず、この番組を放送していることを知らなかったことだ。もう少し番組広報について工夫が必要ではないか。

全共闘との対話は、何について対話し議論し合っていたのかよく分からない形で終わってしまったのが残念だった。

日本の歴史文化を守るべきという三島さんの意見は分かるが、なぜ割腹自殺をせざるをえなかったかという葛藤がよく分からなかった。三島さんは作家であり、文章を書くことでいろいろな表現ができたにもかかわらず、なぜ割腹自殺をしたのか。また、人を説得せずに暴力的な行動を取ることがよいのかということに対し、中曽根さんの批判的な発言も取り上げられてはいたが、番組を見終わってみると、何となく三島さんの考えに賛同しているような印象で終わっている感じがした。三島事件のような一方的な行動ではない形が必要だと考えさせてくれる構成であればよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

貴重な意見をありがとうございました。まだシリーズは続くので、こうした番組もぜひご覧いただきたい。

三島さんがなぜあのような死を選んだのかは誰にも分からない。そういう前提に立った上で、なおかつ三島さんが何に苦労し、葛藤したのかを知りたかった。もしかすると虚無はキーワードかもしれないが、肉体的なコンプレックスみたいなものもあるだろうし、さまざまな見方がある。幾つかの仮説を立て、ディレクターとディスカッションしながら制作した。いかにしてある種のバランスを考えるかということで、全共闘との対話の部分で相対化を試みたが、ご意見を伺ってことば足らずだったと思った。あの時代に、戦後生まれと戦争を体験した三島さんとが、何を対話したかは重要な要素だったが、そこの説明が足りなかった。

頂いたご意見は胸にしみるものがあった。これからの番組づくりに生かしたい。ありがとうございました。

＜放送番組一般について＞

（ＮＨＫ側）

前回の審議会で、１月１３日（火）のクローズアップ現代「ヘイトスピーチを問う～戦後７０年　いま何が～」での国連人

種差別撤廃委員会の取り上げ方について、「国連人種差別撤廃委員会は国連の正式な機関ではない。補助的な委員会にすぎず、それを正式な委員会のように取り上げるのは問題だ」との指摘を頂いた。国連担当の記者等にあらためて取材をしてもらうなどし、見解をまとめた。人種差別撤廃委員会はご指摘のとおり、国連の正式な委員会ではない。ただ、この委員会は人種差別撤廃条約に基づいて設立されたものだ。人種差別撤廃条約はほかの国連の人権関連条約、例えば女子差別撤廃条約、拷問等禁止条約などとともに国連総会で採択され、国連人権高等弁務官が管理者となっている。また、委員会はジュネーブの国連欧州本部で定期的に開催され、勧告文は国連のロゴ入りの国連文書となっている。調べたところ、日本の主要新聞でも、国連の人種差別撤廃委員会、もしくは国連人種差別撤廃委員会という表現を使っている。しかし、あくまでも条約締結国が選んだ専門家が各国の履行状況を監視し勧告するものであり、強制力はない。原稿を書く際には国連の総意を反映したものと受け取られないように注意する必要がある。その点で今回の番組では、冒頭にそうした説明をせずに国連の委員会という表現を使用した。今後はより適切な表現を心がけたい。

（ＮＨＫ側）

前回の審議会で質問のあった「パリ白熱教室」についてお答えする。再放送については現時点で未定だが、これから要望があれば検討したい。また、ＮＨＫオンデマンドでは現在配信していない。なるべく多くの番組を配信できるように努力しているが、権利処理の問題などですべての番組を配信できているわけではない。「パリ白熱教室」についてはオンデマンド配信の予定は現在のところないが、要望が多数あり、条件がクリアできれば検討したい。

○　１月１８日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ阪神・淡路大震災２０年　第２回「都市直下地震　２０年目の警告」を見た。大阪に大きな地震が来たらビルが倒壊するということを伝えていたが、誇張しすぎではないかと私の周囲でも意見があった。耐震技術に関して、特定の建築会社の名前が出ていたが、ほかの建築会社もみな同じような技術を持っており、企業宣伝にならないかと思った。

○　ＩＳ事件のさなかに２月１日(日)のＮＨＫスペシャル「追跡“イスラム国”」(後9:00～9:53)を見た。あの段階であそこまでよく取材をし、番組にまとめたと思う。背景的なことについては今後さらに突っ込んで取材してほしいと改めて思った。ＩＳは、さかのぼれば「テロとの戦い」と言われているイラク戦争のある意味で副産物だとも言える。ＩＳをかばう要素は皆無だが、その背景が理解できていないと、無理解や偏見など不幸な連鎖は続く。その点は追跡をさらに続け、きちんとした発信をしてほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「追跡“イスラム国”」はよかった。ＩＳ成立の過程を追いかけ、アメリカ軍の収容所の存在がＩＳの生まれた背景にあったことや、ＩＳが部族を脅し、勢力を拡大している様子などを伝えており、なぜＩＳがあそこまで大きくなったのかという疑問に対し、よく取材していた。この問題は続くと思うので、ＩＳが成立した背景、なぜそこまで力を持っているのかということを引き続き伝えていってほしい。

○　「過激派組織ＩＳ・イスラミックステート」による邦人の人質事件は大きな問題で、ＮＨＫでも報道と解説などで伝えていた。２月３日(火)の時論公論「日本人殺害事件」で、出川展恒解説委員が安倍総理の対応に問題があったと指摘をした中で、二人の人質がいると分かっていながら強い調子で発言したことや、イスラエルの国旗をバックに「テロと戦う」と言ったことを批判していた。人質事件が判明した段階で、安倍総理はたまたまイスラエルにいて、会見のセットがたまたまそうなっているところで発言したという背景があると思うが、それだけで批判されることだろうか。出川解説委員は専門家だけに、本当にそうなのかと伺いたい。また、今回の一連の報道について、ＮＨＫでは民放と違ってかなり抑制的に報道していたと思う。人質になった後藤健二さんが取った行動については、自己責任ではすまされないぐらいの問題をはらんでいる。日本政府だけではなく、ヨルダンやトルコをも振り回す状況となった。日本人は利用価値があるということや、日本からは軍事的な報復がなく、そういう意味で狙われやすくなるという話も出てきている。日本はある意味で中東に対する影響力が若干あるため、日本を通じＩＳがヨルダンに圧力をかける事態も招いている。そのような指摘があってもよかったと思う。死者にむちを打つことはなかなかできないが、後藤さんは外務省から渡航しないでほしいと３回ぐらい言われたが、振り切って渡航したということもきちんと報道すべきだったと思う。われわれもそうだが、ＩＳのメディア戦略にまんまと乗せられている。イラクの人質事件のときはアルジャジーラというテレビ局がそれに代わって放送していたが、今回はＩＳそのものから、テレビでそのまま使えるような映像が送られてき

ている。シリアに入国しようとしたカメラマンがいるぐらいなので、これからもこういった事態が起こる可能性はある。いろいろな葛藤もあると思うが、映像をある程度ガードし、なおかつうまく報道することを、今どのように考えているのか伺いたい。

○　時論公論「日本人殺害事件」は、ＮＨＫも結構踏み込んで、安倍政権に対ししっかりコメントをしているという印象を受けた。出川解説委員の話は、普通のアラビアの専門家であれば同じ見方をすると思う。反対の意見についても取り上げており、二人の専門家、しかも自前の専門家に突っ込んで議論させるのは悪くないという印象を受けた。

（ＮＨＫ側）

ＩＳに関する報道について多くの意見を頂いたが、大きく３点あろうかと思う。１点目は彼らのプロパガンダに乗るのでないかということだ。「ＮＨＫ放送ガイドライン」でも定められているが、映像については残虐なシーン、遺体については原則的に放送で使用しないという取り決めがあり、ＮＨＫでは静止画の写真も含め、使っていない。これは内部で議論をしたうえでそう対応した。また、ＩＳを持ち上げるようなことはしないことも確認した。２点目は広く言えば安全管理になるかと思う。取材陣も含め、今回は個人が狙われることを意識していた。われわれ報道陣も、特にトルコ国境にいる報道陣については安全管理者を現地に派遣し、安全指導を徹底した。ＮＨＫスペシャル「追跡“イスラム国”」は去年１１月から制作を始めていた。内部の協力者などを募ったが、先方の指定した場所でインタビューを撮ることは全部断り、こちらが指定した場所で撮影した。先方から提供されたものもすべて裏付けを取った。シリアの内戦から長く取材を続けていたため、情報源はあったが、大変気をつけて取材している。３点目は「時論公論」での解説のことも絡めた話だ。日本人が救出されるためには、日本がしていることは人道支援であり、攻撃する意図はないことを伝えることが重要だと思った。政府による人道支援だということを繰り返し述べ、それを直ちに国際放送で放送するように連動した。ご家族の談話を伝えることも日本人の命を救うことにつながるのでないかという思いから時間をかなり割いて放送するように努力した。こ

の過激派組織については、「ＩＳ・イスラミックステート」と表記を変更した。宗教的、民族的問題も絡むため、これからもバランスを取りながら放送の在り方について考えていく。

情報が乏しい中で相手方のプロパガンダに乗らないことは重要なところだった。例えばＩＳの提供映像そのものがプロパガンダなわけだが、一方でわれわれとしてはそれを使わざるをえないところもある。そのような点については十分に注意しながら取り組んできた。あれほど先の見えない事件で、さまざまな情報が錯綜する中で十全でなかった部分はあったと思う。そういう点はこれからも反省しながら取り組んでいきたい。

国際放送はラジオではアラビア語の放送も行っている。日本の平和的な貢献を最大限に伝えていきたい。

○　「歴史秘話ヒストリア」のファンだ。１月２１日（水）の「“裏切り”の声は甘く悲しく～太平洋戦争のラジオアイドル　東京ローズ～」を見たが、あのような悲劇の女性が存在していたのかと身につまされるような思いで見た。アメリカで育った日系二世にもかかわらず、たまたま東京に来ていたその矢先に日米開戦となり、ラジオの心理戦の一分野に駆り出され、プロパガンダ放送に従事したということだ。その後、本国に送還され、反逆罪で６年２か月収監され、６０歳になるまで市民権が回復できなかったという悲劇的な歴史の秘話を知ることができ、勉強になった。人生では急転直下でそういうことが起きるのかと思った。

○　ＮＨＫらしいと思った番組が、阪神・淡路大震災以降の家族を淡々と追った地方発ドキュメンタリー「家族再生～阪神・淡路大震災　遺族たちの２０年～」（２月３日(火)）だ。コメントが多すぎず、いくつかの家族の頑張りと葛藤をそのまま伝えていた。いろいろな関連番組の中でも、説得力が特にあったと感じた。同じように感じたのが、２月８日(日)の明日へ－支えあおう－「大切なあなたへ～こころで話す“風の電話”～」だ。東北のある家の庭に、震災で亡くなった家族あてにかける電話を設置するという淡々としたドキュメンタリーだった。日常の営みだけであれだけ事の重要性を発信できるのはさすがだと感じた。

○　２月９日(月)のクローズアップ現代「少年犯罪・加害者の心に何が～“愛着不形成”と子どもたち～」を見た。子どもだけでなく、企業のような組織にいるといろいろなメンタルの問題を抱えているスタッフがいるが、愛着障害に焦点を当ててお

り勉強になった。組織マネジメントをするうえで、どのように部下の問題に対応したらよいのかヒントを与えてくれた。

○　クローズアップ現代「少年犯罪・加害者の心に何が～“愛着不形成”と子どもたち～」を見た。親が子どもを愛していないと、子どもの脳に障害が残るなど大きな影響が出るということは重要な事実だ。大変よい番組だったと思う。

○　けさの「あさイチ」で「親・先生クライシス」というテーマを取り上げていた。できればシリーズとして放送してほしい。番組では、親側の気持ちを伝えることに比重が置かれており、先生方からのコメントが限られたトーンのものしか聞けなかった。いろいろなタイプの先生が現場にいると思うが、保護者との関係も全く違う部分で困っているケースがたくさんあると思う。今回取り上げられた３、４人のコメントだけでは先生方の心情、学校現場のこと、親との関係を表現するには狭すぎるし、単純すぎると思う。いくつか解決策も出ていたが、数回にわたって取り上げてほしい。もう少し多様な親のパターン、先生のパターン、学校の現状を絡めてほしい。

○　２月１２日(木)の時論公論「ＳＴＡＰ問題」を見た。シビアに解説されていて大変よかったと感じた。

○　「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の中に「まちかど情報室」というコーナーがある。かつてはアナウンサー２人のやりとりがＮＨＫらしくないという声もあったようだが、かなり落ち着いてきたようだ。取り上げられるテーマは非常に参考になるもので、生活グッズなど、ちょっとした工夫で生活が変わるということをおもしろく取り上げてくれている。毎回楽しみに視聴している。

○　連続テレビ小説「マッサン」はＢＳプレミアムが午前７時半、総合テレビが午前８時からの放送だが、その時間帯に出勤したり、子どもの世話でじっくり見られない人たちが大勢いる。夜の再放送は午後１１時からで寝てしまう人も多いため、土曜日に１週間分まとめて放送している「今週の連続テレビ小説」を見ている人がかなりいる。その人たちから、単純に各話を再放送しているのでテーマソングが６回全部流れるのはどうにかならないかと言われた。出演者も毎回違うため必要だとは思うが、毎回見ているのがつらいという意見もある。中にはあの時間帯にトイレへ行くからよいという人もいるようだが、「マッサン」の熱烈なファンから何か工夫してほしいという声が上がっていることを伝えておく。

○　２月１４日(土)のＥＴＶ特集「立花隆　次世代へのメッセージ～わが原点の広島・長崎から～」は立花さんがいろいろな方面について取り上げてきた中で、核の問題を取り上げてこなかった理由がよく分かって興味深かった。４月以降、立花さんを取り上げた番組をいろいろ放送するとのことだが、興味深く思っている。

○　１２月２０日(土)にチョイス＠病気になったとき「今から備える！花粉症」を見た。花粉症の治療が保険適用であることをとても強調していたが、花粉症の人はたくさんおり、レベルもいろいろあると思う。保険を使うことを助長しているかのような印象を受けたので、気をつけたらよいのではないかと感じた。

○　「１００分ｄｅ名著」は、出演するコメンテーターによるところが大きいと思うが、1月７日(水)から放送していた「岡倉天心　茶の本」はすばらしい番組だと思った。

○　２月３日(火)～５日(木) のハートネットＴＶ「シリーズ　認知症“わたし”から始まる」について。１０年後には高齢者の５人に１人が認知症になり、若年性の認知症を含むと数はもっと増える。すべての人に関わることであり、いろいろな方に見てほしい番組だと強く感じた。番組からは、認知症への誤解、偏見を持たないでほしいという、認知症の方々の訴えがよく伝わってきた。認知症になっても周りの人のサポートがあれば生活していけることもよく理解できた。当事者である認知症の方々が国の政策に関わっており、彼らの意見がきちんと反映されることを望みたい。明るい展望を感じさせてくれたのは、実際に認知症の人々が担うグループの活動、すばらしい漸進的な活動が紹介されていたことだ。地域と自治体、事業者がいろいろと協力しており、明日はわが身と考えると勇気づけられる内容で、こういった実際の活動の紹介は全国の視聴者の参考になったと思う。一方で、認知症の進行状況の説明、特徴、進行段階に応じた本人の対応、サポートする人たちの対応などの事例もあればもう少し理解が深まったと思う。第３回「あなたに知ってもらいたい～本人たちとの対話から～」では認知症の方々、福祉関係者、行政の方、町の事業者の方との意見交換の場があった。ある４０代男性が昨年認知症と診断され、どうしたらよいのか分からないという問いに対して、「これからの人生をつくろうと言ってくれるパートナーを見つけ、一緒に行動すること」という助言を紹介していたが、これは酷な発言だと思った。認知症と診断されてしまった方がこれからパートナーを探し、工夫するというのではなく、もう少し具体的な、現実的な助言が必要ではなかったか。また、若年性認知症についても取り上げられていたが、一般的に認知症というと高齢者を考えてしまいがちな中、若年性認知症と高齢者の認知症は症状に共通点や違いはあるのか。その辺りがよく見えず混乱した。もう少し

分かりやすく説明してほしかった。これからも認知症キャンペーンでいろいろ取り上げると思うが、その辺りについても説明していってほしい。

○　「英雄たちの選択」は歴史上のターニングポイントでの“もし”について取り上げており、大好きでよく視聴しているが、１月２９日(木)の「もうひとつの明治維新～敗者・伊達家　北海道開拓への苦闘～」も興味深かった。

○　時々ラジオで「バリバラＲ」を聴いている。テレビの「バリバラ～障害者情報バラエティー～」も見ているが、取り上げにくいテーマを映像と音声でうまく扱っていると思った。さすが大阪放送局という印象も受けた。

○　２月６日（金）に徳島で震度５強の地震があった。「棚から物が落ちることもなく、大したことはありませんでした」と現地の人が言っているにもかかわらず、２０分以上地震の報道をしていた。地震が起きた際にどういう地震であればどこまで報道するのか。物も落ちないような地震で２０分も放送し続けることはないのでないかと疑問だった。

（ＮＨＫ側）

徳島での地震の件だが、震度５強という大きな地震だったため、津波があるのか、原発などの影響がないか、人的な大きな被害が出ていないかを確認するための時間が必要ということだ。「物が落ちるようなことはありませんでした」という漁協の人や、町役場の人のコメントがあったが、ちょうど大阪からＮＨＫのヘリが飛んでおり、被害の有無を確認していた。空から見ると大まかな被害が分かるため、それが確認できるまで放送を続け、結果的に２０分程度かかったということだ。幸いなことに被害は少なかったが、そのようなことを確認しながら特設ニュースの編成について判断をしている。

○　ＮＨＫワールド　ラジオ日本は、短波、ＦＭなどいろいろな波を使って、３億人が聴ける可能性があり、インターネットを使うと国内にいる外国人も聴くことができる。東日本大震災の際にラジオ日本を聴いて、どう逃げればよいのか、何が起きているのかが分かったという外国人もいる。外国の人たちが１８か国語でラジオ日本を聴いて、世界の５０か国を超す人たちが日本へ「日本はよく頑張っている」と5,000通のラブレターを書いてくれた。関係が悪化している中国、韓国からも、今大変荒れているイラクからも来ており、みんなが日本に対し、フレンドリーな声を

寄せてくれている。それはこちらから発信しているからだ。過激派組織のテロ行為など、世界で大変なことが起きている中で、暴力に対しては暴力だけではない、もっと違う方法があること、日本が何を目指しているのか、非軍事で人道支援をしている、そういう国なのだということをラジオなどを通し、もっと世界の人に知ってもらうことは重要なことだ。世界中から「日本、がんばれ」という 5,000 通のラブレターが来たという話をまとめた感動的な本「日本へのラブレター」が出版されるが、日本がこんなに世界から慕われていると思えたのも、地味かもしれないが、ラジオ日本の番組があるからだ。テレビでは一方的になりやすいが、ラジオは双方向性が高い部分もある。こういったラジオのよさを世界に向かってもっとアピールしていってほしい。

○　委員からもＮＨＫの番組について好意的な意見が多く寄せられた。引き続きよい番組を作っていただきたい。前回の審議会で、視聴者に対して行った満足度調査について、おおむね満足しているとして、数値化して結果を提示してくれた。今後は、点数化するだけではなく、どういうことをすればＮＨＫの評価がさらに高まるのかという点も一緒に視聴者に聞いてほしい。点数だけでは何をしてよいのかが分かりにくい。次回の調査の際に考えていただければと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２７年１月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１２人の委員が出席して開かれた。

会議では、「ＮＨＫ経営計画 2015-2017 年度」の概要についての説明および、１２月の審議会に諮問し、可とする答申のあった「平成２７年度国内放送番組編集の基本計画」が、1月１５日の経営委員会で議決されたことの報告があり議事にはいった。

議事は、まず「平成２７年度国内放送番組編成計画」および、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２６年度第３四半期・１０～１２月について）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
大野　博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
小田　　尚（読売新聞東京本社専務取締役論説担当）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
佐野真理子（主婦連合会参与）
龍井　葉二（連合総合生活開発研究所客員研究員）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
和田　　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜平成２７年度国内放送番組編成計画について＞

○　データに基づいた、よく配慮された新番組、番組編成になっていると思う。１つ１つ全部視聴したいと思わせる中身だ。

総合テレビでは土曜の夜の時間帯が全般的に視聴率、リーチが低く、高くするた

めの努力をするということだが、在宅率は高いのになぜ低いのか。民放を視聴しているということか。その分析を聞きたい。

○　「ブラタモリ」が新設されている。タモリさんについてはいろいろな評価があると思う。タモリさんの起用理由について知りたい。

（ＮＨＫ側）

起床在宅率のデータにもあったように、土曜日と日曜日は親子、家族で一緒にテレビを見るという習慣が東日本大震災以降、強くなってきていると考えている。大人、子ども、若い世代も含め、皆で見て楽しめるような番組、親子視聴を考えた番組をここ２年程ねらって編成しているが成果はまだ出ておらず、今回の改定では、さらに強力な番組を編成したということだ。そこで、より幅広い人たちに見ていただくために編成したのが「ブラタモリ」だ。「ブラタモリ」は３年前まで夜のもっと遅い時間帯に放送していた。ＮＨＫをあまり見ていない比較的若い層の男女にリーチが取れる番組で、ＮＨＫの定時番組としてはかなり優良な、ある意味特異な番組だった。４月から「ブラタモリ」を編成するための開発番組として、１月６日(火)に京都を題材にしたブラタモリ「京都」(総合 後 8:00～8:43)を放送した。視聴率は 10.4％で、女性３０代などにも見ていただいており、ＮＨＫの番組としては珍しい見られ方をした。タモリさんは地形、町、歴史などに興味を持っており、そこをうまく引き出す形で今度は全国へ行っていただき、郷土のよさなども伝えながら、親子で楽しめる番組にしていきたいと思っている。

タモリさんが毎日出演していた民放のお昼の番組では、彼のひとつの側面が出ていたと思う。一方、タモリさんは知的な興味もたくさん持っているので、「ブラタモリ」はそのような興味を生かした、地域、歴史、地形などを探る、ＮＨＫならではの番組になっている。今回はさらにパワーアップしており、タモリさん自身も驚くような地域の不思議なところ、おもしろいところをご覧いただきたい。

○　「これでわかった！世界のいま」には期待したい。解説能力ではＮＨＫ出身の池

上彰さんの活躍が目立っているが、ポスト池上彰さんを育てる構想はあるのか。

（ＮＨＫ側）

池上彰さんは「週刊こどもニュース」などで解説能力を高められた。「これでわかった！世界のいま」は、複雑な国際情勢を、子どもから大人までを対象に分かりやすく解説する番組で、単なる解説というよりも、映像やＮＨＫの取材力をきちんと生かした番組にしようとしている。この番組だけには限らないが、解説能力のある専門家を今後も育てていきたいと思っており、この番組もそこにつながればよいと考えている。

○　「ニュース　シブ５時」の「シブ」の意味を教えてほしい。ピンとこない。

（ＮＨＫ側）

「ニュース　シブ５時」は耳に慣れない番組名だと思うが、「シブ」とは渋谷の「シブ」のことだ。渋谷の話題だけ、東京の話題だけを伝えるわけではなく、全国の情報を渋谷から発信するという意味合いの愛称として呼んでいただきたいという思いで「ニュース　シブ５時」という番組名にした。

○　スポーツでは「全豪オープンテニス」をＮＨＫで放送することはうれしい。ＢＳの民放局でも放送するが、それとの違いをどう出そうとしているのか、考えがあれば聞かせてほしい。

（ＮＨＫ側）

「全豪オープンテニス」は民放がＢＳ、ＮＨＫは地上波の放送権を取得した。錦織圭選手の試合については、できるだけリアルタイムで試合を中継したいと考えている。錦織選手以外のトップ１０に入るような選手の試合については夜中にダイジェストで見ていただく予定だ。

○　海外滞在中でもＮＨＫオンデマンドを利用できるように、と以前お願いした。

（ＮＨＫ側）

昨年１１月にインターネット実施基準について総務大臣に

認可申請し、認可が下りるのを待っているところだ。海外からＮＨＫオンデマンドに接続するのはさまざまな問題があり、検討はしたが、すぐに実現は難しい状況だ。引き続き検討課題としたい。

○　私は「ブラタモリ」が好きで、よく見ていた。民放での昼の放送がなくなったせいもあるかも知れないが、テレビでタモリさんを見るとホッとするし、姿を見るとうれしくなる。家族も同様で、「タモリさんが出ているから見よう」と言っている。

○ 新しい編成が大変楽しみだ。土曜日の夜は家族でテレビの前にいることが多いが、どうしても子ども主導となり、子どもが見て楽しそうなものを見ることが多くなる。大人が見たいものはほぼ見られないのが現状だ。ファミリーで楽しめるものを放送してくれると大変うれしい。

○　「ＣＯＯＬ　ＪＡＰＡＮ～発掘！かっこいいニッポン～」は引き続き放送されるのか。

（ＮＨＫ側）

ＢＳ１で日曜日の午後６時から「ＣＯＯＬ　ＪＡＰＡＮ～発掘！かっこいいニッポン～」を引き続き編成する予定だ。

○　「オトナへのトビラＴＶ」も好きな番組だ。若い人たちがどんなことを考えているのか、大変参考にしており、毎回楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

Ｅテレで木曜日の午後７時２５分から「オトナへノベル」という番組を放送する。「オトナへのトビラＴＶ」と同様、若い世代の不安や悩みに応えていく番組だが、ホームページ上で連載するオリジナル小説とも連動していくなど、内容も刷新し新番組として放送する。

○　いろいろと分析をされ、総合テレビの土曜日の夜に視聴率、リーチを上げようということで、大変意欲的に取り組まれている。成果に結びつくとよいと思う。「超絶　凄（すご）ワザ！」などは大変おもしろい。午後８時台が家族で楽しめる時間になればよいと思う。

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２６年度第３四半期・１０～１２月について）＞

○　各波に対する満足度についても報告があり、１０指標に対する評価の平均値と大体同じということだ。教育テレビ（Ｅテレ）、ＢＳプレミアムは６．８で、かなり高い。各波ができれば７以上を目指していくとよいと思う。これからも引き続き努力をしていってほしい。

（ＮＨＫ側）
わずかずつだが改善傾向にあると思っている。

○　総合テレビの１０～１２月の週間リーチの落ち込みについて、政見放送の編成が要因だという分析がされていたが、今回が特に顕著だったということか。政見放送は過去に何度も放送しているが、視聴率が低いというのは、決してよいことではないと思う。多くの人に見てもらうような試み、努力は可能なのか。また、かつてそういう取り組みをしたことはあるのか。政見放送のあり方について、基本的なデータと過去の取り組み、今後の方向性のようなものがあれば、報告してほしい。

（ＮＨＫ側）
政見放送は公職選挙法で放送が義務づけられているもので、その内容や回数なども総務省の実施規程ですべて決められている。したがって、ＮＨＫが編集権を行使し、内容について手を加えるというものではない。ご理解をいただきたい。

編成する時間帯については、いろいろな考え方がある。国政選挙などは重要性を鑑み、できる限り見ていただける時間帯を中心に編成している。そしてそのことによる他番組の視聴率の落ち込みはある。

○　「第６５回ＮＨＫ紅白歌合戦」は視聴率が高かったとのことで結構だと思うが、サザンオールスターズなど、外からの中継で出場する歌手が多かった。日本の歌手の中で、ＮＨＫから見て、ある程度の実力と人気がある人を出すべき、出さなければいけないという問題意識はあると思う。出場歌手の選考基準と今回の総括のようなものがあればお聞きしたい。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫ紅白歌合戦」の出場者はいくつかの指標をもとに選んでいる。全国の視聴者の方々に、誰に出場してほしいかというアンケート調査を行い、その結果が１つの指標となっている。あわせてＣＤなどの売り上げ、オリコンなどのデータがもう１つの指標だ。イベントなどの動員数なども調べ、総合的に判断している。順位の高い方から出場への交渉をしていくが、すべての方が交渉に応じていただけるわけではない。なるべく皆さんの意向に沿った方たちに出場していただけるよう努力している。

○　データの取り方で教えてほしい。各波の接触者率について、１週間に５分以上見た人の割合とあったが、５分以上というのはずいぶん短いと思う。もう少し長く見ている人を集計することはしないのか。また、５分という基準はどう定めているのか。例えば５分の方と３０分以上の方で評価が違うというデータを過去に取ったことはあるのか。

（ＮＨＫ側）

５分以上の継続視聴を接触と捉えており、同じ尺度で継続的に測定して動向を把握するため、一貫してこの尺度を用いている。

＜放送番組一般について＞

○　１２月２２日(月)のＮＨＫスペシャル「調査報告“消えた”子どもたち～届かなかった“助けて”の声～」(総合 後 7:30～8:13)は、いわゆる行方不明になっている子どもたちを捜す番組かと思っていたが、全く違う番組だった。本人が学校へ行きたくないという不登校ではなく、親が学校に行かせず、社会との接点がなくなってしまった子どもたちの問題を取り上げていた。ＮＨＫ独自のアンケートによる調査報告で、評価できる番組だと思う。親の都合で学校や社会から隔絶させられている子どもたちについて、親と学校側が話をしているから大丈夫だろうと考えられていたケースや、近所に住む子どもが学校に行っていないことは分かっていても、親子の問題だからと行動を起こさないケースなどが具体的に取り上げられていた。どのケースも、子どもたちは「助けてほしいが助けてくれる人がいない」「誰か私を見つけてほしい」と言っていた。日本はこんな国だったのかと、つくづく感じた。

調査によると社会的に“消えた”子どもたちを１０年間で 1,039 人保護したということだ。本当に衝撃的な番組だった。

○　１２月２８日(日)のＮＨＫスペシャル「子どもの未来を救え～貧困の連鎖を断ち切るために～」(総合 後 9:00～9:58)は、格差の拡大、貧困の連鎖をどう断ち切るか、２人の専門家と議論しながら社会問題として提起していた。食べる物にも困っている子どもたちが、お金がないから学校へ行けない、親にも申し訳ないと自ら言っていることばがショッキングだった。子どもの６人に１人が貧困の状態で、年収 122 万円未満の世帯で暮らしている。大手企業のボーナスが８０万円、100 万円と言われているときに、年間 122 万円しか収入がない人がいるという事実にやるせない思いがした。今回は子どもに焦点が当たっていたが、女性の貧困という問題も根は一緒だと思う。女性が輝く社会を、と言いながらもシングルマザーが貧困生活を送っており、ひとり親世帯の貧困率はＯＥＣＤ加盟２０か国で最低という事実をどう考えたらよいのか。貧困の連鎖からどう抜け出すのかは大きなテーマであり、引き続き取り上げていってほしい。国の重要な政策課題でもあると思うので、次に番組を制作する際には、それらの問題に取り組んでいる国の担当者にも取材し、国として何をしているのか、どういう方向で日本を導いていくのかというところもきちんと伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「子どもの未来を救え～貧困の連鎖を断ち切るために～」は実態を報告するだけではなく、いかに解決策を考えるかが重要だと思っていた。取材現場とも話し、実際にどうしたら救うことができるのか、解決策も含め描くよう努力した。子どもが引きこもってしまい、社会と接触できなくなっている例はいくつもあった。学校や近隣に住む住民、ＮＰＯの取り組みなど、少しでも前に向かっているような例を挙げた。国も政策を出しているが、まだ緒についたばかりで、これからも解決策について続けて取材していきたい。

○　私も番組を見たが、よい問題提起だった。ＮＰＯが支援のために行っているフードバンク活動などの紹介もよかったと思う。そういう問題が社会の中にあるということを引き続き報道していただき、解決策が作られる方向に行けばよいと感じた。

○　１月１日(木)のＮＨＫスペシャル「京都御所～秘められた千年の美～」(総合 前 7:20～8:18)は、ＮＨＫでなければ撮れない番組だと思った。桧皮葺(ひわだぶき)

の施工の様子など、工夫して撮影されていてよかった。

○　「第６５回ＮＨＫ紅白歌合戦」は視聴率がよかったようで何よりだ。「ＮＨＫ紅白歌合戦」の視聴率はいつも第２部のほうが高いのか。

（ＮＨＫ側）
大体そういう傾向で出ている。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」はいつも見ている。第１部は若い世代向けのせいか、若い歌手たちが大勢出場していた。大変にぎやかだったが、歌番組を見ているのか、劇を見ているのか、よく分からない感じだった。それでも視聴率はある程度記録しているようで結構だったと思う。

○　年末年始の特集番組については、全般的によい番組、工夫している番組、丁寧に作られている番組が多いという印象を受けた。

○　１２月２７日(土)の大河ドラマ「軍師官兵衛」総集編(総合 後1:05～2:58、3:05～4:58)と、１２月３０日(火)の連続テレビ小説「マッサン」総集編　前編「Ｄｅａｒ　Ｍｏｔｈｅｒ～縁は異なもの～」(総合 前8:00～9:28)などドラマの総集編も大変要領よく、工夫して作られていると思った。

○　年末年始の特集番組は、Ｅテレも大変意欲的に取り組んでいてよかったと思う。

○　１月１７日(土)前後に阪神・淡路大震災から２０年の関連でいろいろな番組を放送してくれた。私自身、地震でも壊れない建物について５０年近く研究している。当時の震災の映像を見せられるとひどい状況だったと思うが、２０年たった今でも大勢の高齢者が苦しんでおり、解決していない課題があることに研究者として反省することも多い。大変よい番組をたくさん放送してくれて感謝している。

○　１月１３日(火)のクローズアップ現代「ヘイトスピーチを問う～戦後７０年　いま何が～」を見た。見る人の立場によって意見が割れるテーマだと思うが、海外での日本に対するヘイトスピーチを取り上げていないことに対しては、さまざまな意見があるかと思う。そういった立場とは別に、国連人種差別撤廃委員会の取り上げ方について気になったことがある。番組では「国連は」という主語で「世界各地に広がるヘイトスピーチに警戒感を強めています。去年８月、日本政府に対しても法律で規制するよう勧告しました」というナレーションがあった。その後に国連人種

差別撤廃委員会のクリックリー副委員長が登場し、「日本政府は、事の大きさを自覚しなければならない」と言っていた。さらにナレーションで、「国連がヘイトスピーチに厳しい姿勢で臨む背景には、歴史の教訓があるといいます」と続いていくが、これは、視聴者に国連人種差別撤廃委員会が国連の機関と誤解されるような言い方だと思う。国連人権委員会は国連の機関で、各国政府の人間がメンバーとして構成されている。一方、国連人種差別撤廃委員会は国連の機関ではなく、いわば補助機関と言ってもよい。メンバーもＮＧＯで構成されており、国を代表する人たちが入っているわけではない。そもそも勧告には法的拘束力もない。これがあたかも国連の正式機関のように番組で取り上げられていたことは問題だと思う。一種の誘導になっていないのかどうか、大変気になるところだ。

（ＮＨＫ側）

クローズアップ現代「ヘイトスピーチを問う～戦後７０年いま何が～」には、500 件近い意見を頂いた。番組を制作した意図としては、ヘイトスピーチに潜む、大きな事件につながっていく危険性について指摘するということだった。そのため、イスラムテロやギリシャの例など海外の事例も含め広く取り上げ、社会や異なる民族、人種がうまく暮らしていけるようにという思いで制作した番組だ。国連と補助機関の取り扱いについては現場とも議論し、次回に回答したい。

○　「超絶　凄（すご）ワザ！」は、大変おもしろかった。何かを分析したり教えるような番組ではないが、素材そのものが持つすごさを引き出す技術を、工夫された映像で表現しており、見る人を引きつけてしまうおもしろい番組だ。

○　私の周囲の２０代にＮＨＫのどの番組を見ているか聞いてみたが、「サラメシ」が結構見られている。社員のために５０人分のカレーをつくる社長がいるなど、見ていて心がホッとする番組だ。女性にとってランチは大きな存在で、それを聞いてから私も見るようになったが、大変よい番組だと思う。

○　１月２日(金)の「１００分ｄｅ日本人論」（Ｅテレ 後 9:30～11:10)を見た。内容が大変優れていて、討論番組としても一級で、とても印象深かった。昔から日本人は二項対立でなく、第三項も用いる思想を持っているという話を、いろいろな方が名著を読み解きながら展開していた。私は討論番組について指摘させてもらうことが多いが、「１００分ｄｅ日本人論」では、出演者のひと言ひと言が練られており、対話を重ねてきていることばだと感じた。思いつきの発言もあってもよいが、

心に残るのは練られたことばだと思う。関連して、１月２日(金)の「日本列島誕生～大絶景に超低空で肉薄！」(総合 後7:30～8:43)の場合も、バラエティーでありながら１人の専門家がいるだけで印象がかなり違っていた。専門家でなくても、その道の人、当事者、当事者を支えている人などが１人加わるだけで、バラエティー番組も民放とは違う問題提起型になると思う。バラエティー番組にその道の人を起用するというパターンを今後も実施していってほしい。

○　興味深かった番組は１月９日(金)から始まった「パリ白熱教室」だ。番組の内容は出版されている書籍とほぼ同じで、書籍の内容をたどるような授業だったが、トマ・ピケティ教授が強調したい部分がどういうところかがよく分かった。グラフや表なども日本の視聴者にも分かりやすいように工夫されていて、大変興味深い番組だと思うのでぜひ継続してほしい。「白熱教室」シリーズはどの程度の視聴率なのか、どの程度の関心を呼んでいるのかが知りたい。また、「パリ白熱教室」は本物の授業を収録しているのか、あるいは放送用に改めて講義を開いたのかも教えてほしい。この番組のＮＨＫオンデマンドでの配信についても教えてほしい。１回目を見ようとしたが、見られなかった。

（ＮＨＫ側）

もともとあった授業を放送用にしつらえて収録したと思う。ＮＨＫオンデマンドでの配信については調べてみる。再放送等の計画についても、調べてからお答えしたい。

昨年度放送した海外シリーズの「白熱教室」の視聴率は平均０．４％だ。女性の４～１９歳などの若い世代にも見ていただいている。

○　子ども向けの番組はターゲットがはっきりしているが、高校や大学、新社会人の人たちが学べる番組にはどういうものがあるのか。「日曜討論」でも選挙の投票率が低いと言っていたが、これから政治を理解しようと思っている人に向けた番組はあるのだろうか。日本人は金融リテラシーが低いと言われているが、学生たちに教える番組はあるのか。「オイコノミア」は経済番組ということだが、これまでそのような認識はなかった。これらの番組について、現状とこれからどう工夫されていくか知りたい。

（ＮＨＫ側）

Ｅテレでは、若い社会人などの世代をターゲットにした「オ

イコノミア」や「人生デザインＵ－２９」などの番組がある。ローティーンやハイティーンを対象にした番組もある。Ｅテレでは視聴ターゲットを分けて編成している。今後もターゲットを明確にした番組を増やしていくために努力していく。

○　「グレーテルのかまど」は楽しい番組だ。子どもから大人まで楽しめる身近な物語や料理が紹介され、出演している２人の掛け合いも楽しく、品のよい番組だと感じる。こういった工夫がほかの番組にもあるとよいと思う。

○　１月１８日(日)に全国消費生活相談員協会による「老人ホーム関連トラブル１１０番」を行った。このような相談の内容を取材していただき、老人ホームの問題についても、積極的に報道していただきたい。

（ＮＨＫ側）

老人ホームの件については関心も高く、切実な問題だと認識している。担当者と検討したい。

○　爆笑問題がＮＨＫでの番組出演の際に、政治家についてのネタはやめてほしいと言われたと新聞報道で見た。それに対し、会長が「個人名を出すことは品がない」というコメントをされたということだが、ＮＨＫは出演者が発言することに対して、ここまでは言ってもよいが、ここまでは駄目と、どのような形で言っているのか。見える形で私たちにも教えていただけたらと思う。

（ＮＨＫ側）

私はその件について新聞報道で知り、事情が分からない時に記者会見で聞かれた。「個人名を出して笑いを取るのは品がない」と申し上げた。お笑いのネタの選別ということではなく、番組の中でどれだけ気の利いた笑いをとれるかという話だ。われわれは放送法にもとづき、事実にもとづいて公平・公正、不偏不党と常に言っている。ご理解をいただきたい。

○　一つの見識として結構だと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２６年１２月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

１２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１５日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成２７年度国内放送番組編集の基本計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、ＮＨＫスペシャル「攻防 危険ドラッグ 闇のチャイナルートを追う」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
有森　裕子（元マラソンランナー）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
鎌田　實　（諏訪中央病院名誉院長）
佐野真理子（主婦連合会参与）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）

（主な発言）

＜平成２７年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～諮問～＞

○　前回の予備審議のときに委員の出した意見が反映されているので基本的によいと思う。「各波の編集方針・総合テレビジョン」の放送番組の部門別編成比率について「教養番組２０％以上、教育番組１０％以上、報道番組２０％以上、娯楽番組２０％以上」とあり、バランスの取れた編成に取り組むことになっているが、実態は報道番組が４割前後になっているとのことだ。公共放送にとって、的確で正確な

報道がなされることは重要なことであり、報道について力を入れているというメッセージを伝えるためにも、ある程度実態にあわせた目標を設定したほうがよいのではないか。平成２８年度以降は検討してほしい。

○　消費者問題について「日本や世界が直面する課題」に含まれるということで理解する。今後１年間で、消費者問題に関する番組を制作していってほしい。

○　それでは前回の審議と併せ、各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とし、答申したい。

（ＮＨＫ側）

番組審議会の答申をいただいたので、このあと経営委員会に「平成２７年度国内放送番組編集の基本計画（案）」を提出する。経営委員会の議決を経た後に、来年度の具体的な番組編成を決定し、番組時刻表を含めた編成計画について、次回１月の番組審議会で報告する。

＜ＮＨＫスペシャル「攻防　危険ドラッグ　闇のチャイナルートを追う」（総合　１１月３０日(日)放送）について＞

○　危険ドラッグの危険さなど、深刻な状態であることがよく伝わってきた。日本の規制が追いつかない実態を改めて見て、大変印象的だった。中国の関係者とコンタクトできたこともすごいことで、驚きとともに高く評価したい。その人物の「この仕事はすでに産業として成り立っている。これでみんなが豊かになった。私たちは合法のものしか作っていない」ということばに衝撃を受けた。

気になったのは、一般の人が危険ドラッグに簡単にたどり着けるということだ。番組では、今までのドラッグや麻薬とどう違うのかがあまりよく分からなかった。３０代の男性が「友達に誘われて使ったが、記憶障害、妄想が出てきて怖くなったからやめた。でも、何かのきっかけでもう１回使うかもしれない」と言っていた。今までの私のイメージでは、１回始めてしまったら、簡単にやめられないものだと思っていたが、あんなに簡単に始めたり、やめたりできるのかと思った。依存性などについて今までのドラッグとどう違うのか説明してほしかった。また、国民への注意喚起の必要性を厚生局の方が盛んに言っていたが、それに対する日本の政策が見えてこなかった。販売している店を検挙しているだけでなく、政策として考えていることがあれば伝えてほしかった。

（ＮＨＫ側）

危険ドラッグの使用を簡単にやめられると感じられたということについては、われわれが意図したこととは逆で、やめようとしてもまた簡単に使用してしまうということを表現したかった。危険ドラッグは、覚せい剤と同じように依存性が強く、使用をやめることは本当に難しい。番組で紹介した方は、現在たまたまやめているが、使用の衝動は常にあると言っていた。やめることは難しいということを感じてもらうためにあのような表現にした。

○　今回の番組では、依存性についてさらりと触れられていて、その意図が感じられず危険ドラッグは依存性がないのかとまで思った。依存性が大変高いということをもっと強く伝えたほうがよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

これまでのドラッグとの違いについてだが、覚せい剤や大麻は知見が積み重なってきており、医学的な対処方法もある程度確立されてきている。一方、危険ドラッグは次々に未知の化学物質が生み出されており、体内に取り込まれた際にどのような副作用があるのか、どのような症状が体に出るのかが分かっていない。そのため覚せい剤よりも危険なのではないかと言っている専門家もいる。こういった得体の知れなさは危険ドラッグの特徴だと言える。

○　この番組を視聴する前に、１２月１日(月)に放送していた関口宏の“そもそも”「ドラッグってなんだ！？」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:59)を見ていたため、ドラッグの怖さについてさらによく理解できた。危険ドラッグに対する中国側の対応が鈍いと感じ、早急な対処を期待したいと思った。

巧妙な密売者を追跡しながらの取材は、恐怖を伴う大変なものではなかったかと敬服する。番組の中で危険ドラッグの売人が「被害が出ているにもかかわらずなぜ売り続けるのか」との質問に「もうかるからだ。いたちごっこのゲリラ戦だ」と発言していたことにはあきれ、日本国民として残念だった。「関口宏の“そもそも”」では人間の技術進歩の末に生まれたものとして、薬と核の話題があった。人間が生んだそれらのものに対して適切にコントロールしていかなければならないことを併せて知った。汚染大国にならないように今後もＮＨＫが主導的な立場で継続的に啓発していく必要があると思う。正しい教育や、薬に近づかないという国民理解

が必要だと強く思った。今後も頑張って番組を制作してほしい。

○　今年になってから危険ドラッグのニュースがよく報じられているが、ともするとニュースに慣れてしまいがちで、影響などの実態がなかなか分かりづらかった。その実態を見える化してくれた点ですばらしい番組だったと思う。とりわけ、危険ドラッグ使用者が起こした事故に巻き込まれて亡くなった消防士の父親の悲しみに触れ、この問題は本当に深刻だと分かったし、テレビならではの見える化、ＮＨＫならではの取材力に改めて敬服した。知られざる実態に迫るところが目的ということだが、そこは十二分に達成されたと思う。知りたいのはその先に何をねらっているのかということだ。「いたちごっこのゲリラ戦、危険ドラッグはもうかる」という売人のことばが流され、中国からの危険ドラッグのルートも決して違法ではない水面下で行われていて、どんどん侵食されていく様子を見ていて、無力感を感じた。ここまで実態を掘り起こし、視聴者の意識を喚起する先に何を考えているのか伺いたい。放送されてから１０日以上たつが、視聴者からの反応にはどんなものがあったのかを教えてほしい。番組の影響力を改めて考えられるのでないかと思う。

（ＮＨＫ側）

意識喚起の先に何があるのかと言われると難しい。危険ドラッグの怖さを、例えば若い世代など１人でも多くの人に知ってもらい、手を出さないようにしようと思ってもらうことがテレビの役割だと思う。視聴者からは「怖さがよく伝わって、こんなおぞましいものだったと初めて知った」「ニュースでたくさん出てくるので慣れてしまっていたが、改めて気付かされたものが大きい」という感想も頂いた。われわれの意図していた食い止める一助になりたいということは視聴者に少しは伝わったのでないかと感じる。

○　捜査当局が知らなかったことがＮＨＫの取材で明らかになったことはあるのか、捜査当局から何か反応はあったのか。

（ＮＨＫ側）

直接詳しくは聞いていないが、捜査当局からも中国の実態をほとんどつかめていなかったので驚いたという感想を頂いたと聞いている。捜査権が中国には及ばないので、そういう意味ではわれわれのほうが調べやすいのかもしれない。

○　大変よく出来た番組だと思ったが、危険ドラッグがどれほど危険なのかは医療の専門家の意見があればよかったのではないかと思う。危険ドラッグを使用した人が自動車を暴走させる映像を見て、一時的な妄想で引き起こされているという印象を持たれるかもしれないが、使用の影響はそれどころではなく、脳の機能が回復しないような脳細胞への被害も起きていることがかなりはっきりしてきている。麻薬などよりもよほど怖いのでないかということを医療の専門家からきちんと言質を取り、例えば苦しみの中で半年治療したが改善していない人のインタビューなどがあると、４０万人の危険ドラッグ使用者が大変な状況にあることがもっと見えてくる。

また、危険ドラッグの取り締まりがいたちごっこになっている背景には、法律が甘いということもある。危険ドラッグについて関心のある国会議員にインタビューすれば、その人たちが新しい波を起こすうえで大事なきっかけになると思う。インタビューを受けた政治家がそれなりの意識を持てば、超党派ででもできるだけ早くこの問題に取り組むことにつながる。そういった動きを作り出せる番組になる可能性はあったのでないか。今の時点では 100 点満点だと思うが、まだやるべきことはたくさんあると思う。

（ＮＨＫ側）

放送の直前に取り締まりを強化するための法律が改正された。そのことについては番組の最後で触れた。これからも継続し、危険ドラッグの問題を取材し、社会を動かす力にならなければいけないと思う。

○　大変意欲的な取材で、これまで解明されていないところに踏み込んだ番組でよかったと思う。一方で、普通に生活していた石川県の男性が製造者になってしまう事例のように、日本の国内において麻薬などと関係なかった人が密造に関わってしまう経緯、どういうネットワークが張られていて、どのように組み込まれてしまうのかという部分もあれば、もう少し全体像が見えたと思う。

今年になってから危険ドラッグの話がクローズアップされてきている。危険ドラッグは突然出てきたものなのか、これまであまり気にしておらず、潜在的な裾野がどんどん広がって、今年になってクローズアップされてきたのか。闇のチャイナルートを追うということとは違うが、もう少しそうした背景も分かったほうがよい。もし潜在的に広がってきたとすればそういうことが起きる時代背景、社会的な問題も理解したほうが、危険ドラッグだけでなく、今後起こりうることに対する予防にも役立つと感じた。

番組の中で「この仕事は産業として成り立っている。これでみんな豊かになった」というコメントがあった。とんでもない発言だと思いがちだが、一方で麻薬も同じ

ことだ。ミャンマーでもアフガニスタンでも麻薬の製造と貧困は切り離せない問題となっている。貧困と反社会的な薬物の製造をどうとらえていけばよいのか、日本はどういうことができるのかという視点の番組を制作してもらえれば、もっと根本を理解できるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

能登の普通の男性がどうして危険ドラッグに関わることになったのかについては、取材が追いつかなかった部分もある。借金ができた際に、夜の街で声をかけられたのがきっかけだった。最近よく言われる“半グレ”と呼ばれる、表と裏の社会の間にいるような人たちから声をかけられ、製造方法が書かれた紙を渡され、中国から送られてきた原料で簡単に作ってしまう、という構図があることが取材の中でもある程度見えてきた。確かにそこが描けると全体像がもっと描けたと思う。危険ドラッグは２年ぐらい前から問題になっており、ＮＨＫでは２０１２年６月２５日(月)のクローズアップ現代「危険性増す脱法ハーブ　どう食い止めるか」で取り上げ、大きな問題になりかねないと伝えた。その後政府の対策として、同じような化学構造を持つ危険ドラッグを包括指定して、取り締まりの対象にしたが、さらにそれをすり抜ける危険ドラッグが次々と生み出されるようになった。それが今年に入ってからの動きだ。専門家によると「規制をすればするほど、次々と未知の化学物質が製造され、どんどん強力化しているのではないか」とのことで、結果、番組で紹介したような事故が相次ぎ、亡くなる人が増えるという深刻な問題になってきている。規制すればするほど、さらに危険が高まるという皮肉な状況になっていると思う。麻薬と貧困の結びつきについては頂いた意見を参考にし、今後も取材をしていきたい。

○　危険ドラッグについて、ニュースでは聞いていたがこんな状況になっているとは思わず、番組を視聴して恐怖感を覚えた。社会から根絶したいという気持ちで制作したという思いは伝わってきた。「違法ではないから」ということばの魔力、店舗販売は取り締まれるがネットでの取り締まりは厳しい現実など、決して自分に無関係ではなく、すぐ隣で起きている出来事であることも感じた。自分の子どもが成長していく中で、ちょっとした悪ふざけのつもりで危険ドラッグに手を出してしまえ

る環境であることを非常に怖いと感じた。気軽にたばこを吸うような感覚で、危険ドラッグが存在するようになってしまってはとても困ると親としても強く思った。

番組を見た後で自分でも調べてみたが、東京都福祉保健局のインターネットサイトが大変分かりやすく作られていて、危険ドラッグを勧められた際の具体的な断り方や、身近にそういう誘いがあることなどが掲載されている。今回の番組を見なければそういうサイトがあることも知り得なかった。自分の子どもに伝えるきっかけにもなった。引き続き取材を続けて欲しい。

もともと覚せい剤は怖いものだと思っていたが、危険ドラッグのほうが怖いのではと今改めて感じている。「危険ドラッグ」ということば自体について、大変軽く感じる。中学生、高校生、大学生も軽い感じに受け止める気がする。ことばの在り方についてもいろいろ考える機会になった。

（ＮＨＫ側）

視聴者から「危険ドラッグでは生ぬるい。殺人ドラッグという名前にすべきでないか」という意見も頂いた。

○　スポーツの世界ではドーピングの問題があるが、オリンピック開催時に、中国の水泳選手が検査に引っ掛かり、さまざまに取り上げられた時期がある。その際もドーピングについて調査した番組が放送され、製造側の人が堂々と顔も出し、カメラに向かって「需要があるから悪いことをしていると思っていない」と言っていた。今回の番組で中国の関係者が「産業になっている。生活が豊かになっている」ということを悪びれずに言う感覚に大変似ている。ドーピングもいたちごっこで、前は１つだけの薬だったものが、３種類、４種類と微妙にミックスされ、現在ではカクテルと呼ばれるものが主流になっている。取り締まれば取り締まるほど、新たな種類が考え出され、また悪びれずにやるという連鎖に大変似ている気がする。昔は学校の道徳の授業の場などで、番組を見る時間があった。見せ方は気をつけなければいけないが、こういった番組を子どもたちにも見てもらい、危険ドラッグなどが感覚的に怖いものだということを教えていくことが重要ではないか。

○　番組を最初に視聴した時点では、問題提起としてはよいと感じたが、２回目に視聴して、危険ドラッグを使用した本人の悲惨さについての訴えが不十分だと感じた。事故に巻き込まれた人の悲惨さを訴えるだけでは伝わらない、使う人自身に悲惨な問題が起きるということ、大きな危険にさらされるということが十分に伝えられていなかった。実際に使用してどんな危険があったのか、亡くなった例も含め、使用することの悲惨さを取材し、次のシリーズではもっと掘り下げてほしい。

包括的な規制は整えられたが、今の規制だけでは不十分だと思う。少しずつ化学

構造を変えることで違法とは認定されない、そういう規制で本当によいのかという問題提起も必要ではないか。立法府の取り組み方についてそれでよいのかということを取材し、訴えかけてほしい。以前、産婦人科医が不足し患者がたらい回しにされるという問題があったが、個別の病院の問題というよりも実際は産婦人科、救急病院の体制が不十分なことが原因であり、今の病院の医療の仕組みではそういう問題が起きるということをキャンペーンのように伝えた結果、救急医療等の整備が進んだところがある。この危険ドラッグの問題についても、今の立法府の取り組み方で本当に問題を解決できるのかということを、医療の人たちも含め、取材し、もう１回問いかけてほしい。

「首都圏ネットワーク」で振り込め詐欺を防ぐためのシリーズが放送されているが、詐欺被害がなくならないため、いろいろな詐欺の手口を示してくれている。危険ドラッグについては、使用者が４０万人もいるということだが、問題が解決するまでシリーズで問いかけ、一過性に終わらせずにいろいろな番組で取り上げてほしい。今回の番組は第１弾としてよかったと思うが、ＮＨＫとして続けてほしいという印象を持った。

（ＮＨＫ側）

取り締まりの現場で何がいちばん難しいかというと、覚せい剤には試験薬があり、その場で覚せい剤を使ったことがすぐに判断できるが、危険ドラッグは形が変わっていくため、対応する試験薬もなく、その場で使ったことを特定できないことだ。化学の現場でも一生懸命その状況に追いつこうとしていて、脳に影響を与えるようなものに対して一括で反応する薬品を開発しようとしている。こうしたことはニュースでも伝えているが、番組の中でそういう動きについて入れてもよかったかと思う。

○　たまにニュースで取り上げるのではなく、継続的に取材し、問題提起をしたらよいのではないか。使用している人の悲惨さについてもっと取材をしてもらったほうがよいと思う。

○　危険ドラッグについては、時々ニュースで部分的に見たことはあるが、この問題についてこれだけ長い時間にわたって見たのは初めてで、インパクトのある番組だと思った。よく取材先を探してこられたと感心した。一方で、どんどん広がっているということについて、番組で解決策を提示できるわけではなく、むしろ使いたくないと注意を喚起することが重要ではないかと思う。「証言記録　東日本大震災」

は、東日本大震災の津波の際にどうだったかということを定期的に伝えている番組だ。ＮＨＫが東日本大震災のことを忘れない、被災地のことを忘れないということを示している優れた取り組みだと思う。それと同様に、繰り返すことによって、この番組を見られなかった方たちが危険ドラッグの怖さに気づくということも大事なことだと思う。

（ＮＨＫ側）

いろいろな機会をとらえ、伝えていくことで効果が出てくると考える。制作部局とも相談しながら考えたい。

根元から断つことが大事だと思う。産業になってしまっているということは、このままでは無くならない。手軽に買えることも大きな問題だと思う。

○　社会的な問題について、特に調査をしながら問題提起をしていただくことは大事なことだ。引き続き取り組んでいただきたい。

＜放送番組一般について＞

○　「ためしてガッテン」は大変よい番組で、いつも興味深く見ている。１１月１２日(水)の「３分で８割減！　肝臓がん撲滅ＳＰ」は３分間の検査を受ければ肝臓がんの８割ぐらいはなくなるという番組だった。あれだけよくネタを探してくるものだと思う。番組制作者は大変だと思うが、いつも興味深く見ている。

○　１２月６日(土)の幻解！超常ファイル　ダークサイド・ミステリー「Ｆｉｌｅ－２３・怪奇！ロンドン心霊ブーム・Ｐａｒｔ２　名探偵ホームズと妖精写真事件」を見たが、肩の力が抜けたよい意味での大変くだらない番組だった。コナン・ドイルは内科医で科学者でもあり、「霊などない。物体はなくなれば存在はすべて終わる。魂が生き続けることなど賛成しかねる」と言っているにもかかわらず、妖精が写っている写真を信用してしまう。ドイルの死後、写真を撮った少女が偽物だと発表したことが番組で描かれていた。超常現象については、解明しようとする一方で、私たちには分からないことがきっとあるだろうと多くの人たちが思っている。そういったことを肩ひじ張らずにうまく伝えていた。

○　娯楽番組でよいものがあったので報告したい。たぶんＮＨＫの番組だと思う。な

ぜあやふやかというと、テレビを見るときに改めてこの番組を見ようと構えてスイッチを入れるときもあるが、そうではなく、何となくスイッチを入れてボーッと見たくなるときもある。とても疲れて帰ってきて、部屋には何の音もなく、寂しいと思ってテレビをつけたときに福山雅治さんのライブの映像が流れていた。福山さんのアジアツアーの模様だったが、もともと好きな歌手だったので何となく見たが、台湾や香港のツアー先で、東日本大震災への支援へのお礼を、現地のことばで伝えていた姿が大変印象的だった。こういう形で国際交流が行われていることに感心した。疲れているときにタレントがひな壇に並んで騒いでいるようなバラエティー番組は見たくない。そういう番組はＮＨＫでも時々放送しているが、民放に任せてよいかと思う。今回の番組は、福山さんを追い続ける意味で取材も大変だったと思うが、視聴後に爽やか気持ちになり、ＮＨＫならではの娯楽番組だと思った。

（ＮＨＫ側）

委員に視聴していただいた番組は、１２月６日(土)に総合テレビで放送した、ＳＯＮＧＳ「福山雅治～アジアへの挑戦～」だ。ありがとうございます。

○　１２月７日(日)の「決定！第１２回ミニミニ映像グランプリ」(総合 後 4:00～4:59)を見た。非常に楽しい映像がたくさん紹介されていた。わずか３０秒、120秒の映像で自分の意思を伝える、何を表現したいのかを伝えるということに大変感激した。３０秒部門で１位になった年配の方は、制作した映像の意図をいろいろ聞かれても「深く意図していない」としか答えていなかったが、意図していないとは思えないほど非常におもしろい映像だった。120秒部門では、恋をしている高校生が、自分の恋心に勝てずにあるうそをつき、そのことに戸惑う表情で映像が終わり、その間がよいということで１位になっていた。応募者それぞれがいろいろなことを考えて映像を制作していることがよく分かった。なかには将来監督になりたいという人もいたが、ぜひこういった番組を長く続け、すばらしい監督をたくさん輩出するような番組になってほしいと思った。

○　１２月１４日(日)の「『ダウントン・アビー』の舞台　ハイクレア城の秘密」(総合 後 4:03～4:55)を見た。「ダウントン・アビー　華麗なる英国貴族の館」は第１回からずっと見ており、城に住んでいる伯爵の方が出られるということで、これは見なければいけないと思って見た。すばらしい城の中に夫婦で住んでいるが、維持費に１億円以上かかるということにびっくりした。その１億円以上のお金はどこから集めてくるのかということが最終的にはよく分からなかった。どんな伯爵夫婦なのかと思っていたが、普通の中年夫婦で驚いた。城の中で働いている執事、庭担当

の方などが昔のままで、あまりにも現実離れした生活を送っているのを見て、こういう生活が現存しているのもイギリスならではなのだろうと思った。食器の置き方ひとつについても全く変えず、それを維持していることこそが重要だと執事が言っていたが、それは本当にそんなに重要なのか、非合理的ではないかなど、いろいろなことを考えた。国の違い、場所の違い、それでもそれを守らなければいけないと思う彼ら、それを守ることがすばらしいと思う彼らを見て、自分自身のことを振り返った。「ダウントン・アビー　華麗なる英国貴族の館」の続きを、今回見た伯爵たちの姿を思い浮かべながら見たいと思った。

○　私はあまりドラマを見ないが、「ダウントン・アビー　華麗なる英国貴族の館」は、見始めたら大変おもしろかった。こうした番組を世界から見つけてくることはすばらしいと思う。なかなか複雑でおもしろいドラマなのでこの後も続くとよい。

○　１１月２９日(土)のＥＴＶ特集「臨床宗教師～限られた命とともに～」を見た。若い僧侶が末期がん患者の話し相手になり、最後は自宅で亡くなる方々に寄り添っている姿を描いていた。若い僧侶自身が精神的に成長していく様子も見えた。前立腺がんと胃がんが発見された高齢の男性が、がんの発見が遅れたことに納得できずに不満を抱いていたが、若い僧侶が話を聞いていく間に自分の人生を受容し、最後はニコニコしながら納得し、亡くなっていく。これだけ長い時間カメラが入り、協力してくれた患者さん、家族、臨床宗教師も大変なストレスだったのではないかと思うが、よい番組を作ってくれたと思う。キリスト教系の宗教家たちは長い歴史の中で人間の死に向き合っており、緩和ケアにも聖職者が入り込んでいる病院も多い。仏教系もゼロではなかったが、このようにゆっくりと長い時間をかけ、人の生と死に寄り添っていく宗教家が育ってきていることは大事なことで、多くの人々や日本の宗教家にも知ってもらいたい。こういった新しい動きによって、日本人も死についてそれぞれが自己決定でき、最後までニコニコと、その人らしくいることができるようになるのではないかと思う。とてもよい番組だった。続編を制作し、この動きを広げ、徐々に日本でもこういった取り組みが一般的になればよいと思った。

○　ＥＴＶ特集「臨床宗教師～限られた命とともに～」を見たが、「臨床宗教師」ということばをこの番組で初めて知った。死の宣告をされ、臨終する間際の気持ちは誰にも分からない。死後のことが分からないがゆえに、どう死を受け入れたらいいのか、またどのように最後を迎えたらいいのか、整理のつかない不安と葛藤があると思う。暗闇を安寧にしてくれるのは、臨床宗教師の提唱者である故岡部健医師の言うように、医者が行う緩和ケアとは別のものが必要なのかもしれないと思った。しかし、どんな宗教師でさえ死を体験しているわけではなく、患者それぞれの限ら

れた命にどう向き合うべきなのかはさらなる議論や知見が深められるべきだと番組を見て思った。西洋の先進諸外国には従軍牧師、病院牧師という人々がいるとのことだが、そういった先進諸外国の実態を知りたいと関心が広がった。また、刑務所では老人になって最期を迎える方もいる。そういった孤独な思いで亡くなられる方にも利害得失を超えた臨床宗教による救済がありえるのか、と思いをはせながら番組を視聴した。

○　「シャーロックホームズ」という三谷幸喜さんが脚本の人形劇を毎週楽しみに見ている。人形劇の割に使っている人形の表情が暗めで、怖さを感じるような風貌だ。三谷さんの脚本なのでセリフはおもしろい。声をあてている方たちに有名な方が多く、この声は誰だろうと思いながら子どもと見ている。通常のアニメや人形劇ははっきりとした色遣いで、元気な印象があるものが多いが、あのようなダークな雰囲気の中で繰り広げられる世界も子どもにとってはよいと思いながら見ている。

○　「１００分ｄｅ名著」は大変興味深い番組だ。取り上げる文学作品自体もよいと思うが、ＭＣの伊集院光さんと武内陶子アナウンサーが聡明で、謙虚で、控えめながらも、テキパキと番組をリードするのが極めて上手だ。ＭＣによって番組の印象は相当変わる。この２人に続けてもらえると、この質を保ちながら興味深い番組として存在感がさらに高まるのではという印象を持った。

○　以前、「すイエんサー」が番組審議会の視聴番組になり、委員からは厳しいコメントが多々あがったが、たまたま私の周りの若い方々と話をしていたら「すイエんサー」を楽しみにしているということだった。「身近な科学の問題を極めて入りやすいフレンドリーな形で解明してくれる。子どもが考えながら一緒に見ている。おもしろい番組でファンだ」ということばをいくつか聞いた。そういう声があったことを審議会の皆さんと共有したい。いろいろな世代の人たち、いろいろなバックグラウンドの方たちがＮＨＫを見ている。私たちの意見の他にもいろいろな意見があり、そういった意見も聞いて、この場に反映できれば、よりよい審議会となるのではないかと思う。

○　１１月２８日(金)のＢＳ世界のドキュメンタリー「エボラ出血熱　その謎に迫る」(ＢＳ１　後 8:00～8:50)を見た。「ＢＳ世界のドキュメンタリー」は時々見るが、とてもよい番組だ。エボラ出血熱が世界の大きなニュースになっているが、実は対策がここまで進んでいるということが番組を見て分かった。ワクチンがすでに作られていて、大量生産はできないものの２人のドクターにすでに使用されている。アフリカの人に使わずにアメリカ人に使用しているのだが、その選択がよいのかと

いうことまで描きながら、エボラ出血熱の姿が見えてくるように見事に描かれていた。また、実は 1990 年にワクチンは作られかけていたが、採算が合わないため製薬会社が途中でやめたことも分かり、人間の世界はそういったさまざまな思惑や出来事が重なって成り立っていることも分かった。これだけ大騒ぎになり、ワクチンを急きょ作り、人間に投与し、治したところまできているのだが、一方で、日本の抗インフルエンザ薬が効くのでないかとフランスが中心になって治験を行っている。この番組を見て日本からの薬も期待できたらよいと思いながら、一方ですでにワクチンが出来かかっていることも分かった。こういう番組をＮＨＫが放送していることは立派だと思ったが、制作してくれたらもっとうれしい。

（ＮＨＫ側）

「『ダウントン・アビー』の舞台　ハイクレア城の秘密」、ＢＳ世界のドキュメンタリー「エボラ出血熱　その謎に迫る」など、海外のドキュメンタリーや番組を購入して放送しているのが展開戦略推進部だ。「『ダウントン･アビー』の舞台　ハイクレア城の秘密」はドラマ「ダウントン・アビー　華麗なる英国貴族の館」が想像以上に視聴者に関心を持って見ていただいていることを受け止め、関連した番組も楽しんで見てもらえるのでないかということで放送した。ＢＳ世界のドキュメンタリー「エボラ出血熱　その謎に迫る」も、エボラ出血熱が世界の大きな問題となっていたので関連する番組を探したところ、ＢＢＣがこの番組を制作していたため購入し放送することにした。海外の番組の日本語版を制作するのは多少時間がかかってしまうが、ニュースの状況、視聴者の気分にすぐ反応できるように心がけ、放送していきたいと思っている。

○　１２月１０日(水)のＴＯＭＯＲＲＯＷ「いい湯だな～心に届いた入浴支援～」を見た。自衛隊が被災者の入浴をサポートしている話題だった。自衛隊員は心を込め、笑顔で対応しており、任務だからだとも思うが、一般には知られていなかった点を外国向け放送の外国人記者がリポートをしている点が大変興味深かった。被災者にとって入浴がどんなにうれしいものか。自衛隊員が、心を支えてもらい立ち直った親子が自衛隊員のことを大切に思っていることを外国人記者から知らされ、うれし涙を流していたのを見て、私ももらい泣きした。視聴者の心にも温かさが届いた番組だと感じた。

○　１２月１日(月)のワイルドライフ「英国　スコットランド　荒海にワシが舞いカワウソが泳ぐ」を見た。「ワイルドライフ」はいつも見ているが、映像が毎回生き生きとしており、映像に合わせた音楽も見ている側の気持ちを盛り上げてくれる。どのようにして撮ったのかと思うぐらい動物の表情や動きが大変鮮明に撮られている。見た後に心が満たされ、幸せな気持ちになる。いつも楽しく見ている。

○　総選挙の報道について当確の打ち間違いがあった。各テレビ局は夜８時の投票が終わり、開票の数字も出ないうちに出口調査で当確を打ち出す。ＮＨＫもせざるをえないのだろうが、ＮＨＫが当選確実ということは民放以上に重みがあると思う。今回の当選確実の打ち間違いは開票した票が出る前に出口調査の数字に基づいた予測なのか、開票の途中で出された予測なのか。経緯が知りたい。

（ＮＨＫ側）

　間違ってはいけない当確で打ち間違いをし、大変申し訳ないと思っている。当確の打ち間違いは東京２１区で、午後９時３０分ぐらいに当確を打った。出口調査に基づく午後８時の当確ではなく、情勢を見つつ判断したもので、その情勢判断が誤っていたということによる間違いだった。

○　予測のシステム、判断の根拠など、何か理由はあるのか。

（ＮＨＫ側）

　当確を打ち出すときには事前にさまざまな調査をする。世論調査、期日前出口調査も実施している。そうした調査に加え、当日の開票所での取材もする。さらに事前の情勢分析や取材に基づいて当確判定基準を決めている。今回の場合、事前の調査に、実際に出た数字よりもややゆがみがあった。そのゆがみをあまり確認しないまま打ち出したことによる誤りだった。こうしたことがないように今回どうして間違ったのかという背景、原因等を詳細に分析し、二度とないようにしたい。

○　調査による予測なので間違いをなくすということはできないと思う。一方で、ＮＨＫはそんなに早く当確を打たなくても、じっくり待って打ってもよいのではないかと思う。開票が始まった途端に当確が出てくるとそんなに早く出すべきなのかと思う。間違うぐらいであれば打たないほうがよいという感じがする。

（ＮＨＫ側）

出口調査に基づいた午後８時の当確は各社が対応している。ＮＨＫの場合、午後８時の当確は相当高い基準を設けて、それをクリアしたものだけを打っている。他社に比べれば抑制的だ。常々「われわれは民放と当確の早打ち競争をしているのではない」と現場に言っており、事前の十分な調査、分析、明確な判定基準に基づいて確信の持てるものだけを打っている。早く打つことと正確さは必ずしも二律背反のものではなく、正確に打とうという準備が、早く打つことにつながり、早く打とうという万全の準備態勢が正確に打つことにつながる。

○　それでもＮＨＫは多少遅れても正確さを追求したほうがよいと思う。ＮＨＫが当確と打ったら当確なんだというぐらいの報道の姿勢でもよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

今後正確さが万全のものになるように気をつけたい。

○　選挙の報道で各党首の意見等を取材し放送していたが、大変分かりやすく、大事なところだけをうまく切り貼りし、各党のバランスが取れたよい報道をされていたと思う。

○　美術品、書画、骨とう品の扱いについてだが、同じ美術系の番組でも、ヨーロッパに行って古いものを見せてもらうときは手袋をし、息がかからないように気をつけているが、日本では同じぐらい古い、あるいはもっと古いものでも手で直接触っていることがあり気になっている。日本はあまりうるさく言うことがないのかも知れないが、貸してくれる方が何も言わなくてもＮＨＫのほうで気を使うとよろしいという気がした。

（ＮＨＫ側）

骨とう品などの扱い方だが、ものによっては手袋等を着用するよりも、しっかりと手を洗ったうえで素手で取り扱う方が好ましいと学芸員から指導される場合があり、その指示に従っている。また、レプリカ品を扱う時なども、素手で取り扱うことはある。いずれにしても、ＮＨＫでは、専門家の指導に基づいて、取り扱いには細心の注意を払っているので、ご理解いた

だければと思う。

○　領土問題や水産業などで、隣国である中国との摩擦が絶えないのは残念なことだ。学術、技術、芸術などを通した日中の交流は互いに大きな戦争を起こさないために大きな貢献があると思う。たとえば大地震によって人々の命を失い、大きな都市が壊れてしまうことを防ぐための学問、技術の必要性は日中に共通の課題だ。そのような場合の親密な交流の意義、活動を特集番組にしていただけるとよいと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２６年１１月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

１１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１７日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成２６年度上半期の放送番組の種別と放送実績について説明があった。

続いて、平成２７年度国内放送番組編集の基本計画(案)について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
有森　裕子（元マラソンランナー）
大野　博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
小田　　尚（読売新聞東京本社専務取締役論説担当）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
佐野真理子（主婦連合会参与）
龍井　葉二（連合総合生活開発研究所客員研究員）
東儀　秀樹（雅楽師）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
和田　　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜放送番組の種別および種別ごとの放送時間について＞

○　時間量を集計する際、例えば「クローズアップ現代」は深夜に再放送をしているが、このような１日で２回放送している場合は、２回分をカウントしているのか。また、「連続テレビ小説」もＢＳプレミアムと総合テレビで放送し、それぞれ再放送もある

が、同じようにカウントしているのか。

（ＮＨＫ側）

本放送、再放送の関係なく、放送したものすべてを実績としてカウントしている。「連続テレビ小説」については、総合テレビでは朝と昼に放送しているので、娯楽番組として２回カウントする。ＢＳプレミアムでの放送についても再放送分もカウントしている。

○　種別にある教養番組と教育番組とはどのような違いなのか。

（ＮＨＫ側）

教養番組とはＢＳプレミアムに多いが、視聴者の興味、関心に応えるものを教養番組としている。全体としては、「一般的教養の向上を目的とする放送番組」を教養番組、「学校教育または社会教育を目的とする放送番組」を教育番組としている。それを基に一つ一つの番組についてどの種別に該当するかという判断をして積算している。

○　放送波ごとに種別の割合に目標があるということは、例えばある番組について「教養番組であり、教育番組でもある」ということを事前に設定し、番組編成をしているということか。

（ＮＨＫ側）

番組改定の際に、それぞれの定時番組について種別を定め、設定した編成比率に届くよう番組編成をしている。

○　これまでのところ国内放送番組の種別については、ほぼ調和のある放送ができていると考えてよいのではないかと思う。

＜平成２７年度国内放送番組編集の基本計画（案）について＞

○　「編集の重点事項」の「８．２０２０年東京オリンピック・パラリンピックへの取り組み」の中のアマチュアスポーツという文言について述べたい。現在は昔と比べると、アマチュアスポーツとプロスポーツの境はだんだんなくなってきており、自分が

アマチュアなのか、プロなのかをあえて言うスポーツの選手は少ない。プロかアマかを分けてスポーツを見ている人は、選手も一般の方も少なくなってきている。２０２０年のパラリンピックに向けてということならば、「アマチュアスポーツなど」というくくりでなく、むしろ「健常者スポーツ、障害者スポーツにかかわらずスポーツイベントを取り上げ、中継を拡充する」としてはどうか。パラリンピックは放送での取り上げ方が圧倒的に少ない。車いすテニスの国枝慎吾さんは世界一になったが、錦織圭さんのほうが多く取り上げられる。こういった報道の差は、これから世界においても減らしていかないといけないと思う。

○　全体としては目配りが行き届き、異論はない。「編集の重点事項」の「１.『命と暮らしを守る』報道に全力を挙げ、東日本大震災からの復興を積極的に支援」の項目で過去の災害のフォローアップ、これから起きる可能性のある大地震について触れていることは、ＮＨＫにしかできない、ＮＨＫに要求される重要な部分だと思う。ＮＨＫがそういうことに重点を置いていることをきちんと視聴者に知ってもらうことも必要だと思う。災害が起きたときにどういう形で緊急報道をする方針なのかをあらかじめ知っておいてもらうということだ。ＮＨＫからのお知らせという形でもよいし、ドキュメンタリー番組として制作してもよいと思う。

○　「６.新たな可能性を開く放送・サービスを創造」で、改正放送法の施行に伴って、放送と通信の連携が大きなテーマになると思う。インターネットの同時配信について簡単な説明をしていただけたらありがたい。

（ＮＨＫ側）

インターネットを利用した新たなサービスについては、今年６月に放送法が改正され、ＮＨＫで扱えるサービスの幅をかなり拡大できる可能性がある。現在は現行放送法の枠内で基準を作り、それに沿って運用しているが、放送法の改正に伴い、これから新しい実施基準を作ることになる。視聴者から実施基準要綱について募集した意見も踏まえて検討し、経営委員会で議決してもらうことになる。その実施基準案について、総務大臣に認可申請を行い、総務省でもいろいろ検討されるのではないかと思う。総務大臣から認可が得られれば、それに基づいて具体的にどんなものをインターネットでどう配信するかという計画を作ることになる。

○　視聴率について資料を出していただいた。総合テレビの午前や夜間の視聴率は１

０％前後だが、この数値は民放と比較してどういう差があるのか分かれば、さらに参考になると思う。

（ＮＨＫ側）

時間区分ごとの世帯視聴率は、民放との比較だと、例えば全日の１０月の東京キー局の関東での世帯視聴率は高い局で６～８％台で、総合テレビは６．７％だ。午前だけで見れば、総合テレビは９．９％で高い。

○　視聴者の番組評価の「これだけは見逃せない」番組のランキングは納得できる。「ドキュメント７２時間」の平均点が 7.63 というのはどういう数字なのか。

（ＮＨＫ側）

「これさえあれば満足・見逃せない」というものは質的指標ということで視聴者にアンケート調査を行っている。視聴者が実際に視聴した番組について、これさえあれば満足、あるいは見逃せない番組かどうかを１０点満点で点数を付けていただく。「ドキュメント７２時間」をご覧になった方の平均値が 7.63 点だったということだ。

○　「編集の基本方針」に一言入れていただきたいことがある。さまざまな番組でツイッターやホームページ上などで意見やコメントを募集しているが、視聴者からの建設的な意見をきちんと反映させていくという姿勢は公共放送において重要だと思う。そういった一言があればと思う。

○　「編集の重点事項」の「１.『命と暮らしを守る』報道に全力を挙げ、東日本大震災からの復興を積極的に支援」について。東日本大震災からの復興には、原発の問題も含まれると思うが、全く触れられていない。今、いろいろなところで原発再稼働の話が出ている。福島の原発もまだ収束されていない中、関連のニュースが減ってきている気がする。現状がどうなっているのか、正しい情報をＮＨＫなりの深掘りをし、視聴者に伝えることは非常に重要なことだ。その意味も含めながら書かれているとは思うが、原発のことをきちんと書くことも意義があるのでないかと思う。

○　「編集の重点事項」の「２.内外の課題に対し、判断のよりどころとなるニュース・報道番組」について。少子化、いじめなどの教育問題とあるが、消費者問題も入れていただきたい。暮らしの安全、安心の確保に向けた消費者問題は山積している。ＰＩ

Ｏ－ＮＥＴ（全国消費生活情報ネットワーク・システム）で収集された各地の消費生活センターに寄せられた苦情相談は年間９２万件ある。やっと減ってきたところだったが、また増加しつつある。消費者庁は推計約６兆円の損害があると言っていて、これはとても大きな金額だ。重点事項として、消費者問題をニュースでもきちんと取り上げていただきたいと思う。積極的な報道をお願いしたい。

○　「編集の基本方針」の中で「新しい手法も駆使して伝えるニュース」という部分があるが、今年度の基本方針で記載されている「深い取材に基づく」という大事なキーワードも残しておくべきではないかと思う。

○　「編集の重点事項」の「２.内外の課題に対し、判断のよりどころとなるニュース・報道番組」について、原発の記載については前述委員と同感だ。また、今年度の基本計画にはなかった教育問題を加えているが、「ＮＨＫスペシャル」など、ＮＨＫの報道を見ても、いじめの問題だけでなく、若者の将来の雇用問題、子どもの貧困の問題などがクローズアップされているので、記載する文言の幅を広げたらどうかと思う。また、「掘り下げた報道」についても、「未来を展望した掘り下げた報道」と記されているが、意味はあるのか。現状に切り込むことも大事なことなので、あえて「未来を展望した」と加えたことが気になる。

○　今年度の基本計画の見出しはグローバルな視点が入っている。昨年議論した際に、あまり内向きにならないようにという議論を行った経緯がある。見出しだけとはいえ、２７年度についてもグローバルな視点は残したほうがよいのでないかと思う。

○　「編集の重点事項」の「４.地域の『安全・安心の拠点』となり、地域活性化へ貢献」で、地域の項目を前に持ってきたことは評価したい。記載されている文言について、今年度にあった「課題と向き合う」というキーワードは残した方がいいと思う。

○　「編集の重点事項」の「６.新たな可能性を開く放送・サービスを創造」で可能性ということばがあるが、技術的な可能性だけでなく、どういうことを開くための可能性なのか、その辺りの補足があればいいと思う。

○　全体についてはよく目配りの利いたものだと思う。「編集の重点事項」の「５．質の高いコンテンツを世界に発信」というのはよく分かるが、３つの文の中に「日本」ということばが５回も出てくる。ＮＨＫの、ＣＧを駆使した高いテクノロジーと取材力を駆使した番組は、日本のことを取り上げる番組ではなくても汎用性があり国際的に受け入れられると思う。そういう番組を作れること自体がＮＨＫのブランド力でも

ある。あまりナショナリティーに縛られないほうが、かえって日本の放送の質の高さを印象づけることになるのでないか。

○　大変よく精査され、まとめられていると思う。「１.」に「命と暮らしを守る」とあり、震災復興のことが記載されていることは、そのとおりだと思う。ただ、私たちの命と暮らしに関わることは自然災害だけでなく、急速な少子高齢化も大きな課題だと思う。医療、年金、介護がこれからどうなるのか、子どもはどんどん少なくなり、子どもの貧困問題もある。別のことばで言うと持続可能な社会保障がどうなるかということだ。「２.」の「内外の課題」のところに記載されているが、そこではなく、震災復興と同じぐらい私たちが直面している大きな課題であると考える。

○　ＮＨＫは総合テレビで娯楽番組を２０％以上とし、人々の広い関心に応えようとするところは共感するが、時々民放と見まがうような娯楽番組をＮＨＫでも放送している。ＮＨＫならではの娯楽番組とは何なのかというコメントも加えていただけたら、なおありがたい。

○　「小さな旅」「地域発ドラマ」「新日本風土記」など、地方を登場させる番組がいろいろある。しかし、見ていてどこか歯がゆい思いをすることがある。どこか表層的というか、部分的という感じがする。「編集の重点事項」の「４.地域の『安全・安心の拠点』となり、地域活性化へ貢献」で、「地域と日本が抱える課題に加えて、自然や文化、人と暮らし、観光資源など、地域の魅力を発信します」とあるので強く期待する。明るくない農村、地方というイメージにならないように配慮しつつ、農村実態、暮らしの状況の厳しさもありのままに報道することも重要なのではないかと思う。そのうえで頑張っている部分、光明の部分も発信していただきたいと思う。最近は外国人、若い人も含め、農村に関心を示す層が出てきている。新しい動向なども積極的に発信していただければ、明日の新しい日本農業の社会工学みたいなものが見えてくると感じているので工夫していただければと思う。

○　全体を整理するのはよいと思う。一方、ＮＨＫにはたくさんのディレクターがいるが、枠組みから外れるような自らの興味のある番組を作りたいというような、番組制作者からの熱気みたいなものはないのか。全部を整理してしまうとコントロールしすぎのような気がする。

○　「編集の重点事項」の「５.質の高いコンテンツを世界へ発信」に関して、ＮＨＫの存在を世界に発信する意味もあるが、日本の良さを世界に出していくこともＮＨＫの大事な役目ではないかと思う。日本のブランド力を高めることについてはＮＨＫと

して取り組んでもよいのでないかと思う。

○　重点事項には娯楽の要素が少ししか出てこない。ＮＨＫらしい娯楽として何を提供しなければいけないのかを考えたほうがよいのではないかと思う。「各波の編集方針」の中で、総合テレビジョンにおいて娯楽番組を２０％以上編成すると書いてある。免許上は、教養番組と教育番組の数値は規定されていたと思うが、それ以外は規定がないのでバランスの問題だと思う。実態を見ると報道番組は４０％～５０％ぐらいになっているのに、報道番組が２０％以上、娯楽番組も２０％以上とするのがよいのかどうかだ。比率について、もう一度考えてみてもよいのではないか。今後いろいろな調査をする際に視聴者はＮＨＫにどういうジャンルの番組を望んでいるのかも聞くとよいかもしれない。番組審議会委員の意見だけで報道は２０％以上がよいと決めるよりも、多くの視聴者がどういうことを望んでいるか、いろいろな機会に調査していただいたらどうか。

○　いろいろな意見が出たが、それぞれが矛盾する意見もあると思う。検討していただいて１２月の審議会に向けてまとめていただけたらと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１１月８日(土)のＮＨＫスペシャル　ジャパンブランド　第１回「日本式サービス強さの秘密」(総合 後 9:00～9:58)と１１月９日(日) の第２回「日本式サービスで世界をめざす」(総合 後 9:00～9:58)を見た。日本のサービス産業は競争力が弱いと言われているが、東南アジアで大変活躍しているという意外性もあり、興味深かった。

○　１１月１５日(土)のＮＨＫスペシャル　巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲ　地球大変動の衝撃「日本に迫る脅威　激化する豪雨」(総合 後 9:00～9:58)を見たが、大変よい番組だった。地球温暖化による豪雨の問題も取り上げており、またＣＧもよくできていた。地球温暖化はあまり身近に感じない問題として考えてしまいがちだが、海水温が少し上がっただけでこれだけ集中豪雨が起きることが分かりやすく示されており、大変感心した。

○　１１月１６日(日)のＮＨＫスペシャル　ホットスポット　最後の楽園　ｓｅａｓｏｎ２　第２回「赤い砂漠と幻の珍獣～ナミブ乾燥地帯～」は、砂丘に生きる奇妙な動物たちの奇妙な映像美に、娘とことばなく見入った。

○　沖縄県知事選を受けたけさの「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の７時台のニュースについて。沖縄局の記者が、今回の勝因と敗因、当事者のコメントを紹介していた。その後で政治部の記者が、政府の反応、当事者のコメント、これからの対応、見通しなどを紹介していてバランスが取れていた。沖縄に関するニュースでＮＨＫの報道はゆがんでいるのではないかと私はずいぶん指摘してきたが、今回は深みのあるよいニュース番組になっていたと思う。

○　１１月７日(金)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の７時台で、川内原発地元同意に関するニュースを報道していた。鹿児島県議会が原発再稼働に賛成し、鹿児島県知事がその日の午後にそれを受け、再稼働に同意する日の朝のことだ。その日の流れを伝えた後に原発再稼働に不安を感じる地元の人が、事故が起きたときに避難路が狭い、避難するのが大変だとコメントをしていた。今回の原発再稼働は、新基準に沿って原子力規制委員会が合格を与え、その後の地元の手続きを取っているという過程、位置付けをまずきちんと伝えることが大事だ。地元の議会、地元の声を受け、賛成に回っている事情についても一切紹介されなかった。また、今回は地元の自治体、同意を取り付ける自治体がどの範囲なのかが最大のポイントだ。そういう問題意識が全くないまま、ニュースが終わってしまっていた。また、解説していたのが科学・文化部の記者だったが、脱原発のプロパガンダのことしか話していない。バランスが取れていた沖縄県知事選のときと比較すればよく分かるが、科学・文化部の記者だけではなく、経済部、政治部の記者も出すべきだ。そういう記者を出すことによって基本的にバランスの取れた報道になると思う。一層の工夫をしていただきたい。ＮＨＫはわりに選挙報道の処理のしかたがうまいが、原発の問題、オスプレイの問題等は報道の処理のしかたに若干問題が残るのではないかという気がする。

（ＮＨＫ側）

川内原発の再稼働、地元の容認についての指摘をいただいた。川内原発の再稼働を巡っては地元が賛成なのか、反対なのかという問題だけでなく、避難路をどう確保するかという避難計画の問題、「地元」の範囲をどこまでにするのかという問題もある。今後の原発再稼働へ向けた動きの中で大きなポイントが出てきたと思う。全体としては、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」のほかにも「ＮＨＫニュース７」「ニュースウオッチ９」で、前に実施した世論調査では地元で賛成が多いこと、３０キロ圏内の市町村は地元に加えてほしい人が多いことなどを伝えた。「ＮＨＫニュース　おはよう日本」については指摘を踏まえ、もう一度よく見て、検証したい。

○　「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の解説コーナーで使われた挿絵について、一国の総理を絵にして出すにしては公共放送として品がないと感じる。適正かどうか判断していただいたほうがよいかと思う。

○　１１月１２日(水)の時論公論スペシャル「どう動く　東アジア外交」(総合 前0:00～0:30)は、ベテランのＮＨＫ解説委員が３人出演しており、興味深く視聴した。これからの中国との付き合い方について、それぞれの専門分野から見た異なる意見が出ていたが、多角的な議論が深まる前に、次の話題に移ってしまったのが残念だった。ベテランの解説委員が議論しているということもあり、本当はもっと伝えたいことが山のようにあったのでないかという印象が残った。もっと焦点を絞ったほうがおもしろかったのでないかと思う。

○　１０月２５日(土)の地球ドラマチック「土の不思議～解明！生命を育む力～」を見た。私たちが生きるうえで土がどれほど重要なものかを教えてくれたすばらしい番組だったと思う。国連のＦＡＯ（国際連合食糧農業機関）が２０１５年を国際土壌年とし、食糧の安全保障、気候変動緩和、生態系の維持など、幅広い視点から土壌資源を見つめ直そうという動きがある。私たちの生活のうえで土壌の重要性をふだん考えることはあまりないが、番組が指摘していたように長い年月をかけて土は作られる。現在のような開発によって土壌の繊細なバランスが失われて、その恵みを急速に失ってしまう危険性を知ってもらう必要があると思う。地味な視点ではあるが、国際土壌年に合わせ、命を育む土の大切さを伝える番組を制作してもらい、土壌は貴重な資源の一つという国民の理解が広がればと思う。

○　１１月３日(月)の人生デザイン　Ｕ－２９「助産師」を見た。名物助産師として３０年のキャリアを持つ矢島床子さんのもとで働く娘の藍さんが主人公だが、大学病院の産科で学んだ藍さんが、今の医療知識などを取り入れて、助産院に来るお母さんたちに何かアピールできないかと挑戦する姿を見て大変共感し、「温故知新」ということばが浮かんだ。歴史や伝統、母の偉大さを受け止めつつも、それらを守りながら、新しいものも取り入れて、よりよい助産院を築いていけるだろうと思った。藍さんがこういう娘さんに育ったのは、床子さんが母の働く姿をしっかり見せてきたからだろうと感じ、同じ母親として背筋の伸びる思いもした。番組のホームページも見たが、「ディレクターＭＥＭＯ」の欄で番組を担当したディレクターのコメントが掲載されており、藍さんに対する素直なメッセージが書かれていた。きっと取材中もディレクターにとって、藍さんはいろいろと語りやすい相手だったのではないかとほほえましく感じた。

○　１１月１１日(火)のハートネットＴＶ　シリーズ依存症　第１回「治療・支援への長い道のり」、１２日(水）の第２回「どうすれば“回復”できるか？」を見た。アルコール健康障害対策基本法が施行され、初めてのアルコール関連問題啓発週間に合わせ、番組が放送されたことはよかったと思う。治療に対して前向きになるきっかけや家族との関係などの具体例が紹介されていたが、特に依存症からの回復を経験した２人が出演し、さまざまな話を聞けたことがよかった。今や依存症と呼ばれる症例はたくさんあり、何らかの依存症の人が 1,000 万人を超えているということに衝撃を受けた。国民の１割の人が何らかの依存症になっているということだ。アルコール依存症は 100 万人を初めて超えたが、そのうち８万人程度しか治療を受けていないという数の少なさ、回復しても１年後には７割以上の人が再発するという難しさがあることも分かった。今回は回復の観点からの番組だったが、どうして依存症になるのか、増えるのかについてなど、いろいろな視点からさらに番組を作っていただきたい。コンビニエンスストアでアルコールを２４時間売っている現状など、買いやすさ、利便性と社会の構造をどう考えるかという問題もある。番組のなかで買い物依存症の症例が紹介されていたが、インターネットでいくらでも買い物ができてしまう、またお金をいくらでも貸してくれる現実もある。依存症は病気と片づけてしまうのでなく、根本的なところをみんなで考えなければいけないと思う。いろいろな角度から深掘りしていただきたいと思った。

（ＮＨＫ側）

「ハートネットＴＶ」は月曜日から木曜日まで放送しているので、依存症についてはいろいろな角度から取り組んでいく。一つの依存症になっている人は同時にほかの依存症になりやすいタイプの人が多いので、さまざまなアプローチをしようと思っている。「ハートネットＴＶ」で取り上げた内容を「ＮＨＫニュース　おはよう日本」でも取り上げるなど、なるべく多くの視聴者に見てもらえるように努力している。今後とも引き続き取り組んでいく。

○　１１月１４日(金)の団塊スタイル「あなたもだまされる！？～悪質・詐欺商法の新手口～」を見た。事例を基に説明されており、とても分かりやすかった。紹介されていた「劇場型」は危険だと感じた。出演していた弁護士が私もだまされると言っていたぐらいで、詐欺商法を行う人たちが、誰でもだまされやすい劇場を作ってしまうことをもっと強調してもらえればと思った。被害の相談ができる機関名が紹介されていたが、機関名だけではなく、電話番号などの連絡先が記載されていればなおよかった。

○　最近の振り込め詐欺の手口は巧妙になってきており、そういう意味でも具体的な

例を紹介してもらうことはよいことだ。公共放送としても意味があることだ。

○　ノーベル経済学賞の候補だったこともある宇沢弘文さんが９月に亡くなり、過去の対談番組を編成していた。１１月１６日(日)のＥテレセレクション・アーカイブスＥＴＶ特集「経済学者・宇沢弘文　いま再び豊かさを問う」(１)～(４)(Ｅテレ 前0:00～2:57)は、１９９８年の対談番組で、公害問題などについて先見的な発言をしていたが、宇沢さんの業績を総括するには貴重な映像ではあるが、解説を付けるなどもう少し工夫をしてもらいたいという印象を受けた。

○　「英雄たちの選択」を最近注目して見ている。１１月６日(木)の「決裂も辞さず　日露講和会議の小村寿太郎」は、小村寿太郎のぎりぎりの選択について扱っていた。この番組は、歴史上の出来事を映像や議論で多角的に分析し、仮定を交えて現在に引き寄せていて、頭の体操になるよい番組だ。来年戦後７０年を迎えるにあたり、特に近代史を知らない若者にとっても魅力的な番組だと思う。磯田道史さんを中心とした若い論客を起用していることもよい。階段状に歴史上に起こったニュースを並べ、テーマを決めて追求しているが、こういった若い世代の人たちが、聖域なくいろいろなテーマを取り上げていってほしい。

○　ＮＨＫではよい番組がたくさん放送されているが、気になるのが視聴率だ。Ｅテレがよいのか、総合テレビがよいのか分からないが、時間帯、ＰＲの仕方なども工夫していただけたらと思う。

○　最近ＮＨＫは画面の隅を使って、Ｌ字型のスーパーなどで情報を伝えている。スコットランドの住民投票、アメリカの中間選挙など選挙の開票速報のときなどに使われていたと思うが、ある意味幅を広げ、いろいろなところにＬ字型で情報を出すことを始めている気がする。今後もうまく活用していただきたいと思う。

（ＮＨＫ側）

Ｌ字型のスーパーについては、交通情報、災害情報、生活情報など、ニュースだけでは伝えられない部分をきめ細かく伝えるために画面をいろいろ工夫しながら伝えている。今後も続けたいと思っている。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２６年１０月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

１０月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２０日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２６年度第２四半期・７～９月）の説明に続いて、ハートネットＴＶ＋「生きるためのテレビ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
委　員　有森　裕子（元マラソンランナー）
大野　博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
鎌田　實　（諏訪中央病院名誉院長）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
佐野真理子（主婦連合会参与）
龍井　葉二（連合総合生活開発研究所客員研究員）
永田　紗戀（書家／花咲く書道 Studio Saren.Nagata 主宰）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
和田　　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２６年度第２四半期・７～９月）について＞

○　世帯の視聴率も上がり、特に午前６～１０時がこれまでになく顕著に上がっていることは結構なことだ。台風などの影響もあったかもしれないが、報道・解説、大型企画も高い視聴率で、なおかつ満足度も高かった。今回、ＮＨＫの放送への満足度について、総合テレビが６．５だったとする１つの指標を出していただいた。今後どう推移するのか、ＮＨＫのさまざまな活動によってさらに高まるのかを見る１

つの指標になると思う。基本的には多くの視聴者が満足しているということだと思うが、満足度６．５とは微妙な数字で、７を超すと満足度が高いという感じがする。今後いろいろな取り組みの中で視聴者の意向を聞きながらよりよい番組をさらに作っていただければと思う。

○　視聴率至上主義はよろしくないと思うが、ジャンル別の平均でなく、番組別のベストテンのようなものがあるとその番組は視聴者への受けがよいと分かる。差し支えなければ、そういう資料を添付してもらうわけにはいかないのか。

（ＮＨＫ側）

どんな形で報告するかを検討させていただき、次回に参考として出したい。

○　全体状況についての報告があっても、個々の番組のことはよく分からないため、資料を出していただくとよいかと思う。視聴者が満足しているのかは、ＮＨＫにとって大事なことだ。毎回の報告に入れていただければと思う。

＜ハートネットＴＶ＋「生きるためのテレビ」

（総合　９月１３日(土)放送)について＞

○　視聴してみて、予想以上によい番組だと思った。身近にいる学生でもかなり悩みを持っている人がいて、私自身が相談に乗ることもあった。私自身の経験から、悩んでいるときほど人は成長し、有頂天のときほど成長は止まると思う。

○　私はこの番組で世界的に自殺予防デーが存在していること、「自殺対策白書」があることを初めて知った。２０代の自殺と聞いただけで驚くが、そのテーマ性と、宮迫博之さんやゲストの方々の赤裸々な話のインパクトは大きかったと思う。どうしたら「死にたい」が「生きたい」に変えられるかが番組の山場だったように思うが、他者のために少しでも役に立とうというようなことが答えなのかと思った。番組最後に紹介された視聴者から寄せられたメッセージが大変よかった。「自殺対策白書」では２０代、３０代の死亡原因の第１位が自殺で、一方、自殺による死亡数では５０代以上が圧倒的に多いと聞いている。年金、雇用保険生活、無職者の自殺が多いという事実もあるようだ。老後問題、健康、介護、ストレスという悩み多き５０歳過ぎの自殺対策を取り上げることも必要でないかと思う。

（ＮＨＫ側）

数年前から継続的に自殺の問題を伝えている。自殺者が３万人を突破した時のボリュームゾーンは中高年で、倒産や多重債務などが原因の１つと言われていたが、多重債務を整理する相談窓口を設けるなど、その後さまざまな対策が打たれ、ピーク時と比べると、かなり減少してきている。一方、今年２月に発表された「自殺対策白書」でも触れられているが、２０代をはじめとする若年層の自殺については理由が分からないと言われている。他の年齢層と比べると依然として深刻な状況が続いているため、今回番組で取り上げることにした。そうは言っても、中高年の方々が大勢自殺で亡くなっているのも事実で、そういう部分も見守り続け、対策等を伝えていきたいと思う。

○　ナイーブな問題を扱い、大変な苦労をされていることが番組にもにじみ出ていたが、番組を見た限りではリアリティがあまり伝わってこなかった。しんどさやつらさというのは誰でも経験する。それがなぜ「死にたい」にまで行ってしまうのかがよく分からず、死に対する距離がだいぶ変化してきていることを感じた。たとえば組織や男女関係や家族にしろ、濃密な人間関係の板挟みはわれわれの世代にもあるが、若い世代の自殺では、むしろ人間関係の希薄さから「死にたい」へいきなり飛躍している。その辺りがリアリティを感じられない理由なのかもしれない。また、「死にたい」というところから、いきなり「生きていてよかった」に展開していくが、「生きていてよかった」ということのリアリティもあまり実感できなかった。肝心な生命力や人間関係が回復することではなく、誰かのひと言からそう思えるようになったとのことだった。その裏にある問題をどう見たらよいのかが最後まで分からなかった。こうしたストーリー展開は初めから計画されたものだったのか。また、リアリティの薄さは討論の中でも見られる。参加された方々は、生死をかけた経験を話されているわけだが、それらに対して共感するということがなく、本当にひと言で終わって次の方に行ってしまう。そういうことをあえて避けたのか。収録のときはそういうやりとりもあったがカットされたのか。その会話自体がネット上の会話のような感じで、生身の人間同士がぶつかっている感じがしなかったのは何なのか。それも今の若者の在り方なのかと二重に考えさせられた。

（ＮＨＫ側）

私も番組に寄せられたメールに目を通したときに、「こん

なことでなぜ」という率直な印象を受けた。そんな中、読んでいるうちに分かった彼らの特徴がある。たとえば中高年の自殺のように多重債務、借金苦、企業の倒産のような外的に立ちはだかる要因で追い詰められて自死に至るが、彼らは、外的な要因の大きさだけではなく、そもそもそれを乗り越えようとするエネルギー、「生きたい」という思いそのものが小さいということが分かった。その背景に何があるのか探っていくと、親からの虐待などによって幼い頃に負ったトラウマ、過剰な期待などが「生きたい」という気持ちを損なわせている実態が明らかになってきた。その部分を描いたつもりだ。より深いところまで討論で到達できていたのかとの指摘については、あれがすべてだったとしか言いようがない。相手の言ったことを否定しないというのは暗黙のルールで、言いっぱなしの部分もあったかもしれない。しかし、表面的には顔で笑いながら一歩間違ったら死のふちに至るというのが彼らの現実だった。浅いと思われたかもしれないが、そこにこそ、「死にたい２０代」のリアリティがあると思ったので、あのような形でまとめさせていただいた。

○　「死にたい」という２０代の声とは何だろうと思い番組を放送で見た。この場で審議するということでもう一度見たが、一度目と二度目で、感じたことが違うのでそのことについても説明したい。まず、今「死にたい」と思っている人たちをスタジオに連れてきて話をさせたことに驚いた。２０代の死因の半分が自殺であること、自殺者は決して減っていないことが分かった。放送中に寄せられていたツイッターが画面下に表示されており、視聴している方の気持ちも一緒に見ることができ、大変よかったと思う。１回目に見たときは、すべてが新しい試みで、重たいことを和やかに皆さんで話をしていて、こんなすごい番組を初めて見たと思った。「生きていてよかったと感じたときは」というのが最後の質問だったが、これからどうするのかでなく、今まで感じたことを聞いていたことは大変よかったと思う。生きる喜びと生きる場所、環境は必要だと感じ、なぜこんな社会になってしまったのか、私たち大人が彼らを受け入れる環境を作らなければならない、何かやらなければと思った。２回目に見たときは何か違和感があった。このモヤモヤは何だろうというのがあり、いまだにすっきりしない。番組に出演していた彼らは子どもではない。手を差し伸べ、話を聞いてあげることが、果たして私たちがしなければいけないことなのか、そうではないのだろうと思う。同じ目線で物事を考えなければいけない。ただ彼らの居場所を見つけてあげる、話を聞いてあげるだけで終わるものではなく、

学校、家庭や社会の大きな問題でもあり、この番組だけで終わらせてしまってはいけないと思う。もっと突っ込んだ番組を制作してほしいと感じた。後日放送された９月２４日(水)のハートネットＴＶ　シリーズ　２０代の自殺「反響編　寄せられた７０００の声から」も見たが、寄せられた 7,000 以上の視聴者からの声があり、その数の多さに驚いた。４回シリーズということでいろいろな場面を紹介していたが、彼らを呼んでスタジオで話をしたときの映像で、ゲストの宮迫博之さんと岩尾望さんの顔が分からないように処理されていたことが残念だった。宮迫さんと岩尾さんは一生懸命に話をし、彼らの話も聞いていたにもかかわらず、後日放送された「反響編」でその顔を見せなかったことで、この人たちは本気ではなかったのか、仕事で番組に出ていただけだったのかとすごく後味の悪い感じがした。彼らをこの番組に選んだ理由があったはずなのにそれが半減してしまった感じがし、残念だった。先ほどのリアリティということでは、真に迫るものがなかったと思う。一歩突っ込んだ次の番組に期待する。

○　番組の中で２回テロップが流れたが、「寄り添いホットライン」は何についてでも２４時間相談ができる。多いときは１日４万件のアクセスがあるホットラインで、その評価委員をやりながら日本の自殺をずっと見てきた。２０代の自殺はもともと難しい。リアリティがないのは１つの特徴で、それが番組では見事に出ていた。違う年代層が重い感じで死を選ぶこととは違う。病院へは、たとえば「死にたい」と言ってくるおばあちゃんがいるが、「死にたい」と言いながら病院へ来るのだから決してそれだけではない。本当に「死にたい」と思いながら「死にたくない」と思っているのだ。この番組はほんのちょっとで人は死ぬということを見事に表している。私たちもそういう危うさは２０代、１０代後半にあったはずだが、何とか幸運に生き延びている。そういう中で人間は生きていることがこの番組では見事に表れていたと思う。ツイートの中で「結論がなくてよい」というのがあったが、そこに番組のよさが表れていると思う。問題点はいっぱいある、荒削りの番組だが、結論がなくてよいということ自体が番組への最高の評価だったのではないか。日本は先進国の中で自殺が異常に多く、こういう切り込んだ番組を繰り返し制作してほしい。ツイートの中で「死にたいから生きたいに変わった」というのがあったが、真に受けてはいけない。「生きたい」と思った瞬間が今回はあったが、「死にたい」と行ったり来たりしながら人は生きている。そういう人たちがたくさんいることを知ること、世代を超え、もっとたくさんの人にこういった番組を視聴してもらうことが大事になってくる。また、この番組は十分に自殺誘発を懸念していたと思う。何かあったら寄り添いホットラインに電話してほしいと２回も紹介していたし、ツイート一つ一つについても、番組を見て簡単にリストカットをしてしまわないように作られていた。ギリギリの線、土俵際で見事に作られていたと思う。第２弾、第３弾が必要

であり、もっと宣伝し、たくさんの人に見てもらいたいと思った。

○　ユニークな番組で、あまり見たことがないアプローチが興味深かった。違和感という話があったが、私は、「死にたい」という悩みを持っている方たちが内輪で話しているのを外から見ているような一種の疎外感を感じた。この番組は誰に向かってどんなメッセージを投げかけようとしているのかがよく分からなかったが、番組の制作意図やねらいを聞いて、従来のよくある、部外者によるルポルタージュとコメンテーターのコメントで構成するのではなく、当事者たちが仲間にことばを掛け合っている形式だとよく分かった。特定された視聴者を対象に、共感の輪を広げるための番組であると同時に、一方で悩みを理解するための手がかりがどこかに欲しかったとも思う。ゲストの小島慶子さん、安藤桃子さんはコメントをする場がそれほどなく、やや部外者風な感じがした。彼らを生かすことで、この問題をよく知らない人たちにもメッセージが伝わるような工夫ができなかったかと思う。

（ＮＨＫ側）

番組を作り始めた当初、番組のターゲットについて、「死にたい」という２０代だけでよいのかという話があった。結果的には、「死にたい」２０代にターゲットを絞った番組を作っても、他の世代にも何かを考えてもらえる普遍性を持たせ得ると考え、今回のような形の番組にした。私には子どもが３人いるが、私自身、彼らの話を聞いてすごく考えさせられた。子どもとの向き合い方、部下との向き合い方など、大変考えさせられた。ご指摘を聞くと、他の世代の人でも理解できるよう「手がかり」がもう少しあればよかったのかもしれない。他の世代の人にも理解と共感をもう少し広げられるように頑張りたい。

○　非常に難しいテーマだ。私も若い年代の人と日々接しているが、リストカットをするなど、生きる意欲を失っている若者が日本社会に増えている。それは若者のメンタリティの弱さではなく、今の社会のひずみそのものだと常々感じている。感じていたがどう切り込んでよいのか分からないという難解なテーマをよく取り上げたと思う。番組についての説明、番組に関わった皆さんの深い思いを感銘深く伺った。そうであれば今後になお期待することを申し上げたい。番組は「しゃべり場」風に作られていたが、これだけ重いテーマによく出演してくれる若者を探してくれたと思うし、若者たちもよく語ってくれたと思う。あの場で語られていたのは、さらっとしたひと言だったが、そのひと言に大変深いテーマがあったと思う。彼ら

は深掘りせずに語っていたが、同じ問題で悩んでいる人たちはそこに共感し、感動した、泣いた、勇気をもらったという声を寄せたのだと思う。一方、多くの委員からもあったリアリティ、疎外感、誰に向かって作ったのかというところに１つヒントがあるのではないか。例えば親がよかれと思ってやったことが子どもたちを苦しめているということに対して、もっと深掘りして発言してほしいと思うが、彼らにそれを求めるのは無理だと思う。それを丹念に言わないから聞いている者もそれ以上聞かない。そのために、場合によってはそれぐらいのことでせっかく授かった命をなぜおろそかにするのかという思いで視聴した人もいたかもしれず、それは大変もったいないことだと思った。次に期待するのは「しゃべり場」のような番組ではなく、難しいと思うがエッセンス的に出てきたテーマを、彼らの姿を追いながら取材をしてもらい、周辺の社会、親、大人がどれだけ子どもたち、若者たちを苦しめているのか、ＮＨＫならではの取材力と構成力で第２弾、第３弾を作っていただきたい。そういった番組であれば、若者たちをみんなで何とかしなくてはいけないと思えるのではないか。この問題に苦しんでいる当事者とそうでない視聴者の間のずれがもしあるとすれば、そこをどういう手法で乗り越えるか、「しゃべり場」ではない形で取り組んでいただければありがたい。

○　私はリアリティを感じた。あれだけの数の若い方々が出演し、徐々に彼らの話が語られ、背負っているものが少しずつ見えてきた。彼らについて取材した映像もあり、さらに納得させられた。自殺未遂の体験談などは、相当リアリティがあった。ドラマ風に描くよりも、人のよさそうな彼が事実を淡々と語ることでよりよく伝わるものがあった。ためらい傷のあった女性の腕を何度も映していたが、それはテレビなどの映像の世界にしかできない仕事だと思う。それらの映像があるからこそ、だんだんと物事が深まっていく。リアルストーリーであるが、作り上げられた映画のような印象を受け、響くものがあった。映像を編集していると思うが、後ろからしか映らなかった人と顔が映った人に分かれていた。理由があるからだと思うが、どういう判断があったのか。また、今回の番組ではツイートが番組内容を増幅するのに機能していたと感じた。ほかの番組ではツイートがうるさいと思うものもあるが、今回の場合は、多くの若い人たちが食い入るように視聴しているような、相乗効果を感じるようなものがあった。おそらく放送するツイートについても選択していたかと思う。その苦労、方針などがあればお聞きしたい。

（ＮＨＫ側）

後ろから映していた女性は２人いたが、周囲に事情を伏せて暮らしているということで顔を出すことはやめた。ツイッターには彼たち、彼女たちを批判するものもあった。特に顔

出しで出演された方々がそのときには覚悟を持って出演してくれていても、周りから心ないことを言われ、心が折れてしまうことを恐れたため、ツイートの部分だけはナマで選んで、個人攻撃的なものは意図的に外した。そのため、出演してくれた方からは、放送を見て、きれいにまとめすぎたのでないかという声もあった。『結論がないことが良かった』という指摘とも関係するが、番組の終盤、「生きていてよかったと思う時」というテーマを用意していたが、今、死にたくてしょうがない人にとっては、その話ですら重荷になることがある。励ましになるのではなく、逆に“死にたい”気持ちをさらに増幅させるリスクがある。“絶望的なまでの現実”と“生きることへの希望”、そのバランスをどの辺りで調和させ、最終的に１本にするかは最後まで迷った。その後にＥテレで放送した「反響編　寄せられた７０００の声から」では、『無理矢理前向きにまとめようとしている』という、当事者から寄せられた厳しい批判も併せて紹介させていただいた。いまだに答えは見つかっていない。

○　このテーマは大変難しく、また大変幅があるが、その大変難しいということをもっと訴えてほしかった。大変さや難しさが番組からもっと伝わるものかと思っていたが、コメントもツイッターもポジティブなものが多く、きれいにまとめすぎていたのかと思う。東京マラソンの出場者は３万 5,000 人だが、私はスタート地点でいつも応援している。３万 5,000 人がスタートしたときにある人から「これだけの人数が毎年自殺している」と言われ、大変リアリティを感じた。これだけ元気に走っている人たちがいるとともに、これだけの人たちが自殺している。番組を見た人たちが自分の身近の明るいところを通して、重たいテーマのことを知ることも大事なことだと思う。１つのことでは解決できないが、考え続けなければいけないような難しさを出したほうが、いつかよい方向に向かうのではと思った。安藤桃子さん、宮迫博之さんは普段はもっとアクティブなコメントをされる方だと思うが、大変気を遣われてコメントをしていたのが逆に不自然に感じた。「すごく難しい番組ですが」と最初に宮迫さんが言われたが、その辺りがもっと伝わればと感じた。

○　私の娘が、もしいつかそういう悩みを持ったときにインターネットでつながった知らない人と会話を繰り返すのならば、こういう番組があったら救いになると感じた。顔を出している方も、出していない方も自分の気持ちをしっかり言っていたことに明るさを感じた。高校生と一緒に活動をしているが、みんな悩みを抱えており、

作品を見てその悩みを感じ、いろいろと会話をすることがある。受け止めてほしい、知ってもらいたい、私は本当はつらいんだということを何となく伝えてくる子もいる。その核心のところを「こうしたら？」と言うのではなく、「そうなんだ」と受け止めることで元気になって帰る子もたくさんいる。番組を見て、２０代の同じ悩みを持つ人たちだけでなく、その年代の子を持つ母親たちにも見てほしいと思った。私自身、番組を見て、子どもをどう育てたらよいのかと大変不安にもなったが、だからこそ、子どものことをよく観察するようになった。そういう意味でよい番組だったと思う。

○　ツイートの中に「ＮＨＫさんを見直しました」というのがあったが、「死にたい」と考えている人が実名で出てきて話をすること自体が大変難しい中、よく番組を作られたと思う。特に寄り添うことの大切さを教えてくれたという意味で大変よい番組だったと思う。夜中の時間帯の放送だったので、若い人に見てもらえたこともよかったと思う。もう少し幅広く多くの人の理解を得るためには、あの形のままかどうかは別としても、多くの視聴者が見やすい時間に放送したほうがよいと思う。日本は若者の自殺が多いということは、ほかの先進国といろいろな違いがあるということだ。番組の中でもあったが、例えば日本の高校生は自己肯定感が少ないことは教育分野でも問題になっている。日本の高校生は自分が優秀だと思っている子が４％、まあまあ優秀だと思っている子が１１％で、つまり自分に自信をもっている人は１５％しかいない。対してアメリカの高校生は優秀とほぼ優秀だと思っている子を合わせると９０％だ。アメリカの社会ではそれだけ子どものよいところを認め、育てているからだと思う。日本は学力、偏差値の高い子だけがよい子だということで、学力の高い子というと１５％ぐらいになってしまうのかもしれない。そういう社会的な背景がいろいろあり、貧困だけの問題ではないと思う。海外との比較で日本の社会に何か問題があるとすればそういうものも含め、考えていただきたい。「死にたい」と悩んでいる人に寄り添うだけでなく、大人が理解していない問題を見つけ出し、また番組を作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

７５分もの長い番組を見ていただき感謝する。今回いただいたご意見を持ち帰り、制作陣みんなで話をしたい。毎回、最後まで何を伝えるべきかを迷いながら作っている。貴重な時間を割いて見ていただく視聴者のためにも何か伝わる番組を作りたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　９月１４日(日)のＮＨＫスペシャル「臨死体験　立花隆　思索ドキュメント　死ぬとき心はどうなるのか」(総合 後 9:00～10:13)は興味深く、おもしろかった。ご自身のがんが再発した立花隆さんが世界中の最先端の研究を探りながら臨死体験を考えると同時に意識とは何かを考える番組だった。ネズミによる実験で、臨死体験のときにフォールスメモリーが元になっているのでないかという説明や、意識は複雑なネットワークが元になっているという大変緻密な分析などで明らかになったことがたくさんあり、われわれが理解するうえで大変役に立ったと思う。一方、結局「分からないことは分からない」という割と当たり前の結論でもあった。ジュリオ・トノーニ教授は「科学でどう起きるかという解明はできるが、なぜそういうものがあるのかは分からない」と言っていたが、自己意識のメカニズムみたいなものはある程度緻密に説明できるが、１人１人が体験している自己意識は何なのか結局分からない、ということがよく分かった。難しい問題の科学的な境界は現在どこまで進んでいるのか、という番組としてよくできていた。立花隆さんという優れたジャーナリストの役割も大きかったと思う。興味深い番組だった。

○　光の当て方がＮＨＫらしく、ＮＨＫだからこそと思った番組が２つある。９月２８日(日)のＮＨＫスペシャル　老人漂流社会「“老後破産”の現実」は、生活保護水準以下などのギリギリの生活を送っている高齢者の実態が描かれていた。どのようにして、そういった方々に手を差しのべたらよいのかと考えさせられた。

　１０月６日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「食べる楽しみが、希望を生み出す　訪問管理栄養士・中村育子」は、訪問管理栄養士の中村育子さんが、在宅医療を受けている糖尿病患者や肥満患者、透析の一歩手前の患者に人生を楽しんでもらうために奮闘する様子を描いていた。その中で食がどれだけ人を元気づけるのかがよく分かった。必死に生き、人のために頑張っている人にスポットライトを当てる、老後破産のお年寄りにスポットライトを当てる、誰もが気づきにくい事柄にスポットライトを当てることは勉強にもなるし、日本中の人に少しでも理解してもらうという意味でも大事だ。こういう番組はたくさん作ってほしいと思った。

○　１０月１９日(日)のＮＨＫスペシャル「行方不明者１万人～知られざる徘徊の実態」は具体的かつ行き届いた取材だった。世の中に起きている問題について先行的に報道し、対策としてうまくいっているケースをきちんと取り上げて報道していた。今回の場合は釧路市の事例が扱われていたが、よい切り口だと思った。

○　自閉症の青年を扱った８月１６日(土)「君が僕の息子について教えてくれたこと」(総合 後 11:00～11:59)はすばらしかった。私は発達心理学専門で、今から４

０年前の学生時代に自閉症を臨床例として扱ったことがあるが、当時は母親の育児の失敗と言われていた。その後、微細脳損傷など医学の発展である程度原因が解明されてきているが、番組では自閉症の青年が、私たちが持っているのと同じぐらい、あるいはそれ以上の深い感性と思考の世界を持っていて、それをアウトプットできない、表現できないことがどれほどつらいことかということと、１人の青年のすばらしさを伝えていた。しかもそれをあたかも理想郷のように扱っていないところもすばらしかった。何人かの知人から鳥肌が立つほど感動したというメッセージも受け取った。私は感動というよりもっと重いものをもらった。あれだけの番組を制作してくれたことに感謝したい。

○　９月１９日(金)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の「ここに注目！」で、北朝鮮に関するニュースを解説していたが、その際に使用された北朝鮮と日本を表す絵で、北朝鮮が大変偉そうに大きく描かれ、日本の安倍総理が貧弱そうに非常に小さく描かれていた。こういう描き方はＮＨＫとして品位がないのでないかと思った。

○　９月２５日（木）のクローズアップ現代「おなかいっぱい食べたい～緊急調査・子どもの貧困～」を見た。貧困の連鎖を防ぐという観点でもよい番組だった。

○　「ひるブラ」で、その日のタイトルなどが右端にずっと出ていたり、左横に窓型でスタジオのゲストを映すのが、番組を視聴するのに煩わしいのでやめてほしいとの意見がある。検討してほしい。

○　１０月１８日(土)のＥＴＶ特集「ヒロシマ　爆心地の原子力平和利用博覧会」(Ｅテレ 後 11:00～19 日(日)前 0:14)を見た。広島の原爆資料館が戦後１１年でなぜ資料館の資料を全部外し、１週間ばかりの間、アメリカ主導の平和のための原子力展示を行ったのかという歴史の謎に挑む番組だった。アメリカは核政策を変え、独占するだけでなく世界に広めようとし、その対象に日本を選んだのだが、当時アメリカの広報を担当していた元外交官の手記を紹介しながら、彼が先兵として広島の大学からメディアまで駆け回ってアメリカの意図を浸透させていくドラマは、「事実は小説よりも奇なり」のことばのとおり大変おもしろかった。また、取材の行き届いた番組でもあった。広島放送局が制作したということだが、地方局だからこその取材の蓄積があるのだろうが、大変感心した。新聞でもニュースになりそうな話がいくつかあったと思う。

○　９月１８日(木)のオトナへのトビラＴＶ「どうする？燃え尽きたココロ」は、心が折れてしまいそうになったときにどうすればよいのかというヒントを与えてく

れた。相撲のジュニア世界選手権を制覇したが、ドクターストップで相撲を辞めたマービンＪｒ．さんや、サッカーでけがをして挫折し、生きる理由を失ったＪＯＹさんの深い挫折体験から、新しい自分を目的に生きていくことができたという話は大変インパクトがあり、臨床心理士の方の解説と出演者の赤裸々なトークのおかげで、具体事例として理解が深まった。

○　「すイエんサー」を見続けているが、９月３０日（火）は「超おいしいおにぎりを作りた～い！」というタイトルだったので関心をもって視聴した。おにぎりとおむすびの違い、お米を研ぐのと洗うことの違い、お米の食味はこう変わるということなどが大変分かりやすく伝わり、勉強になった。最近はお米を炊くのも面倒がる日本人が増えていると聞くが、お米のイロハが理解できると、お米を食べることの楽しさが分かる。若い世代に視聴してもらい、ごはん食が拡大することを願いたい。

○　９月２０日（土）のアスリートの魂「すべてはナインのために　女子野球　西朝美」はインパクトのある内容だった。西朝美さんは、女子野球ワールドカップで４連覇をしたほどのスーパースターだが、実は高校時代にいじめに遭い、死を考えるほど悩んだ経験を持ち、それが仲間のためにプレーするという決意に結びついていることが番組で見事に表現されていた。人のために頑張っているひたむきな姿を見て、たくさんの若い人たちにも見てもらいたいと思った。

○　私は山が大好きだが、ＮＨＫの山の番組はレベルが高く、世界中でよい映像を撮ってきていると思う。「グレートトラバース～日本百名山一筆書き踏破～」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ）も楽しく視聴しているが、１人の登山家に大変なプレッシャーと負担も与えていると思う。安全管理や健康チェックのようなことは、どのようにされているのか。

（ＮＨＫ側）

「グレートトラバース～日本百名山一筆書き踏破～」は、基本的に一緒に行動するクルー全員がプロの登山家だ。何かトラブルがあったときにも常に対処できるように万全の態勢を取って撮影している。前代未聞と言ってよい取り組みなので、念には念を入れた態勢を取っているが、今のところ特に大きなトラブルは起きていない。１１月に放送する東北から北海道の２４座をもってすべて踏破となる。

行程についてだが、現時点でまだ利尻までは到着していな

い。踏破までにまだ数日かかる予定だ。プレッシャーという意味で本人は肉体的にも、精神的にも大変厳しい状況に追い込まれていたことも確かだ。その苦闘の様子も番組の中で紹介している。

○　前回の審議会でラジオのよい番組を紹介してくれたので、ラジオ深夜便「明日へのことば」を聴いた。「明日へのことば」というタイトルなので、ひと言ぐらいを紹介するのかと思ったら１時間ぐらいの番組だった。なかなか聴きごたえのある番組だったが、あの早朝の時間帯に聴く人は少ないと思われるので、再放送をしてもよいのではないかと思った。

○　ノーベル物理学賞で日本人３人が受賞したと表現されていた。その後にアメリカ国籍を取っている中村修二さんという表現もされた。海外の通信社の速報では日本人２人とアメリカ人１人と報道していた。日本人３人という表現をどう考えるか、ＮＨＫの中で議論されたのか伺いたい。アメリカ人の受賞の場合、もともとポーランド人、ドイツ人だとしてもアメリカ人であると言う。どのように考えているのか、参考までにお聞かせいただきたい。

（ＮＨＫ側）

　その問題についてはわれわれもかなり悩み、いろいろ議論をした。日本人ということばには日本国籍を持つ人という意味もあるが、日本で育ち、日本語を話し、日本の係累の人たちも多いというような広い意味で日本人として使えるのでないか、そういう使い方もあるのでないかということ、また、ノーベル賞受賞理由の業績が、日本国籍のときに上げられていることなども考慮して、「日本人の３人」と表現することにした。

○　台風などの災害報道の際には、現状の情報、今後の警戒等を考えると常に情報を発信しなければならないし、それはＮＨＫの使命であると思うが、放送が決まっていた番組を休止せずに対応するような何か工夫はできないのか。番組を少し遅らせて放送するとか、画面の上、下、横などに台風情報を提供するなどの工夫をしてほしい。私の周りでも賛否両論あるが、台風報道を見ていると同じ内容を繰り返していることが多い。検討していただきたい。

（ＮＨＫ側）

台風などの災害のときにどのような放送を出すのかは、災害報道を報道の大きな基盤に置いているメディアとして重要なことだ。東日本大震災以降は減災報道に取り組んでいる。被害を伝えるのでなく、その前にできるだけ多くの人たちの命を救い、暮らしを守ることにつながる放送をしたいということで、できるだけ幅広く前もって十分な情報を伝えている。その中で予定されていた番組が変更になって見られないという意見もたくさんいただく。まさに工夫だと思う。当該地域のローカル放送で対応して、ほかの関係ないところでは通常の放送をやればよいのではないかという意見もある。ただ、ＮＨＫの放送局の人員、機材などには限界があり、ローカル放送で長く情報を出し続けることは実際には難しい。ローカルの情報であっても全国放送できちんと伝える態勢を取らないと情報を出し続けることができないという事情もある。それが番組を変更する１つの理由でもある。また、予定されていた番組が４５分だとして、途中で台風情報に切り替えられないこともあり、丸ごと別の日に動かす方法を取らざるを得ないときもある。番組変更、番組休止、ほかのチャンネルへう回することもある。バランスを取りながら工夫をしている。

今回の台風１９号の場合、影響範囲が大変広かった。今年は雨による災害が大変多いため、そういった被害を繰り返さないためにも念には念を入れた。影響範囲が狭く、その地域だけならばそのつど放送するだけでよいが、今回は相当に影響範囲が広かった。減災報道は最優先事項の１つなので、ご理解いただきたい。

○　前回の台風の際は、「連続テレビ小説」を休止して台風報道を続け、翌日２本続けて編成していた。かなり視聴者からの反響があったのではないか。「連続テレビ小説」は休止せずに、例えば今日はＥテレで放送していると知らせてもらえれば、影響は少なかったと思う。そういうことも含め、検討していただければと思う。

○　私はＮＨＫを応援したい。津波が来ると言っていても５ｃｍぐらいの波しか来ないと、次は逃げるのをやめ、それが大災害につながることがある。たまたま家族の誰かがその地域に出張しているかもしれない場合もある。全国に知らせ、オーバー

に伝えるぐらいがちょうどよく、そうすることで災害による被害は減っていくと思う。ＮＨＫスペシャル「巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲ　地球大変動の衝撃」で海水温が温まっているために台風が大きくなること、地震の地下構造、2,000ｍの地下のこぶがプレートの中にあることなどが紹介されていた。一般の方々に災害が起きる仕組みなどを丁寧に説明することはよいことだと思う。続けて頑張ってほしい。

（ＮＨＫ側）

本来総合テレビで放送する番組をＥテレにう回して放送するよりは、次週の同じ時間に放送することのほうが、見ていただく人たちにも分かりやすいと思う。局地的にたくさんの雨が降ったとき、たとえば札幌近辺でたくさん雨が降ったときに「連続テレビ小説」について、札幌だけ放送を休止して、災害報道をしたこともある。そのときは札幌放送局だけは翌日に２回続けて放送した。そのような例もあり、今の態勢の中で工夫していきたいと思うので、ご理解いただければと思う。

連続テレビ小説「マッサン」は確かに多くの方々に見ていただいているが、Ｅテレにもその時間帯の番組を見ている視聴者がいて、Ｅテレにう回すれば、そのＥテレの番組が見られなくなる。総合テレビとＥテレは波の役割を考え、番組を編成している。したがって、次の同じ時間帯で見ていただくことを基本的な編成の方針としている。

○　連続テレビ小説「花子とアン」を毎回楽しく見ていたが、１週間ぐらい海外出張をした際に、滞在先でＮＨＫオンデマンドのページを開けると放送できませんという画面になった。その理由が分からない。お金を払って、ＩＤもパスワードも持っているので、海外からでもＮＨＫオンデマンドが開けられるようにしてほしい。

（ＮＨＫ側）

インターネット実施基準を６年前に作ったときにＮＨＫオンデマンドは国内に限ると決めた。それで海外からインターネットで接続しても、フィルターをかけていて入ってこられない仕組みになっている。このたび放送法が改正され、ＮＨＫができるインターネットの業務はかなり拡大されるこ

とになる。その中の論点の１つとして、そういったフィルターについてどうするのかという話もあるかもしれない。国内のいろいろなところからも海外で見られるようにしてほしいという声があることも確かだ。これから検討したい。

○　今日は、審議会の前に、ＮＨＫ内の食堂を利用した。ふだんＮＨＫの人たちと対面しているのとは違う印象を受けた。現場の人たちは本当にいろいろ動いている印象を持った。現場の制作風景を見学するようなプログラムを組んでいただけたらありがたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２６年９月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

９月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、８日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成２６年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成２７年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。その後、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　員　秋池　玲子（ﾎﾞｽﾄﾝ ｺﾝｻﾙﾃｨﾝｸﾞ ｸﾞﾙｰﾌﾟ ｼﾆｱ・ﾊﾟｰﾄﾅｰ&ﾏﾈｰｼﾞﾝｸﾞ・ﾃﾞｨﾚｸﾀｰ）
小田　尚（読売新聞東京本社専務取締役論説担当）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
駒崎　弘樹（ＮＰＯ法人フローレンス代表理事）
佐野真理子（主婦連合会参与）
谷口　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）

（主な発言）

＜平成２６年度後半期の国内放送番組の編成について＞

○　Ｅテレ「考えるカラス～科学の考え方～」のコーナー「考える練習」では、実験の結果は教えてくれるが、どうしてそのような結果になるのかは教えてくれない。どこかで確認できるのか。

（ＮＨＫ側）

実験を行い、子どもたちに考えてもらうのが目的の番組だ。番組の最後に、なぜその結果になったのかを解説し始めると途中で切れ、あとは自分で考えてくださいという演出になっており、番組ホームページにもその答えは出していない。その代わり、子どもたちが考えた解説をホームページで募集し

ている。学校でもよく利用されており、先生方からは、かえって途中で終わるのがよいと言っていただいている。学校の現場で子どもたちと一緒に議論し、解答へ導いているということだ。

○　引き付けるものがあり、とてもよい番組だと思う。

○　ラジオのお勧め番組があれば教えてほしい。また、ラジオには視聴率みたいなものはあるのか。人気のある番組を１つ、２つ紹介してもらえたら、聴いて感想を述べたいと思う。

（ＮＨＫ側）

ラジオではテレビでいう視聴率にあたる聴取率があるが、テレビのように日々のデータはない。ビデオリサーチ社が２か月に１回１週間行う調査データぐらいである。聴取率が比較的高いのは朝５時からの「ラジオあさいちばん」という３時間のワイド情報番組だ。通勤、通学時間帯ということもあって多くの方に聴いていただいている。不動の人気番組は「ラジオ深夜便」で、必ず聴いてくださる方が多い。夜１１時から朝５時までの番組だが、特に朝４時台の「明日へのことば」の人気が高い。ＦＭは音楽ジャンルを中心にいろいろな番組を編成している。

○　「ラジオあさいちばん」の「ビジネス展望」というコーナーだが、どれぐらいの期間で解説者は交代になるのか。あまり聴きたくない解説者だと苦痛で、チャンネルを替えてしまう。ゲスト、解説者は変更を多くしたほうがよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

「ビジネス展望」というタイトルになって１０年以上たつが、それ以前から同趣旨のコーナーとして続いている人気コーナーだ。外部の方２０人ほどに解説をお願いしているが、半年スパンで当番を決めさせていただき、４週に１回ほどの出演となっている。年ごとに多少入れ替えを行っており、年齢などを勘案しながら、新しい方にお願いしている。

○　平均年齢を下げ、入れ替えを激しくやっていただいたほうがよいかと思う。

○　同じニュースをテレビで見るのとラジオで聴くのとでは印象が違うことがままある。特に暗いニュースが続く際に、テレビでは感じないが、ラジオだととても暗い気分になる。ラジオのニュースの組み立て方とテレビのニュースの組み立て方で、順番、話すトーンなどは変えているのか。

（ＮＨＫ側）

ラジオは基本的に耳で聴くメディアであることを考慮してニュースの順番を決めている。例えば、スポーツなどの映像的なニュースをラジオで伝える場合、順番は、後ろに持って行くケースが一般的に多い。結果的にテレビと似たような順番になることもあるが、そういう面では違うこともある。長い原稿のニュースの場合は、映像がないため暗いイメージがテレビより強くなることもあるかもしれない。また映像だけで見せるようなニュースはラジオで省くこともあるため、明るい感じを出しづらい面もあろうかと思う。

○　「連続テレビ小説」や「大河ドラマ」が終了し、次の番組に変更になることは分かりやすいが、それ以外に番組を入れ替えるのは、どういう判断で行われるのか。例えば前の番組の視聴率が低かったから替える、若い世代を求めるために番組を替える、視聴者がニュース、各地の事情を知りたいからそういう番組に替えるなど、いろいろあると思うが、特徴的なものがあれば紹介してほしい。

（ＮＨＫ側）

総合テレビの後半期は、「連続テレビ小説」や「大河ドラマ」を除いて大きな変更はない。今年度の番組については去年の秋に中央番組審議会で審議をしていただいた「平成２６年度国内放送番組編集の基本計画」に基づき、編成を行っており、それをさらに充実させる方向性で考えた。別の編集方針を立て、後半期に新たな番組を置く考えはない。「地球イチバン」と「ファミリーヒストリー」は昨年度も放送し、それなりの手応えがあった。審議していただいた「平成２６年度国内放送番組編集の基本計画」の中の「多彩な番組を編成」し、「各世代に必要とされる番組」にかなうであろうと考え編成した。大きな編成方針では夜８時台、夜１０時台は定番の番組を編

成している。特に夜８時台は、「鶴瓶の家族に乾杯」「ＮＨＫ歌謡コンサート」「ためしてガッテン」「木曜時代劇」という形で多くの方々に楽しんでいただいている番組を編成している。それなりに番組の寿命はあるので、いつかは次の番組に替えなければいけない。トライアル・アンド・エラーでいくつもの番組を実際に放送し、視聴者の方々からの反応などの手応えを得る必要がある。新しいチャレンジを行う番組を、夜１０時台、ほかの時間帯も含め、いくつか試し、毎年度の改定を進めるという考え方だ。そうした中で後半期の番組について番組の入れ替えを考えた。

○　例えば「タイムスクープハンター」のような番組はどうだったのか。後半期の編成から無くなっているのは評判がよくなかったからなのか。「総合診療医　ドクターＧ」はおもしろい番組だったが、ネタ探しが難しいから替えたのかなどいろいろ感じた。どういう理由があったのか。

（ＮＨＫ側）

「タイムスクープハンター」が後半期で別の番組に替わったのは、１年間継続するだけのテーマを見つけることが難しいこともある。スタッフをそろえたり、準備期間的なことも考慮したりして半年間放送し、後半期は別の番組を放送するという現場の事情もある。「タイムスクープハンター」は問題があったからやめるということではない。今年の前半期は「タイムスクープハンター」で、後半期は「妄想ニホン料理」に交代したと理解していただければと思う。「総合診療医　ドクターＧ」も同様である。そういうローテーションを繰り返し、定時の番組以外の時間帯において、新しい番組を開発しトライアルを行い、視聴者からの評判や視聴率がよいといった手応えがあれば準備し、定番の番組と入れ替え、新しい番組のシリーズを制作する。定時番組はそういう仕組みで考えるのが原則だ。「大河ドラマ」「連続テレビ小説」のように１年間をベースとして制作するものもあれば、そういうものもあると理解していただければと思う。

「地球イチバン」の前の「ＬＩＦＥ～人生に捧げるコント～」、「ファミリーヒストリー」の前の「総合診療医　ドクター

Ｇ」、「妄想ニホン料理」の前の「タイムスクープハンター」は、いずれも質の評価調査において「これさえあれば満足できる」というような得点が高く、若い世代の方々に対して、ＮＨＫのほかの番組にないような広がりがある番組である。この３番組については評価が高いと考えており、低いので替えたわけではない。

＜放送番組一般について＞

○　７月２７日(日)のＮＨＫスペシャル「調査報告　ＳＴＡＰ細胞　不正の深層」についてだが、当初ＳＴＡＰ細胞の論文が発表された際、マウスから取り出した細胞を浅漬けのようにし、ＳＴＡＰ細胞ができ、キメラマウスまで生まれるという話は私も素人ながら信じてよいのかと混乱していたが、番組では論文内容の欠点、特にＳＴＡＰ細胞に元のマウス遺伝子が一致しない点の指摘、ＥＳ細胞のコンタミネーションの可能性、論文の作り方、データの信ぴょう性がオーソリティに埋没する様子などが大変分かりやすく描かれていた。また、厳しく不正とする、摘発性の高い番組になっていた気がする。８月５日(火)に再生医療研究のトップの笹井芳樹氏が自殺したが、当番組のインパクトが気になった。

（ＮＨＫ側）

「不正」ということばがタイトルにあり、ネット上でも取り上げられたが、「不正」という単語はあくまでも論文の不正を理研側が確定し、その論文の不正がなぜ起きたのか、その背景を探るという趣旨だった。

○　メディアの活動は、基本的により良い社会を作ろうとして、おかしなことはおかしいと、報道し論評することが仕事である。だがその報道で、確かに悪い行動を起こした人たちであるとしても、相当のダメージを受けることがあり、場合によっては自殺に追い込まれることもある。ＳＴＡＰ論文問題の小保方氏、笹井氏について、番組でどのような取り上げ方をしたのかが気になっている。東京電力福島第一原発の問題も同様で、真剣に対処している現役の技術者は、自分自身がおかしたことではなくても、社会のためを思って活動している。民放にも立派な番組があるが、そうでもない番組もあり、仮にＮＨＫがそれらと競って「人の不幸は蜜の味」的な番組を作ることで、チャンネルを合わせる視聴者がいるとしたら、それは問題だと思う。問題点を挙げるのと同様に、上手くいっていることも報道するくらいの気持ちが必要だと思う。

○　８月１３日(水)のＮＨＫスペシャル「狂気の戦場ペリリュー～“忘れられた島”の記録～」(総合 後 10:00～10:49)は強烈なドキュメントだった。アメリカがガダルカナルなどの島を島伝いに北上する中、日本軍がそれまでの突撃戦から持久戦へ戦略転換した最初の戦闘地という位置づけが分かりやすかった。また、アメリカ軍が３日間で平定しようというもくろみで戦いを始め、あらゆる弾丸を撃ち込んだにもかかわらず、２か月以上も持ちこたえたという状況がよく表れていた。９０歳前後の方々のインタビューを日本とアメリカ両方で撮っていたが、今後証言する機会がなくなっていく方々の、映像と鍵になるようなことばを残したという、意味のある番組だった。アメリカの従軍記者、映像を撮ったカメラマンが過去を振り返り「なぜこんな映像が今出てきたのか。私はあの日からずっと寝られない日が続いている」等を言いながらも「瓶の中にサソリを入れ、ふたをし、殺し合いをさせた戦争だった」とも言っていた。すさまじい映像が印象的だった。

○　ＮＨＫスペシャル「狂気の戦場ペリリュー～“忘れられた島”の記録～」は非常によい番組だった。アメリカでフィルムが発見され、さらにいろいろな人から証言を聞いて番組を制作していた。一方でアメリカは記録を取りながら戦争をする国で、日本はそういう感覚が全くなく、別の意味で考えさせられるところがあった。

○　ＮＨＫスペシャル「狂気の戦場ペリリュー～“忘れられた島”の記録～」は、８月１５日前後の一連の企画の中でも秀逸だった。米軍の戦術転換によって、戦略的意義を喪失してしまっても、一度始まってしまえば中断できず、双方が無意味な大量殺りくを招いてしまう、という戦争の宿命を冷静に描き出すことに成功していた。それは決して「狂気」などではなく、戦争というものが本来的に持つ「合理性」といっていい。両国の当事者たちの貴重な証言を引き出したことは奇跡に近く、こうした番組こそ国際放送の中でも紹介していくことが重要であり、ＮＨＫの責務だ。

○　８月１５日(金)のＮＨＫスペシャル　シリーズ日本新生「戦後６９年　いま“ニッポンの平和”を考える」(総合 後 7:30～8:43)は、スタジオでの少人数の専門家による討論と、一般市民による討論を録画したものという組み合わせについて、討論番組の一つのあり方を示すものとして評価したい。録画の方は一部の紹介のみで、参加者からすれば不満も残るかも知れないが、これまでのライブ型でも、双方向の議論はなかなか期待できず、やむを得ない面もある。そこでの論点を受けての少人数での討論によって、双方向の議論と論点の深まりが可能となったように思われる。ただし、予めのシナリオ作りが不十分だったと見え、発言のなかのキーワードに引っ張られた進行となってしまい、さらに深められる論点が素通りされてしまったのは残念だった。

○　８月３０日(土)のＮＨＫスペシャル　巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲ　地球大変動の衝撃　第１集「異常気象　“暴走”する大気と海の大循環」は、地球大変動シリーズの大型導入編でもあると思う。視聴している側の関心にうまく応える作りになっていた。やや長めながら最後まで飽きることがなかった。温暖化や異常気象については、多くの人は漠然と知っているつもりで、温暖化がどんなメカニズムで災害につながるのかはほとんど知らないというところではないだろうか。その大きな穴を埋めるような番組だった。身近に知る日本の例だけでなく、250 年ぶりの大洪水があった英国、500 年ぶりの大干ばつが続く米国などの例も挙げて、問題の広がり、深刻さを示しながら「大気と海の大循環」について実写やＣＧをふんだんに活用し、分かりやすく説明していたと思う。偏西風の大蛇行や深海の水温の変化など、数字だけ知っても抽象度が高く、消化しにくいデータを「なるほど」と納得がいく形で示すことに成功していたと思う。研究者のコメントも分かりやすく、また、タモリ氏の平易な語り口も視聴者が番組に入り込むのを大いに助けたと感じる。

○　８月３１日（日）のＮＨＫスペシャル　巨大災害　ＭＥＧＡ　ＤＩＳＡＳＴＥＲ　地球大変動の衝撃　第２集「スーパー台風　“海の異変”の最悪シナリオ」を見た。最近は台風の巨大化、頻発する豪雨、地球の温暖化問題など、いろいろ思っていることがあったが、水深 100 メートルぐらいのところの水温が温まると、台風が巨大化することなどを実験も交えながら紹介するなど、大変分かりやすく解説していた。自然災害が起こる背景、特に最近起きているような大きな災害の背景については地球温暖化問題も含め、引き続き番組を制作してほしい。大変よい番組だった。

○　第２集「スーパー台風　“海の異変”の最悪シナリオ」は、基本的なつくりは第１集と同じなので、とても分かりやすかった。なんとなく最近は台風もずいぶん激しくなっているような気がする、という普通の人の感覚に寄り添いながら番組は進行していた。しかし、海水温度の変化によって台風の急速強化が起きるという、全く知らない情報を得ることができた。変な言い方かもしれないが、視聴したおかげで、新しくて大事なことについて自分の理解が深まるという得をした気分にもさせてくれる。このシリーズはあと２回予定されている。大いに期待できそうだ。

○　直接見ていないので経緯を知りたいのだが、７月１７日(木)の「ニュースウオッチ９」で大越健介キャスターが「在日コリアンは強制連行の人がほとんどだ」という趣旨の発言をして、経営委員会でも触れられたとのことだが、経緯はどうだったのか。

（ＮＨＫ側）

７月１７日(木)の「ニュースウオッチ９」の件だが、在日コリアン３世の結婚観がずいぶん変わってきて、昔は日本人とは結婚しなかったのが、今は日本人と結婚し、出自をほとんど意識しなくなったという企画だった。大越キャスターが、「在日コリアン１世の方はいろいろな形で日本に来ている。強制的に連れてこられた人、自ら職を求めて来た人、いろいろな形で来た人がいるが、総じて苦労され、生活の基盤を作られた」という受けのコメントをした。このコメントについては、多くの意見をいただいたので、それを受け止め、参考とし、常によりよい表現をしていくとご説明した。

○　オスプレイの報道については再三ここでも話しているが、またひと言申し上げたい。７月２２日(火)の昼の「ニュース」で、オスプレイが佐賀空港に配備され、武田防衛副大臣が古川佐賀県知事に会ったと伝えたあと、佐賀県民の声として「オスプレイの軍事利用は認めない」というようなコメントが出ていた。レポーターも「本当に必要かどうか」とコメントしていた。オスプレイが配備されたのは、将来配備される水陸機動団の輸送手段など、いろいろな意味がある。そういう解説があり、反対の声が出るのならばよいが、なぜかいつもオスプレイの報道については、動きとそれに対する反対の声だけで終わってしまう。今回で言うと、武田防衛副大臣はオスプレイを配備する側の動きで、バランスを取るとすれば反対の意見だけを言えばよいという処理の仕方をしている。佐賀のニュースも、沖縄のニュースもそうだが、放送局のデスクの原稿がダイレクトに東京へ来て、そのまま放送されていると感じる。東京の安全保障を担当している人が見てチェックする体制を取ったらどうかと思う。７月１９日(土)には米軍のオスプレイが、横田や東北の方に飛来し、そのときも批判的な報道が続いた。アメリカ海兵隊の中でもオスプレイは事故率が低く、そういう事実があるにもかかわらず、相変わらず危険だという報道をしている。日ごろ、沖縄の負担軽減を言っていて、訓練の場所を沖縄以外に移すねらいもあってやっていることに触れられないのは残念だ。

（ＮＨＫ側）

オスプレイの報道について指摘をいただいた。オスプレイの問題は日米安全保障という枠組みの問題や沖縄の負担軽減という問題がある。オスプレイという新しいヘリコプターについての安全性の問題もある。さまざまな捉え方があるので、オスプレイはこうと決めつけず、いろいろな角度から問題を

どう捉えたらよいのか、どう判断したらよいのかという材料を提供するような報道を心がけたいと思う。昼の「ニュース」のような放送時間の短い中では動きとして、武田防衛副大臣の話と反対派の集会になるケースもある。素材とそれに対する評価、賛成、反対という問題については、バランスが取れ、分かりやすく多角的に捉えていると多くの人に評価されるよう、引き続き取り上げていきたい。

○　素材を出し、それに反対の人だけを出すと、反応は反対として見られてしまいがちだ。反応についても賛否両論を入れた方がよいかもしれない。

○　「日曜討論」では討論に出ている方の議論もそうだが、画面下に視聴者からのコメントが流されている。それを見ていると右、左、いろいろ意見が分かれていると分かる。そういう手法を積極的に取り入れれば、幅広い意見をできるだけ反映するような報道の一助になるのでないかと感じた。

○　８月３日(日)の小さな旅・選「雷（らい）さまの慈雨～栃木県下野市～」を見た。あの地帯の農業をともにする生活ぶりが映されたよい番組だった。かんぴょうで暮らす農家が、うだるような暑さの中で夜遅くまで納屋の中で仕事をする、国道４号沿いの風景がとてもよく出ていた。関東ローム層のこと、稲わらを敷き詰めて保湿することまで触れられていて、神様に祈る農家の思いのようなものがとてもよく表現されていると感心した。石橋駅付近でのかんぴょうの問屋街での様子も分かりやすく解説されていて、あの地域がなぜかんぴょうが特産なのか、農家の暮らしがよく表現されていた。

○　８月１３日(水)のドキュメント　決断「原発とどう生きる～東京電力元社員～」(総合 後 10:55～11:20)と８月１４日(木)のドキュメント　決断「暴力団“離脱”その先に何が」(総合 後 10:55～11:20)についての意見と感想を述べたい。「原発とどう生きる～東京電力元社員～」についてだが、原発事故が起きてから東京電力社員 3,000 人弱が退職されているが、ほとんどが東京電力の社員であったことを隠して暮らしているそうだ。ＮＨＫの取材も難しかったと思うが、当時福島の原発を担当していた３４歳の男性が顔と名前を出し、取材を受けていた。その方も震災後度重なる転勤など数え切れないほどの厳しい状況に置かれ、昨年１月に会社を辞めていた。その決断がテーマなのかと思ったが、そうではなかった。男性は会社を辞めた後、復興のためには原発をどうにかしなければならない現実や、今も自分の元同僚たちは一生懸命に福島で闘っていることなどを考えながら、自分が辞めたこと

は逃げただけなのではないかと苦悩していた。事故の責任を感じながら、彼がどう生きるか決断を迫られているということばが印象的だった。ただ辞めただけではなく、そこからの人生をどう生きるかについてはまだ決断に至っていないということについて考えさせられた。

○　「暴力団“離脱”　その先に何が」については、“闇社会”の組織から離脱するための決断をする元犯罪者を取り上げていて、刑務所から出所してきても社会が受け入れてくれず、再び罪を犯してしまう現実が紹介されていた。組織犯罪の専門家は「暴対法を作ったが、暴力団を追い込むだけ追い込み、行き先を作らない。次の段階について、みんなでもっと考えなければならない」と語り、また元犯罪者の社会復帰を支えるＮＰＯの方は、「受け入れる側、私たちの決断も必要で、多くの更生者を受け入れる決断をしてほしい」と訴えていた。２つの番組が取り上げたテーマを重く受け取った。彼ら自身が決断をするだけではなく、私たち社会も何らかの決断が迫られていると感じさせる番組だった。私たちに見えないところで苦悩している人たちの決断についてさらにいろいろなテーマを考え、番組を作ってほしいと強く思った。番組を見る前は誰かが何かについて決断したのだろうと簡単に思っていたがそうではなく、突きつけられるものがあり、よい番組だった。

（ＮＨＫ側）

「ドキュメント　決断」については、今回３本制作した。１つ目は「“名物社長”の引退～ジャパネットたかた　高田明～」（総合　８月１２日(火)後 10:55～11:20)で、通販会社社長が社長職を辞め、息子に引き継ぐ決断だ。あれだけの人気企業で、茶の間の人気者になった人が引き継ぐときの心の内はどういうものなのかを描いた。２つ目が「原発とどう生きる～東京電力元社員～」で、３つ目が「暴力団“離脱”　その先に何が」だった。決断というテーマで本当によいのかといろいろと考えた。個人の決断を描くことで何が見えてくるのか、そういう人たちがもがき苦しむ姿を通じて、われわれにもある種の決断が必要なのではないか、考える必要があるのではないか、というメッセージにしたかった。番組意図はよく伝わったと思う。

○　ドキュメント　決断「暴力団“離脱”　その先に何が」については、出所してから職を持つことで再犯率が下がるという事実はある。職の存在は重要だが、元犯罪者を雇う企業はなかなかなく、職を見つけられないのが現状だ。日本財団が昨年度

より「職親（しょくしん）プロジェクト」を始め、企業を巻き込んで取り組みを行っている。飲食店等で出所者を雇用すると給料の一部を助成する形だ。ある程度成果が得られたならば、出所者の再犯防止にもつながるし、政策的に展開できればかなり犯罪率の低下が期待できる。ＮＨＫがこのテーマで引き続き伝えるのであれば、そういうものを追っていただき、ある種の処方せんとして見てもらうことがよいのではないかと思った。

○　ドキュメント　決断「原発とどう生きる～東京電力元社員～」は深刻な話だったが、偏りのない取り上げ方をされていたと思う。

○　「君が僕の息子について教えてくれたこと」（総合　８月１６日(土)後 11:00～11:59)は、自閉症の子どもがつづったエッセイが翻訳され、世界で同じような悩みを持つお父さん、お母さんに役に立っているという話だったが、感動的な作品だった。日本で出版された８年後に、英訳されて世界に広まったということだが、なぜ出版当初日本でそれだけのパワーをもって広がらなかったのかという疑問が残った。その辺りにも触れてもらえればよかったという印象は持ったが、トータルとしてはすばらしい作品だった。

○　「タイムスクープハンター」は、私は好きな番組だ。何百年も前の話を、なるほど、もしかしたらこうだったのかと感じさせてくれ、時代劇では紹介されない庶民の生活を見せてくれるよくできた番組だと思う。

○　８月のＮＨＫで放送した戦争を振り返る番組は見応えがあった。８月１２日(火)のＢＳ１スペシャル「女たちのシベリア抑留」（ＢＳ１　後 9:00～10:49)は、シベリアに抑留された女性たちの目から見るという視点の新しさを感じた。実際に抑留された女性たちが、どういう生活をしたかという証言に基づいたドキュメントで、戦争の全体像をうまく捉えていた。９０歳前後の方々から証言をとっていたが、女性が言いにくい話も推測できるような内容で顔出しで表現していた。また、最も過酷な収容所に連れて行かれたにもかかわらず、日本にあえて帰国しなかった女性の体験も周辺の関係者にも話を聞いており見応えがあった。ロシア側の情報公開などの動きについても伝えており、バランスの取れた番組だった。

○　８月２１日(木)の昭和の選択　第１回「国際連盟脱退　松岡洋右　望まなかった決断」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 8:00～8:59)は、「松岡洋右がイニシアチブを取り、国際連盟を脱退した」ということが１つの常識ともなっている中、実は当初は脱退しない方針で交渉に当たっており、その選択肢もありえたのに、結果的に脱退を決断せざ

るをえなくなった経過がよく描かれていた。また、それを基に若手中心の歴史学者がいろいろな見立てをそれぞれにぶつけ合うのも新鮮で、それなりの蓄積と説得力のある人選もよかった。

○　中東ニュースについてだが、ガザ地区の占領については力関係、構図が見えているが、今いちばん分からないのは、イスラム過激派組織「イスラム国」という新しく地域に力を持って台頭しているスンニ派の勢力のことだ。その勢力の背景、今後の動き、実態などをすでに報道しているかもしれないが、ＮＨＫの総合力をもって特集をし、世の中に知らしめてもらいたい。

○　イスラエル、ガザの戦闘についていろいろ報道されている。みなさんは一般論として過去の歴史を知っているわけだが、なぜハマスがそこまでかたくなに抵抗するのかは、必ずしも一般的に知られている歴史の問題だけではなく、現状、ガザが置かれている立場、ガザだけでなく、パレスチナが置かれている生活の状況があり、そういう事態になっていると思う。これは一つの例だが、大きな問題についてはいろいろな側面で掘り下げ、多くの人が分かるように説明していただきたい。

（ＮＨＫ側）

中東の問題は、日本人にとって分かりにくい面もあると思うので、「イスラム国」の財政力などの背景、ガザの和平問題の背景、今後の行方についてニュース、企画、番組等でしっかり取り上げていく。

○　保育所についてのニュースで、神戸市東灘区で保育園の子どもがうるさく騒音だとして、７０代の男性が裁判を起こしたと伝えていたが、これはゆゆしき問題だ。もしも保育園側に賠償を命ずる等の判決が出たならば、日本の保育政策は終わると言っても過言ではない。以前であれば子どもの声は地域に溶け込み、騒音などと思わない、思ったとしてもコミュニティの文化の中で規範的に迎えられていた。結婚が一般的でなくなり、未婚、非婚率が高まることにより、子どもの声が騒音視される時代が来つつあることはそういう事例に示されている。しかし、本当に騒音と見なされてしまったら、保育所を作れなくなり、待機児童対策は進まず、女性を中心に働きながら子育てをすることが困難になる。海外、たとえばドイツでは子ども施設の騒音に特権付与法が成立している。施設の子どもの声を騒音と見なさないという法律だ。共同体の存続と個人の自由の相克をある程度打開するような社会的な施策が必要であり、モラルの問題として片づけるようなニュースにはしてほしくない。

仕組みとして社会が相対していかなければ犠牲になるのは子どもたちであり、子どもを持つ親たちだ。ニュースとして取り上げるだけでなく、掘り下げていただき、社会的にどのようなカウンターを起こすべきなのかという制度設計につながるような報道をしていただきたい。

（ＮＨＫ側）

保育所の問題はモラルの問題として捉えるのでなく、社会の仕組みとしてどう捉えるのか、背景と問題の解決方法はどういうものがあるのか、掘り下げ、取り上げたいと思う。

○　昔のフィルムを使用した検証番組は、ＮＨＫの大きな財産だと思う。そういったフィルムは、アーカイブスに入っていると思うが、それらをどうやって活用するかが課題だと思う。来年は戦後７０年だ。生存する証言者たちとの時間の競争だと思う。まだ欠けている歴史の断片があると思うが、ＮＨＫはそれらを埋める算段をしているのか。

（ＮＨＫ側）

戦後７０年については、戦争を体験された方々が高齢になっているので、そういう方々の証言をこれまで同様に丹念に取り上げる番組を考えている。戦後７０年の節目は単に戦争の問題だけでなく、戦後の日本の歩みについてもきちんと取り上げたい。そういう歩みを取り上げながら日本がこれからどう進むべきなのか、将来についてのさまざまな考え方、見方も取り上げ、ある種の未来志向の番組も併せて考えていく。

○　ニュースなどを見ていると、ことばの使い方で日常的に私たちが使うものと距離が少しあるように感じるものがある。たとえば「コメ」は「おコメ」と普通言いうが、報道などでは「お」を付けないなど、いろいろルールがあると思う。ただし、昔は言っていたのに言わなくなったというタイプのものもある。そういうものは時代に即し、どう考え、判断しているのか。

（ＮＨＫ側）

用字用語については放送文化研究所、あるいは番組考査など、さまざまな形でチェックしている。現代的なことばづかいも取り入れ、伝統的な日本語をきちんと守る立場から取り組んでいるが、ことばも世の移ろいにより変わる。それを使

うのか、使わないのかという議論は組織内部でもいろいろ検討した末に、広く使われているものについては取り入れている。

放送文化研究所が事務局になり、放送用語委員会を設けており、言語に詳しい外部の有識者が委員を務めている。ことばの使われ方が時代によって少しずつ変わってきているが、放送文化研究所の世論調査、アンケートなどのデータも基にしながら外部の有識者の意見を伺い、１つ１つ放送のことばづかいを決めている。

○　ＮＨＫワールドについて提言させていただきたい。６月２０日に放送法の改正案が成立し、放送と同時に番組をネット配信する、同時提供が一部の領域で可能となった。番組をユーチューブ等にアップすることも可能になると思う。これまでもＮＨＫワールドのウェブはすばらしいものだったと思う。ＮＨＫワールドのウェブから動画が見られるようにはなっているが、逆にＮＨＫワールドのウェブまで行かなくては動画が見られない環境でもある。国際的な議論がブログ、サイト、ソーシャルメディア上で行われる時に、適切に引用されることは重要だが、ＮＨＫワールドのウェブから引用する形では議論がしにくい。例えばユーチューブ等にアップし、動画を自由にシェアできるようになれば大きな発信力につながるのでないか。アルジャジーラはユーチューブ上にアルジャジーラチャンネルを持ち、無料でさまざまなニュースを動画で見られ、その動画はシェアすることが可能だ。中東の情報はバイアスがかかって見られがちだが、アルジャジーラが出している英語のコンテンツにより、中東の立場も理解できるようになる。発信力の高まりにとても貢献していると思う。日本は国際的な発信力が重要な状況になっているのではないかと思う。東海と日本海の記述問題、従軍慰安婦の問題などは繊細なテーマだが、日本側の主張、意見と事実を切り分け、フラットな形で国際社会に発信していくことが大変強く望まれていると思う。日本の主張を出す意味でも、もしかすると唯一のツールがＮＨＫワールドではないかと思う。強化するためにもインターネットとの連動、なかんずくユーチューブ等の別プラットフォームにおけるコンテンツ共有を進めていただくとよいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫワールドのニュースをスマートフォンなどでストリーミングで見ることが可能だ。ユーチューブの問題は著作権処理が当然かかってくる。私どもがストリーミングで流し

ているものはわれわれが流している放送ということで著作権処理をしているが、ユーチューブ等に上げると別途の処理が必要になる。今のところ、われわれのコンテンツをユーチューブ等にそのまま上げるようなことは考えていない。これで十分に機能を果たせると考えている。

○　あえて反論させてもらうが、それでは足りない。ＮＨＫワールドのウェブまで行かねば動画が見られないことが課題である。ＮＨＫは日本で唯一無二の存在で知られているが、世界的にもＮＨＫ、ＮＨＫワールドのウェブサイトを知っている外国人は少ない。ＮＨＫワールドのストリーミング動画はシェアすることができない。例えばブログにはそのサイトへ行かなくても見られるように動画を埋め込むことができる。そうすることでシェアしやすいからだ。ブログ上でいろいろな議論があるときにほかのサイトに誘導するのではなく、そこで直接見られるというのは強い。ＮＨＫワールドでは、シェアするための機能が低い。

（ＮＨＫ側）

今のところＮＨＫワールドは世界で２億 8,000 万世帯が視聴可能だが、実際に視聴いただいているわけではない。いろいろな形でプロモーションし、ＮＨＫワールドＴＶを見ていただく努力をしている。それを増やすためにはいろいろな手段がある。委員のご意見が可能だとすれば検討したい。

○　「最近のＮＨＫの番組はどうか」と出会う人に質問すると、総じてＮＨＫの番組はすばらしいという意見が多いが、１つ批判があったのは「コマーシャルはないが、番組予告が最近多すぎるのではないか」ということだ。たまに予告があるのはよいと思うが、大河ドラマ「軍師官兵衛」の直前にその番組予告を入れるなど、やや番組ＰＲが多すぎるのでないかという意見があった。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２６年７月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

７月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１４日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２６年度第１四半期・４～６月）について報告があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
有森　裕子（元マラソンランナー）
大野　博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
小田　　尚（読売新聞東京本社専務取締役論説担当）
鎌田　實　（諏訪中央病院名誉院長）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
駒崎　弘樹（ＮＰＯ法人フローレンス代表理事）
佐野真理子（主婦連合会参与）
龍井　葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
和田　　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２６年度第１四半期・４～６月）について＞

○　おおむねよい結果が出ているのではないかと思う。特に信頼の項目が高く評価されているということはさすがだと思う。このことは、現場の人たちが一生懸命に仕事をされていることの表れだと思う。

○　視聴率が高い番組は質が高いという相関関係があるということだが、そういうものなのか。

（ＮＨＫ側）

いろいろなデータを分析すると、ＮＨＫの番組は、番組によって評価される項目は違うが、視聴率が高いと質的な評価も高いという結果が出ており、その逆はない。質的評価が低くても視聴率が高いという番組はＮＨＫにはない。ＮＨＫの番組を質と量との関係でデータから分析すると現実的にそのようになっている。

○　それはどのような頻度で傾向を見ているのか。ある時期にそうした結果が出たとしても変化はあると思うが、定期的にそうした分析をされていると理解してよいのか。

（ＮＨＫ側）

このデータやそれ以外のデータも四半期ごとに分析しているが、だいたいその傾向が継続的に出ている。

○　各波の１０指標評価に関しては、それぞれの項目が昨年や前期と比較してもだいたい上がっているのはよい成果だと思う。そんな中、デジタルサービスに関しては満足度が結果として示されているが、今後はたとえば総合テレビに対する満足度とか、公共放送としてＮＨＫが放送するＥテレに満足しているかなど、１０指標だけでなく、総合的に満足しているのかについても調査したほうがよいのではないかと思う。デジタルサービスについては満足度を聞いているが、今後、総合テレビ、Ｅテレ、ＢＳ１、ＢＳプレミアム、それぞれに関しての総合満足度も調査したほうがよい。視聴者がＮＨＫに満足しているのかを知ることはＮＨＫとして大事な視点だと思う。

（ＮＨＫ側）

検討したい。

○　前期の調査結果と比べると少しよくなっているのは分かるが、基本的に同じような傾向を示していると思う。この各波に対する１０指標の評価だが、実際に番組を見てこういう判断をしているというより、ＮＨＫのイメージで答えているという感じはないだろうか。実際の感想なのか、ＮＨＫについてのステレオタイプなのか、その辺りはどう見ているのか。

（ＮＨＫ側）

この調査は2,000のサンプル数で実施している。去年、連続テレビ小説「あまちゃん」が幅広い視聴者層に好評だった。その時期に「わくわく・ドキドキする」の評価がどれぐらい上がるかと思っていたが、わずかな上昇にとどまった。個々の番組がいろいろと果たす役割がある中で、それを総合的にまとめると数字的な変化はあるが、大きく動くことはなかなかない。調査結果にこのような傾向があることはわれわれも承知している。一方で、ステレオタイプということもあるが、「丁寧に取材・制作されている」、「正確な情報を迅速に伝えている」の項目が継続的に高く評価されているかはＮＨＫとしてとても大切なことで、そうした視点でも見ている。たとえば３期連続して下がるなど、一定の傾向を示すことがあれば、原因をどの番組と特定できるかは分からないが、全体的にてこ入れしなければいけないといったことは出てくると思う。

○　結果として見るとＮＨＫのイメージと言いつつも、ＢＳ１、ＢＳプレミアムのほうでは「わくわく・ドキドキする」の評価は結構高いので、総合テレビを見ている人が評価どおりに見ているということかもしれない。

○　どこを目指してこういう調査をしているのかが説明だけでははっきりしない。たとえば総合テレビの場合、全体のバランスがＢＳのように円型にまとまることを目指しているのか、または、いくつかの評価が高ければそれでよいということなのか。全部が１０点満点を目指すのは理想的だが現実的ではないだろう。このデータを取るに当たり、目指すところをどのように考えているのか。

（ＮＨＫ側）

放送している波によって調査結果の形がかなり違う。この調査を始めて３年となり、それまでは感覚としてある程度分かっていたが、初めて視覚的に分かるようになった。もっと高くなってほしいところ、このまま推移してほしいところをわれわれなりに優先順位をつけて見ている。たとえば総合テレビでは「わくわく・ドキドキする」よりも「正確な情報を迅速に伝えている」の評価が高いほうがよいと思う。ＢＳプレミアムでは「わくわく・ドキドキする」の評価を高くしたい面もある。これは健康診断を四半期ごとに行っているというイメージで、目的を

どこかに設定しているというより、状態を常に把握しておきたいというのが第１の目的だ。

（ＮＨＫ側）

それぞれの波で色が付いている指標は、特に意識する領域として私たちは捉えている。たとえばＢＳプレミアムであれば「わくわく・ドキドキする」を含め左半分が高くなればよく、ＢＳ１では右上の「丁寧な取材」や「正確な情報」の領域が高くなればよいと考えている。総合テレビは幅が広い。それぞれの波でここを高くしたいという目標はこうした形で共有している。

○　形はこれでよいと思うが、指標については、ここは７点ぐらいを目指したいなどの目標があると思う。健康診断でも人間ドックでも、検査項目ごとにここから正常値という基準があるし、そうした目標値を一緒に示すと見る側もわかりやすいと思う。数値だけを出してもそれが目指すべき結果となっているのかわからないので、今後検討してほしい。

○　ＫＰＩ（重要業績評価指標）がよく分からず、何を目指しているのかが分かりづらい。指標を絞り、ここまで数値が達すればよしとするなど、より具体化すればよいかと思う。世代と男女でクロス集計をしたものがあるのならばそのデータも示してほしい。特に若い世代がＮＨＫを見ないことを課題だと認識しているのであれば、若い世代の満足度だけを切り出し、ほかの世代と比べるとどうなのかという見方もできる。たとえば３０代女性は満足しているが、３０代男性は満足していないのであれば、そこに向けた番組、アプローチをとれば数値が上がるのかもしれない。

（ＮＨＫ側）

どれぐらいの年層の人が答えているのかは分かっている。クロス集計もしているが、ここでは総計だけで示している。

○　現状認識のためのデータとして安心を得る、あるいは世の中の見方を捉えるという意味で、意味のあるデータだと思う。過去に結果が悪く、何らかの対応をしたことがあるのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

このデータから直接導いたわけではないが、過去１０年ほど取り組んでいることがある。１０年ほど前に２０代、３０代、

４０代と比較的若い世代の人たちが総合テレビをあまり見ないという調査結果があり、そこを何とかしないとこの先ＮＨＫを見る人が少なくなっていくのではないかという危機感があった。そのため、見やすくするために、たとえば番組の語り口を親しみやすくするなどしたが、それは一歩間違えると民放化しているのではないかと批判を浴びることもある。番組の中で伝えていることは変えずに、おもしろそうに見せる演出を、かなり気を使って試みてきた。その１つの典型は「あさイチ」だ。情報自体は以前の番組とあまり変わっていないが、演出のしかたはかなり変わった。そのことによって「あさイチ」は３０～５０代の女性の視聴者がとても増えた。そういう取り組みを行うために各種調査をしており、この調査もその一環だ。

○　諸外国とも比べることで、国民のレベルを高める放送をするにはどうしたらよいのかということを研究してほしい。

○　質的分析をする以上は「わくわく・ドキドキ」でも意味が相当違うと思う。総合テレビを見た人とＢＳ１を見た人で違うはずだ。最初の段階はこうした形で示すのもよいが、詳しいデータがあるのならば、ＰＤＣＡサイクルに合わせ、もう少し踏み込んだ表現で、年代別、性別ごとに「わくわく・ドキドキ」の意味は総合テレビとＢＳ１はこう違うので目指すものとの一致ではこうなったというようなところまで分析をしていたら教えてほしい。それが質を分析することの意味ではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

ここに示しているのはそれぞれの波について１０点満点でアンケートをとった結果だ。これ以外にも定時番組について同じ項目で聞いている調査がある。その結果、番組によって「わくわく・ドキドキ」の捉え方は全く違う。例えば、スポーツなどの「わくわく・ドキドキ」とサスペンスドラマの「わくわく・ドキドキ」とは意味が異なる。この違いは１つ１つの番組との関連を調べることで把握している。波についての大づかみなデータだけで質的な評価を判断するのは難しいということもよく分かるので、これからどのように具体的に示せるか研究したい。

○　ＮＨＫが今の若い世代をどう把握するかも目的としているということだが、「わく

わく・ドキドキ」は若い世代と中高年で違うことを、１つ２つの番組の調査結果でもよいので、狙いとのギャップや、狙ったとおりだったなど事例を含めて示してもらうと、質的分析がわれわれにもよく分かると思う。

○　数値は書いてあるが、それに対する評価がない。当初思ったとおりの数値になっているとか、ここはこういうことを行った結果よくなったなどの評価を示してほしい。それとともにＮＨＫが何を変えようとしているのかも示してもらうと数値の意味が出てくると思う。定点観測としての数値だという主旨は分かるが、それによって何をしようとしているのかが見えないので、そうしたものを示すとよいと思う。

○　若い人に見てもらいたいならば「わくわく・ドキドキする」、「感動できる・心に残る」の評価が上がるような番組が必要だ。その点では総合テレビは今の状態でよいということにはならないと思う。そこは重要なところなのでしっかりと分析し、番組づくりに反映させることが必要だと思う。

＜放送番組一般について＞

○　７月６日(日)のＮＨＫスペシャル「ストーカー　殺意の深層～悲劇を防ぐために～」は、とてもよい番組だと思った。加害者の声をしっかりと聞いているのは珍しく、なかなか難しい取材だと思う。深いところまで切り込んでおり、警察による警告がかえって逆効果になることがあり、またどうしてそうなるかについても分かりやすく説明されていた。一般化できるのかどうかは別だが、加害者の１人は幼少期に母親から虐待され、飼い犬を餓死させられた経験があり、加害者自身が被害者的な意識を強く持っていることがあると分かった。ストーカーということばができたので新しい現象のように思えるが、とても古典的な問題で、昔から文学の題材にもなっている。そこにメールという手段が、今日的な意味をストーカーにさらに与えていることも分かった。これは相当難問で、解決策はないのかと暗くなる話だが、オーストラリアの司法行動科学センターの治療の問題などにも触れており、行き届いた番組だった。

○　ＮＨＫスペシャル「ストーカー　殺意の深層」は、たいへん深く、よい番組だと思った。年間２万件のストーカー被害が出ており、「またか、ひどいやつだ」という感想しか持っていなかったが、番組を見てストーカーの心理のようなものがかいま見えた。ストーカーを加害者だと思っていたが、実は被害者意識を強く持っており、誰かが肉薄しないと悲劇はなくせないのだろうと思った。アルコール依存症も、かつてはその人の責任という捉え方をしていたが、病気という捉え方をすることによって少し

ずつ周りの見方が変わって来ている。１５年前にストーカーの被害者だった人がＮＰＯを作り、加害者を少しでも変えたいと面談を繰り返している。アルコール依存症も「あの人はしょうがない」とレッテルを貼って終わりにし、ますます被害者を多くしてしまったのだが、そうではなく、関わる人のいることの大事さが番組で見えてきた。外国の例が出ていたが、こうあったほうがよいとか、日本ではどういうスタイルがあるのかという提言があればさらによい番組になったのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

うつ病、統合失調症などのように世の中で病気という目で見られなかった人たちを、病気的なアプローチで対応することが進み始めている。その動きに沿って、ストーカーを病気の見地から見ることに、これからも取り組んでいければよいと思う。

○　ＮＨＫスペシャル「ストーカー　殺意の深層」を見た。ＮＰＯの立場から見て、今あるいは中期的に何が必要なのかというコメントを引き出すだけでもよかったのだが、最後は社会で考えましょうというような終わり方になっていて、よい番組だったのに残念だった。せっかくカギとなる人がいたので、外国の事例などの単なる分析ではなく、対応としてどうするかについて次につなげる手があったのではないかと思う。

○　７月１３日(日)のＮＨＫスペシャル「集団的自衛権 行使容認は何をもたらすのか」は、去年１０月５日(土)の「ドキュメント消費増税　安倍政権　２か月の攻防」もそうだったが、結果的に後付けに終わってしまった感がある。舞台裏に迫るという企画は極めてジャーナリスティックで魅力のあるテーマだが、今の時点で言えることを言うという予定調和になってしまう。基本的な問題はこうだったが、こういう経過でまとまったということで終わることが、今のタイミングが最適だったのかと疑問を感じた。こうした意欲的な番組はよいと思うが、注意が必要だ。

（ＮＨＫ側）

集団的自衛権については、ＮＨＫの世論調査で、賛成、反対よりも、いまだによく分からないという回答がいちばん多い。「ＮＨＫスペシャル」では「集団的自衛権　行使容認は何をもたらすのか」のほか、５月１６日(金)の「集団的自衛権を問う」(総合 後 10:00～11:13)、４月１２日(土)の「いま集団的自衛権を考える」で集団的自衛権について取り上げている。その他には５月３日(土)の憲法記念日特集「９条と集団的自衛権」(総

合 前 10:05～11:45)、「日曜討論」でも５月以降で４回ほど取り上げている。「ＮＨＫニュース７」、「ニュースウオッチ９」でも特集を何度も放送している。それでも世論調査を行うとまだ分からないという答えが多いので、この問題はなかなか腹に落ちにくいのか、われわれの力が足りないとも感じる。国会閉会中の審議も行われるので、この問題は引き続きさらに掘り下げて取り上げたい。

○　ＮＨＫスペシャル「集団的自衛権　行使容認は何をもたらすのか」は情報量もあり、質も高く、よい番組だったと思う。取材力がないと、制作側でことばをつないで番組化していくのだが、当事者のことばだけで構成していたことで番組の質が高まったと思う。この時期にあれだけの番組をつくれるのはＮＨＫの取材力、企画力だと思った。集団的自衛権の問題については比較的バランスがよいと以前に述べたが、ニュースでは少し偏っているのでないかと感じたことがいくつかあった。７月１日(火)の閣議決定の朝の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」では、拓殖大学の川上高司さんと元内閣官房副長官補の柳澤協二さんの２人が解説したあとに、憲法を壊すなというデモのニュースが流れた。「ニュースウオッチ９」では閣議決定後の反応として学生の声で反対とのコメントがあり、キャスターは「不安の声が広がっている」とコメントをした。その後の時論公論「憲法解釈変更　その先は？」では解説委員が「日本に危険がないときにこのやり方は理解されない」というコメントを出していた。もう少しバランスをとってもよいのではないかと思う。現実として危ない状況では見直しがなかなかできないので、安倍政権でもある程度日本の周辺で危機的な状況のないうちにというのが今の見直しにつながっている。その辺りも含めると今回のニュースについてのコメントなどは若干疑問を感じさせたところがあると思う。

（ＮＨＫ側）

　集団的自衛権については世論調査を行っても賛否がきっ抗している。ＮＨＫの世論調査でも賛否に２０％程度、どちらとも言えないが４０％程度という傾向がずっと変わらずにある。われわれは多角的に論点を明らかにするスタンスで臨んでいる。有識者の意見も賛否両方を聞かせ、どういうところに問題点があるのか、なぜ必要なのかをきちんと明らかにしていく方針で行っている。反対集会、デモの取り扱いについても意見があるが、一方でなぜデモを取り上げないのか、もっと取り上げるべきではないかという意見も多くある。取り上げ方のバランスが取れていると多くの人に理解してもらえるよう心がけてい

る。その時間のニュースに出てこないこともあるが、放送全体としてバランスを取れるように多くの人たちの判断に資するようにしたいと思うので、理解していただきたい。

○　ＮＨＫスペシャル「集団的自衛権　行使容認は何をもたらすのか」はコンパクトながら情報量も多く、優れた番組だと思った。特に安倍首相にインタビューし、心象風景や、岸信介元総理の安保改定の話を重ねて、なぜ安倍首相が今回こういうチャレンジをしているのかということに対して、１つの示唆をしていた。日本国内にいろいろな議論はあるが、結果的にアメリカはどうしようとしているのかという観点からの話、ウォレス・グレグソンさんの話など、日本のかつての防衛庁の中でそういうことに取り組んでいた人の客観的な指摘もあり、よかったと思う。この２つの観点でさらにこの問題を深く追いかけてほしい。質問はしていたが、安倍首相は集団的自衛権を容認することのメリット、理由をいろいろと言うが、リスク、覚悟については出てこず、国会の答弁でもその辺の話は出てこなかった。そこは番組でしっかりと踏み込んでいたが答えが出てこなかった。もう１歩踏み込んだやりとりができなかったのだろうかと思う。そこは世の中の人たちの関心がある重要なポイントだと思うので、今後も続けてほしい。アメリカが日本の今回の選択をどう評価し、どう使おうとしているのかという部分についてもニュースでも特集でもよいが、継続的に報道してほしい。

（ＮＨＫ側）

集団的自衛権の行使容認についてのリスクの問題、そして、アメリカの対応の問題は重要な指摘だと思う。継続して取り上げたい。

○　７月３日(木)のクローズアップ現代「集団的自衛権　菅官房長官に問う」はよい番組で、生放送でのインタビューは迫力があった。一方、生放送はインタビューの途中でも番組が終わってしまうというリスクを伴う。そうした状況にならないようなルール、工夫はあるのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代」は２６分間の生放送番組で、コメントが入りきらないことがある。「あと何秒で終わる」と示したりしているが、特にインタビューなどのケースは途中で切れないように注意したい。

○　クローズアップ現代「集団的自衛権　菅官房長官に問う」は、視聴者からの意見を

見ると賛否両論いろいろあるようだ。閣議決定の前に見たかったという意見には深く考えさせられた。とても大事な問題について、番組を通して国民が考える機会になったということではないかと思う。いろいろな意味で「クローズアップ現代」は社会問題、政治問題にタイムリーに、果敢に切り込んでいると思う。ＮＨＫが国民から見て信頼できる、チェック機能があるということも示す番組ではないかと思う。今後とも期待している。

○　６月１７日(火)のクローズアップ現代「介護で閉ざされる未来～若者たちをどう支える～」を見た。親の介護、家族の介護を担う３０歳未満の若者が１７万人いるという事実は、今まで明らかになってこなかった。社会保障の問題を考えるときに、どうしても若者と高齢者の問題を対立で捉える傾向が日本では強いが、高齢者を手厚く扱うことが結果的に若者の未来を支えることであり、社会保障は全世代型で支えなくてはいけないということを具体的に分かりやすく伝えていた。特に、若い人たちからの反響が多かったということでも意義のある番組だったと思う。

○　７月７日(月)のクローズアップ現代「原発新基準　安全は守られるのか」は、各地の原子力発電所長は想定外のことが起きたときに判断する余裕があるか、そういう教育がされているのかを捉えていた。現状は大変厳しい状況だと番組ではっきりした。また、作業員の被ばくリスクに関しては、東日本大震災では作業員の被ばく線量は 100 ミリシーベルト以下にするはずだったのが、170 人以上がこの値を超えたという事があるように、万が一のことが起きたとき、どうしたらよいのかという問題提起がされていた。原発が再開していく上で最も忘れてはいけないことは、万が一事故が起きたときに広範囲の住民、特に住民の中の弱い人たちを本当に安全なところまで退避させることができるのかどうかだ。今回の東京電力福島第一原発の事故では弱い人たちが２０キロゾーンに残った。弱い人たちが逃げられていないという問題がある中で、原発を再開する準備状況としてはまだ足りていないと思う。いくつかのテーマに絞って番組作りをするのだろうが、そうしたところにも光を当ててもらいたい。

（ＮＨＫ側）

原発の問題については、２０キロ圏、３０キロ圏のことで福島原発を例にして、これまでにも何度か検証している。今後も原発を取り上げる時は、その視点を入れ、制作していきたい。

○　７月９日(水)のクローズアップ現代「アジア労働者争奪戦」は、重要な視点を提示していると思った。アジアから外国へ行こうとする労働者の流れが日本より韓国などに向いているという内容で、その事情についても現地で話を聞いていた。こうした指

摘はさまざまなメディアで出ている。もっとしっかりと見なければいけない問題だが、なかなかうまく論じられていない部分だと思う。日本は人手不足から外国人研修生という名前で滞在を延ばすという議論が起きている。あたかも日本には移民がいないというような前提でいろいろな議論がされているが、日本にはすでに 200 万人の外国人が暮らしている。移民の定義はさまざまだが、欧米の定義によるとすでに移民だ。パーセンテージとしては低いが、絶対量としては多く、たくさんの外国人が日本で暮らしており、すでに日本は移民がいる状況だ。それにもかかわらず日本の議論は移民を入れるべきか、入れないべきかという、焦点のぼけた議論が先行している。実際はどうするかを考えないといけない状況なのだ。番組で示していたのは、議論している間に事態はもっと先に進んでしまい、誰も来ないかもしれないという、とても大事な指摘をしていた。ＮＨＫが国際放送などで日本のことを外国にしっかりと知らせることに注力することは大事なことだと思う。一方で、日本の社会に対し、日本が世界の中でどういう位置にあるのかを日本の人たちに知らせないといけない。日本を相対化する視点を放送の中にしっかりと入れなければならず、それは重要な役割だと思う。そういう意味で、この番組はとても重要な立ち位置で作られた番組だと思う。これからもそういう視点の番組を作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

外国人労働者と移民のことも含め、世界の国がどのように対応しているのか、また、日本が今後、どのような議論をしていくべきなのかについて、７月１９日(土)のＮＨＫスペシャルシリーズ日本新生「“超人手不足時代”がやって来る」(総合 後9:00～10:13)では、討論番組としてこのテーマを拡大して取り上げる。

○　依存症について述べたい。アルコール健康障害対策基本法が昨年１２月に成立し、この６月に施行されたことに伴い、「ＮＨＫニュース７」、「ニュースウオッチ９」、６月１８日(水)のクローズアップ現代「あなたの飲酒　大丈夫？」でアルコール問題を取り上げていた。その中で基本法とアルコールの健康障害、特に依存症問題を取り上げており、とても分かりやすい番組だった。現在、日本では人口の１％に当たる 100 万人ほどのアルコール依存症の人がいることに驚いた。女性の依存症は１０年前の１．５倍の勢いで伸びている。３０代女性は社会進出、仕事、結婚、出産、育児からあっという間に親の介護ということで、ストレスとジレンマの多い中で依存症に陥る。内科でなく、アルコール専門家につなげることが必要だという話で、分かりやすい内容で、よい番組だった。依存症はカジノにもある。特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律の検討が始まったが、今まで賭博として禁止されていたものが解禁に

なるかもしれないということで、依存症をどう考えるかが課題だ。６月２８日(土)の週刊　ニュース深読み「あなたはどう考える？　観光立国で“カジノ解禁”」でも取り上げられていた。アルコール依存症とギャンブル依存症は、背景も含め違うものだと思うが、カジノの依存症の取り上げ方があまりにも軽く、依存症になっても後で治るような印象を受けた。たとえばアルコール依存症の場合、完治は難しく、症状が回復しても、一生１滴も飲めない状態が続く。カジノのギャンブル依存症は自分の人生だけではなく、周りもすべて壊してしまう大変なものなのに、扱い方が軽く、誤解を与えるのではないかと思った。取り上げるのであればどのような症状で、どういう解決方法が必要なのかという放送をしてほしい。もう少し配慮が必要だったのではないかと思う。「週刊　ニュース深読み」は小野文惠キャスターのシンプルな、素朴な質問の仕方が好感を持てる好きな番組の１つなので、テーマの取り上げ方はもう少し慎重に考えてほしい。

（ＮＨＫ側）

カジノのご指摘の件は、法案が通常国会に出され、継続審議になったので、ニュースとしても引き続き取り上げたい。また、依存症の怖さ、深刻さについてもきちんと取り上げたいと思う。

○　７月５日(土)の突撃 アッとホーム「日本の恩人に会いたい！タイ少数民族との再会」を見た。海外青年協力隊として日本から行った若者が、タイのなかなか仕事がない地域で梅干しづくりを教え、それが生活の糧となったことから、彼らは指導してくれた人のことをずっと評価していた。１２年後に指導した人とタイの人たちを対面させる内容で、軽い“ノリ”で見やすい番組であるにもかかわらず、世界のあまり恵まれていない地域での日本の若者の活躍ぶりが浮き彫りにされていた。見ていてよい番組だと思った。タイの人たちを日本に連れてきて対面させていたが、芝居がかっているような印象を受けたので、自然な形でお互いによかったと言い合う形のほうが落ち着いて見られると思った。

（ＮＨＫ側）

「突撃！アッとホーム」は、人に知られていないよい話を取り上げ、若い人、親子で見てもらうために「幸せサプライズ」という形式で制作している。指摘は受け止め、検討はしたいと思うが、番組の意図はご理解いただきたい。

○　７月７日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「地域の絆で、“無縁”を包む　コミュニティソーシャルワーカー・勝部麗子」では、コミュニティソーシャルワーカー

という新しい仕事を取り上げていた。地域の人たちが協力しながら問題解決をするためのサポートとか、ホームレスや生活保護の人たちを立ち直らせる手助けをするという、地味だが地域の人々と連携し合い、体制づくりに取り組んでいる大阪府豊中市の事例を取り上げていた。すばらしい内容だった。福祉の領域に光を当てたのはすばらしいと思った。狭い意味でのプロフェッショナルでなく、広い意味でのプロフェッショナルという部分で番組を作っているのはすばらしいと思う。福祉など、地味な部分は番組が作りづらい部分もあるかと思うが、地域でがんばっている人たちに光を当て続けてほしい。

○　７月１３日(日)の明日へ－支えあおう－「史上最大の津波火災～岩手県山田町～」は、東日本大震災の後に火事が起きた話を丁寧に扱っておりよかった。海水が来るから火事は起きないと思っている人が多いが、津波が来ると火事になる。北海道南西沖地震での奥尻島もそうだった。母親が子どもを抱いたまま燃えてしまい骨になっていたという消防の人の話は、とてもインパクトがあった。映像で映すことはなくてよいが、そうしたことばがあるのはとてもよいと思う。

○　報道、ニュース番組を見ていると、事実を伝え、判断を視聴者に委ねるものがあると思う。誘導してもいけないが、判断を視聴者にさせることは、知らないと判断できないことも世の中にはある。例えば、７月１４日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」でＳＩＭカードがほかの携帯キャリアに変わっても使えるようになったというニュースがあり、そのこと自体は分かりやすく説明されていた。ただその結論として、競争激化というひと言で終わってしまった。競争が激化することは２つの意味がある。消費者にとっては価格が安くなったり、サービスがよくなったりするかもしれないが、企業サイドにとっては収益性が落ちることによってインフラへの投資ができなくなったり、企業合併が起ったりするなど想起される。そこまで言わないにしても、もう少し説明があったほうがよいと思う。ビジネスをしている人はそこまで頭が回るのかもしれないが、そうでない人にも分かりやすい説明がもう一歩あってもよいと思った。これは１例で、さきほどの戦後史証言プロジェクトの番組でも、若い人にとっては戦後といえども知らないことが多々ある。そういう視点を持って事実を一緒に示すことが必要なことがあるのではという感想を持っている。

（ＮＨＫ側）

ＳＩＭカードのニュースでは時間の関係もあったかもしれないが、説明が足りなかったと思うところもある。いろいろな問題が起こるかと思うが、できるだけ丁寧に分かりやすく説明したいと思う。

○　土曜ドラマ「５５歳からのハローライフ」は全５話を見た。身につまされ、テレビに引きずりこまれた。変節点にいる同年代の心情がすばらしい演技力でよく伝わる番組だったと思う。たそがれと残されたエネルギーを混ぜてこねたようなすばらしい演技、映像は色合いも含め工夫されていたと思う。感動した。

○　「戦後史証言プロジェクト　日本人は何をめざしてきたのか　知の巨人たち」（Ｅテレ 後 11:00～翌前 0:29.30)が７月５日(土)から始まった。以前の「日本人は何を考えてきたのか」と違い、テーマとしている人物と直接面識のあった人たちへのインタビューで構成されていて見やすく、期待できる内容になっている。あえて言えば、戦後直後といってもすでに歴史的な時期であり、証言だけではなく、現在から見たときにどういう問題をはらんでいたのか、どういう問題が残っていたのか、歴史的に検証する手法を開拓してほしい。

（ＮＨＫ側）

「戦後史証言プロジェクト　日本人は何をめざしてきたのか　知の巨人たち」は戦後の知識人が、その時代に何を考えたのか、戦後どういう考え方で日本は立ち上がったのか、現代人にも多義的にくみ取ってほしいというスタイルをとっている。

○　教養番組については、たとえば「日曜美術館」、「美の壺」などで、出演者が感想を述べているときがある。回によっても違うが、芸術家が何を考えたのか、歴史的背景によってこうした挑戦がなされたなど、そうした事実も教えてほしい。ＮＨＫに期待するところが大きいので、何か学びたい、知りたい、知らないことが世の中にあることに気づくなど、そうした欲求があることを理解してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

「日曜美術館」と「美の壺」については、事実をしっかり伝える、その事に加えて感想を伝えるという意図で制作しているつもりだが、バランスが悪いという指摘も踏まえ検討したい。

○　７月１０日(木)のオトナへのトビラＴＶ「どうする？恋の危機」はよくできた番組だった。デートＤＶということばを初めて知った。わが家の娘はタイトルからして民放の番組と比べると興味がわかないと言っていて、年層の違いで番組の受けとめ方は違うものだと改めて感じた。デートＤＶで加害者更生プログラムを受けた男性がよく出演したと思うが、その意見もとてもすばらしかった。被害者に対する寄り添い方の

指導もあり、有益な番組だった。１人の親として感心した。ただ、よい内容のものを多くの若い人たちに見てもらうことは難しい課題だが、いろいろと工夫が必要なのかと思って見た。

○　６月１８日(水)に東京都議会で性差別のやじがあり、５日後に謝罪があった。ＮＨＫはかなり丁寧に、量も多く、経緯を追っていた。また、音声鑑定の研究所にやじの音声分析を依頼し、謝罪をした議員とは別の議員がやじっている可能性が高いことを報道した。そこまで分かっていれば、ほかの質疑のときの声とやじの声を重ね合わせれば誰だったのかが分かったのでないかと思う。なぜ特定までしなかったのか。複数の人がやじっていて、おそらく捕捉できたはずだ。そこまで踏み込むところにジャーナリズムがあるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

都議会のやじの音声分析だが、科学的にどの程度正確性があるのかという問題もある。指摘はしたが、そこから先は都議会の中で取り扱いをしてほしいというのがわれわれの判断だ。徹底的にするべきという意見もあるのかもしれないが、われわれとしてはそういう判断をした。

○　脱法ハーブによる事故が多発し、たくさんの人が亡くなっている。日本のドラッグ依存の話は深い闇があると感じる。依存症の人は治療するアプローチもある。脱法ハーブもおそらく法制化され、取り締まりが進むと思うが、いたちごっこになるという問題がある。取り締まると同時に、予防教育とそうなったときの治療が必要なのだが、治療に対する補助が出ていない。国の考え方は、ある種の犯罪者に税金を出すことは世論が認めないという考えのようだ。脱法ハーブで事故があっただけでなく、脱法ハーブで苦しんでいる人たちがどう再生するのか、どうやって社会的に支援できるのか、立体的にこの問題を解決するという視点で見たらどういうことがわれわれにできるのかというところを報道してほしい。

（ＮＨＫ側）

脱法ハーブについては、単に加害者と決めつけずにこの問題をどう解決するかという問題解決の部分をしっかりと取り上げなければならないというのは指摘のとおりだと思う。

○　福島の子どもたちにとって、スポーツや授業をどのように、どの場所で行うのがよいのかは、いろいろな人が考えているが、子どもたちのいる学校現場の放射線量など、現状がどういう状況なのか詳しく分からない。そんな中、前例のない環境でがんばっている双葉町の子どもたちに前例のない教育を、スポーツを通して行うという「ＦＵＴＡＢＡ　ＳＣＨＯＯＬ　ＰＲＯＪＥＣＴ」が始まるということだ。国会議員の先導で予算も付いているそうだ。原発のニュースはどこまでが本当で、どこまで報道されていて、どこまで安全なのかが分からない中で、子どもたちのプロジェクトが始まるという状況だ。アスリートもこのプロジェクトに数名ピックアップされ、子どもたちを指導するようなことが考えられている。何も分からない中で進んでいくのはこれからのスポーツ界のことを考えただけでも不安だ。ＮＨＫが震災や原発のニュースを報道する際には、定期的に線量のことや福島の学校の子どもたちの状況などを伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

「ＦＵＴＡＢＡ　ＳＣＨＯＯＬ　ＰＲＯＪＥＣＴ」のことは初めて知った。先日福島へ行ったが、まだ線量の高いところも残っている。事実関係を調べてみる。

○　今月になって政府と自民党内でパチンコ、パチスロに課税するパチンコ税の創設が検討されるとメディアで取り上げられた。カジノを日本で行う計画があり、パチンコは公認されたギャンブルでないことになっている。ある種のタブーとも言えるようなグレーゾーンの部分とカジノにどう整合性を取らせるのだろうかということは、カジノ法案などを考える上で重要なことではないかと思う。しかし、パチンコ、パチスロがどのような法的位置づけで、どのような歴史的経緯をたどっていて、なぜ可能で、市場規模がどのぐらいかという話は番組で取り上げていないのではないかと思う。パチンコ税がもし１％課税となると財源が 2,000 億円増える。海外では２０％などの税がかけられているので、海外並みにすると税収入が飛躍的に上がる。待機児童の解消に 4,000 億円足りないがどこにも財源はないという話が一気に解決するような額だ。国民生活にとって重要だろうし、カジノ法案、競争戦略を考える上でも重要だと思う。なかなか踏み込みづらい部分もあるかと思うが、可能なかぎり報道することも必要ではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

パチンコ税の問題は報道されたばかりということもあり、税としての取り扱いがこれからどうなるのかはさまざまな議論がされるのだろうと思う。税金を取るか取らないかは個人の生活

や企業の収益にも大変大きな影響があるのでその推移には十分に注視する。問題があれば取り上げるというスタンスは変わらないので、いろいろな議論の推移を見ながら考えたいと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２６年６月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

６月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、すイエんサー「指ずもうでメッチャ勝てるようになりた～い！！」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ シニア・パートナー&マネージング・ディレクター）
有森　裕子（元マラソンランナー）
大野　博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
鎌田　實　（諏訪中央病院名誉院長）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
駒崎　弘樹（ＮＰＯ法人フローレンス代表理事）
佐野真理子（主婦連合会参与）
龍井　葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
東儀　秀樹（雅楽師）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
和田　　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜すイエんサー「指ずもうでメッチャ勝てるようになりた～い！！」
（Ｅテレ　５月２７日(火)放送)について＞

○　番組を初めて見たが、とてもおもしろかった。今回は指相撲がテーマで、身近なことを科学的に解明するということがおもしろいと思った。答えがないところに答えを求めていかなければいけないのが人生だが、今の若い人は答えがあるに違いないと思って挫折をすることがある。そうした意味においても刺激になるのではないかと思っ

た。「すイエんサー」のタイトルの意味についても番組の中で説明があってもよいと思う。すイエんサーガールズはかわいらしく、身近な感じでよいのだが、幅広い世代に見てもらおうと思ったときに、カジュアルな話し方、若者ことばが若い人たちの日常会話よりもかえって多く使われているような印象を受け、やや聞き取りにくいところもあった。そのあたりは多少工夫があってもよいかと思う。

○　この番組をときどき見ているが、おもしろい番組だと思う。どんどん取り組んでもらえたらと思う。番組の趣旨としては、すイエんサーガールズが自分たちの力だけで疑問を解き明かすということだが、番組を見るとストーリーがあり、悩みながらというよりは、指導している専門家の講師が答えを導いているのではないかという感じもした。

○　厳しい言い方になるが、６年も続いていることや、反響が多いと聞いて、意外な印象を受けた。テーマの指相撲は子どもたちの関心事かもしれないが、子どもにとってそれほど重要なことなのかと疑問に思った。自分の頭で考えさせることが重要だということだが、解決のためのヒントを与える場面がいくつかあった。ヒントの与え方も今回はゾンビが出てきてみんなが驚いて大騒ぎしており、もう少し品のある子ども向け番組にしたほうがよいのではないかと思った。科学番組の「ためしてガッテン」は大人が対象だが、テーマの選び方も番組の進め方も、それなりの理屈がある。子どもを対象としていても、レベルを下げるのではなく、引き上げる要素があってもよい気がする。Ｅテレは水準が高い番組を放送していると評価している。この番組は、いろいろなことをテーマに取り上げているので一概には言えないが、今回は自分の子どもに見せたいという感じがしなかった。

（ＮＨＫ側）

「すイエんサー」は「サイエンス」を並び替えたタイトルだが、そのことを番組内ではあえて紹介していない。われわれが大事にしているのは、科学の知識を得ることではなく、自分で推論し、仮説を立て、答えを導くという思考のプロセスを子どもたちに楽しみながら学んでもらうことだ。子どもたちが楽しみながら学べるよう、あえて「すイエんサー」という謎めいたことばにとどめている。番組では、何の関係もなさそうに思える場面を提示し、一見関係なさそうに思えることが、実はつながっているということに気づいてもらう演出を行っている。今回はゾンビが登場して大騒ぎしたが、このことから指の可動域について考えることもできるということを伝えようとした。答

えを導いているのではという指摘があったが、番組上では編集している関係で、手がかりを提示してから、すぐに答えが出ているように見えてしまう面がある。しかし、実際はすイエんサーガールズのロケは丸一日かけて行っており、答えが出るまで講師もスタッフも何も言わず、じっと待つことを繰り返している。すイエんサーガールズが試行錯誤を繰り返す中から導き出したもので作っている。手がかりは提示するが、そこからは自分たちの力で考えてもらっている。「ためしてガッテン」は実用情報、それを知ることで役に立つことに軸足を置いているが、「すイエんサー」はそこには力点を置いていない。考え続けることが子どもたちの思考力を養うことにつながるのではないかと考えている。それを知ったから何なのかという批判もあるかと思うが、結果を見るのではなく、そこに至るプロセスを大事にしたいという思いで番組を制作している。

○　プロセスが大事という意図はよいと思うし、結果はどうでもよいということでもよいと思う。ただ、もっと直接的にプロセスを感じさせるほうがＮＨＫらしい。ゾンビが出てきてもよいが、ただ騒いでいるだけという印象があった。もっと幅広い年齢層で、年配の女性や子どもであればこう考えるという要素があればよいが、すイエんサーガールズはただ騒いでるだけで、無駄なことが多すぎると思った。子どもにも分かりやすくするためにおもしろおかしくする手法は必ずしも正しいとは思わない。私の子どもは幼稚園のときから「コズミックフロント～発見！驚異の大宇宙～」が大好きで、大人向けの説明をしっかり受け取って、それを私に説明してくれる。揺るぎのない正しさで説明してくれる。そういう子がこの番組を見たときになぜこんな幼稚な作りをするのかと言っていた。大人向けの番組にしても内容に魅力があれば幼稚園児にも、老人にも幅広く伝える手法が必ずあると思うし、それができるのはＮＨＫだと思う。今回の番組では、冒頭にゲストが登場する場面でレッドカーペットを敷く演出があったが、それを見ただけで番組を見るのをやめようと思うほどだった。また、進行役の女性がほんの少しの決めぜりふなのに、たびたび視線がカンニングペーパーに移るのにも興ざめした。仕事である以上は少しのせりふは覚えてほしい。

○　制作意図はたいへんすばらしいので、ぜひその方向で番組を続けてほしい。一方、その意図と番組の落差を感じざるを得なかった。小中学生はもう少し落ち着いたものをしっかり聞く力があると思うし、もし無かったとしてもそれを植え付けるような文化を作ることをＮＨＫにしてほしい。子どもをもっと信頼し、分かりやすいことや品格を大切に、子どもの力を育成する番組を制作してほしい。

○　今回の番組では、科学する営みと説明されながらも結果的にすイエんサーガールズの勝率が上がっていくことだけが紹介されたが、そこが逆に不自然だと感じた。相手方も同じ方法にすると元に戻って勝率はせいぜい半々ぐらいになる。勝率が戻ったことによって決定的な必勝法などはないという結論にまでいかないと、中途半端というか、もったいないというか、本来の趣旨とずれると感じた。全体としてはおもしろいと思うが、今回はそこが気になった。

（ＮＨＫ側）

番組を制作するにあたっては、子どもたちの理科離れについて意識をしている。理科が楽しくないと思う子どもたちが中学、高校と上がるにつれ増えているので、そうした子どもたちに理科、科学は楽しいものだということをどうすれば分かってもらえるか、子どもたちの目線になるべく沿った演出ができないかという思いで制作を行っている。ともすれば幼稚に見えてしまったところもあると思うが、そのあたりのバランスは今後考えていきたい。スタジオの進行役については、事前の打ち合わせや台本は一切なしで収録を行っている。そのテーマを自分たちならどのように解決できるだろうということをスタジオの出演者や視聴者も一緒に考えてほしい、という制作側の思いがあるためだ。そのため、進行に必要な情報は、そのつどスタッフがカンニングペーパーを見せている。そういう舞台裏がテレビ画面からは伝わりにくいので、単にカンニングペーパーで目が泳ぐように見えたのかと思う。

○　この番組が対象とする視聴者がだれなのか分からなかった。すイエんサーガールズと同年代の人たちにはこの番組は物足りないのではないかと感じた。新しいテイストの科学エンターテインメント番組なのに、なぜゾンビが登場するのかよく分からない。ゾンビが突然出てきて騒いでいるだけで、その中で視聴者は取り残されたという気分がした。早押しボタンやパーティーでの人のうわさの実験などは、指相撲に勝つための裏技として紹介されたが、相手を混乱させて勝つということで、後味がよくなかった。裏技を使って勝ってうれしいと画面にアップにされたときの笑顔を見て、この笑顔と勝利にどんな教育的意義があるのだろうかと感じた。何か別の意義を提供する意図をもった番組なのかも判断しにくかった。

○　「明日のすイエんサー」というコーナーがある。若手女性科学者が、細胞性粘菌が

集合して自分の身を捨ててまで生命を優先させるという不思議な現象に魅せられ、研究していると紹介されており、そのさまは心を打つものがあった。一般の人間からすると科学者、研究者の人たちがどのような思いをもって最先端の研究をしているのかが見えづらい部分がある。若く華やかな女性がある種特殊な部分に興味をもち、研究していることを知ることができたのはよかった。子どもたちもそういう生き方もあるのかと知ることができるのはすごくよかったのでないかと思う。全体の演出面に関しては多少はしゃぎすぎという印象を受けざるを得なかった。指相撲というテーマ設定も身近なものという意図は分かるが、あまり意味は無く、小学生に指相撲がとてもはやっているという伏線があるわけでもない。小中学生は恋愛に関心が高まるので、そこから心理学のいろいろなことを紹介したり、スポーツに絡めて認知科学を組み合わせるとこのような形で成績が伸びたりするなど、重要な、大切なテーマに近づくような作り方ができるのではないかと思う。ほかの回ではとても意義深い内容のものも多々あった。毎回よいテーマを探すのは大変だと思うが、軸をぶらさずに制作するとよいと思う。科学的推察や推論を重ねる手法、制作意図に関しては同意するが、アウトプットがそれにひもづいていないとも感じた。その部分を改善するとよりすばらしい番組になるのではないかと感じた。

○　勝ち方の正当性についての論議はいろいろあるだろうが、番組で紹介された観点はさまざまなゲーム、仕事の面でも生かせる部分があると思った。今回のテーマは指相撲だったが、導入でいろいろ楽しい設定をしている。その話題がどういう意味、価値があるのかを最初に示したほうがよいのでないかと思う。

（ＮＨＫ側）

主にこの番組を見ているのは小学生から中学生ぐらいで、圧倒的に小学生が多い。出演しているすイエんサーガールズの女の子たちも、その世代に特に人気のある人たちで、テーマ設定もその年代を念頭に置いている。教育的意義としては、幅広い視点でものごとを考えるということがあると思う。われわれも指相撲でどうやったら勝てるかを考えたとき、最初は指の動かし方だけを議論していた。しかし、それでは不十分ではないかという意見が出て、認知科学の専門家に相談したところ、相手の集中力をそらして勝つという方法もある、というアドバイスをもらった。たとえば誕生日パーティーの場面で、自分の知っていることばがささやかれるとそこに脳が反応するというのは「カクテルパーティー効果」と言われ、科学的にも知られている現象だ。そうしたものを指相撲にも応用したらどうなるのだ

ろうかと試した。こうした幅広い視点で問題解決のヒントを探っていくことは意味があることだと思う。騒ぎすぎというご指摘については演出のバランスを考えたいと思う。

○　各委員から出た肯定的な意見と辛口の意見の両方をわたしも感じた。この番組と波長をうまく合わせるのがやや難しかったというのが正直なところだ。小中学生が対象ということだが、大阪大学では指定参考番組に認定したり、滋賀大学教育学部ではこの番組のような授業の構築を目指す講義を行っていたりするとのことで、対象をどこに向けているのか分かりにくいところがあると思った。科学的な推論がどのように行われるのか体験してもらうということであれば、予定通りにいかないことがたくさんあると思うので、そこをもう少し出したほうがよいのではないかと思う。ゾンビが出てきて騒いだあとにすぐに分かったと言うのではなく、間違った仮説を立て、その仮説の反証があり、また別の仮説を立てるという直線ではない進み方をわかるようにしたほうがおもしろかったのでないかと思った。番組の時間自体が短いので難しいと思うが、そういう感想を持った。

○　自分が小学生、中学生になったつもりで見たが、結構おもしろいと思った。子どもの中にもいろいろな子どもがいるので、こういうことから見始めてもらい、さらに質の高いテーマ設定でも飽きずに見続けられるようにすることは大事なことだ。小中学生向けとしてはうまくできている。６０歳以上の者にとっては入り方としては難しい部分もあるが、子どもたちはこうした「ノリ」が欲しいのだろうと思う。指相撲に勝つことをいくつかの仕掛けをしながら少しずつ分かってもらい、ものの考え方をわかってもらう。そして最後に進行役の大人たちが考え方を普遍化し、自分だったらこう使えば生き方が変わるというようなひと言があればよいのだが、彼らも同じようにおちゃらけていた。指相撲から自分は何を学べるのか、教訓にする必要はないが、自分はこういう視点でこの考え方を利用するという展開があると、小学生も中学生も普遍化させる力が出てくる。とてもよいテーマで、よい取り組みをしたが、シナリオがないとすればもっとストーリーを子どもたちに伝えられるような大人の出演者を選べばよいのではないかと思った。

○　指相撲にそこまで興味があるものなのかと思い、どういう話題になるのかと思って見始めた。番組の入りがあまりにもにぎやかで、最初から訳が分からず、見る意欲が落ちている状態で見たので、全体に対する見方がネガティブになってしまった。仕事で学校の子どもたちと接することがあるが、子どもたちはテレビで見たり聞いたりする大人の使うことばをまねしたがる。番組で出てくることばや表現は、現実に影響があるので気になったところが何か所かあった。「メッチャ」というのも子どもたちは

そういうものが出てこないとおもしろくないという感覚を持ちがちだが、締めるところは締める、ふざけるところはふざけるというところがもっとわかりやすいほうがよいと思う。

○　当惑しながら見た。結論の指相撲が強くなるところについては、いろいろな意味で応用が利く部分があるのだろうと思ったが、そこに全く触れていなかったので、それが受け身で使われる場合も、自分で使う場合も含め、どういうところで応用が利くのか、もう１歩踏み込んでもよかったのではないかと思う。１日かけて制作しているということが、番組を見る限りでは分からない。できあがった番組がどう見えるかが大事なので、台本もなく、１日かけて試行錯誤をしながら収録したということが表れるような番組の構成にしたらよいのでないかと思った。過去にどういうテーマがあったのか分からないが、物事に対して自分で仮説を立て、考えるプロセスを重視するのであれば、時には答えが見つからないケースもあってよいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

番組の対象は小中学生と考えている。ただ、大学生やそれ以上になると、与えられた課題に答えるだけではなく、分からない状況の中で自分から答えを探さなければいけない場面が多くなる。こうした点から、一部の大学に考えるプロセスを大切にするこの番組を評価し、活用してもらっていると考えている。

○　「すイエんサー」とタイトルを見ても意味が分からず、番組を見ないのではないかと思う。視聴率はどのぐらいあり、Ｅテレのほかの番組と比較するとどうなのか聞きたい。タイトルを見て番組を見たいと思わせるようなタイトルのほうがよいのではないかと思う。制作の意図として、自分で課題を見つけ、解決策を考えるというプロセスはとてもよいと思うが、考えるプロセスを身につけさせるより、大人が用意したヒントで答えが出てくるように見えてしまう。本当に悩んでいる様子がたくさん出たほうがよいのでないかと思う。すイエんサーガールズより、実際の小中学生が出てきて悩んでいるほうがよいのかと思う。収録の時間帯で小中学生に来てもらうことが難しいのかもしれないが、すイエんサーガールズの起用がよいのかどうか疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

視聴率は４月からの平均が１．８％で、Ｅテレのほかの番組の３倍ほどだ。特に男女の４～１２歳は５～６％と高いものになっている。制作意図どおりに小学生を中心とした子どもに興味を持ってもらい、見てもらうことは成功しているのではない

かと思うが、どう応用するのかということや、番組の筋道はこうだということを大人が発見し知らしめることは必要だと思う。ことばづかいも検討の余地があると思う。

今回は変化球的なテーマだったが、翌週に取り上げたのは板チョコレートを溝に沿ってきれいに割るにはどうしたらよいのかというテーマにきわめて科学的に挑み、てこの原理を応用すれば割れることを紹介した。ほかにも、理系大学の学生とすイエんサーガールズのどちらが勝てるかを争った「知力の格闘技」シリーズもとても好評だ。東京大学、京都大学、北海道大学、東北大学、九州大学などの理系の学生と、ほぼ互角の戦いをしている。６年かけ、すイエんサーガールズたちも成長しているので、そういうところもぜひ見てほしい。

＜放送番組一般について＞

○　５月３１日(土)のＮＨＫスペシャル　シリーズ日本新生「日本の医療は守れるか？～“２０２５年問題”の衝撃～」を見た。とてもよい問題提起をしているＮＨＫらしい番組だった。

○　６月１日(日)と８日(日)のＮＨＫスペシャル　ミラクルボディー　サッカー・ＦＩＦＡワールドカップ第１回「ネイマール　“変幻自在”の至宝」と第２回「スペイン代表　世界最強の“天才脳”」を見た。とてもおもしろかった。科学的な分析を通じて、ネイマール選手のドリブルやシャビ選手の空間感覚について脳の中に入り込むというのは「ＮＨＫスペシャル」ならではの納得のいくものだった。神様のようだと感心しながら見たが、そのスペインは１対５でオランダに負けてしまい、どう転んでも負けそうにないと思っていたので、どういうことなのかと思った。やや演出過剰だったのかと思わないでもないが、そもそも 100 戦 100 勝ということはあり得ないわけで、それぞれの能力の限界、欠点などいろいろあると思う。ないものねだりかもしれないが、そういうところもうまく見せるような工夫をすると、なお一層おもしろいのでないかと思った。

（ＮＨＫ側）

ＦＩＦＡコンフェデレーションズカップ 2013 などで、スペインは強さを保持していた。シャビ選手の年齢のことに言及す

るなど、こうした強さに少し限界が見られる点について気をつけたつもりだ。このまま連戦連勝という印象を与えたとしたら今後、表現を検討していきたい。

○　ＮＨＫスペシャル　ミラクルボディー　サッカー・ＦＩＦＡワールドカップ　第２回「スペイン代表　世界最強の“天才脳”」は、おもしろかった。２人の選手の活躍はどうなるのだろうと思っていたが負けてしまい、人間はわからないというおもしろさをあらためて感じた。あれだけの能力を持っていてなぜ負けたのかということも番組にしてほしい。オリンピックの事前番組もそうだが、絶対的と言われているのに負けてしまうということは結構あり、絶対に無理という人が上位に入ることもある。持っているもの以上に何かが起こるという要素はいろいろなところにあるので、これから育つ人たちに挑戦することの楽しさ、おもしろさを広げて伝えてほしい。だれにでもいろいろな可能性があり、いろいろなことができるかもしれないという番組づくりをしてほしい。すごい人を取り上げても最後に人間はわからないということがあれば、いろいろなことにおもしろさと興味を見出すことができると思う。特に子どもたちはスーパーマンでないとワールドカップに出られないと思っているが、自分も出られるかもしれないとどこかで感じられる番組が次の世代を育てると思う。

○　２０１４ＦＩＦＡワールドカップの「日本」対「コートジボワール」をとてもおもしろく見た。結果は残念だったがとてもよい試合だった。コートジボワールという国の知識があまりなかったので調べたところ、コートジボワールは 1960 年代にフランスから独立し、その後経済成長をし、“イボワールの奇跡”と呼ばれる復興をしたが、２度の内戦によって破壊され、厳しい状況になったと知った。今回日本を負かした中心人物のドログバ選手はフランス国籍だが、コートジボワールの国籍を取って主将になり勝利に導いた。ドログバ選手は成功者になったが、その報酬で基金を作り、コートジボワールに病院を作ったりもしている。そうした背景を知ることによって、日本は負けたが勉強になったと感じた。サッカーの試合自体も楽しいが、今度戦う国はこういう国で、こういう背景があるということが紹介されると、多角的に試合を楽しめ、かつ学びにつながるのでないかと思う。ワールドカップに絡め、国際理解が進むような番組を作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

２０１４ＦＩＦＡワールドカップについては、試合結果などのスポーツ報道に偏るところはある。これをきっかけにいろいろな国の理解を深めること、特にコートジボワールの選手たちがヨーロッパであれだけ活躍している背景や、治安が乱れるア

フリカでなぜ安定し成長しているのかということも含め、取り上げていきたい。

ワールドカップをきっかけとした国際理解については、５月６日(火)のＢＳ１スペシャル「オシム７３歳の闘い」(ＢＳ１　後10:00～10:49)で、イビチャ・オシム元日本代表監督がボスニア・ヘルツェゴビナをどのように初出場に導いたのかを取り上げ、その続編を６月２２日(日)のＮＨＫスペシャル「民族共存へのキックオフ～“オシムの国”のW杯～」で取り上げる。そういう姿勢は保持したいと思う。

○　２０１４ＦＩＦＡワールドカップの事前番組におもしろいものがいくつもあった。「プロフェッショナル　仕事の流儀　本田圭佑スペシャル２０１４」は、６月２日(月)に第１回「密着“世界一”への道」(総合 後 10:00～11:13)、６月９日(月)に第２回「独占インタビュー　エースの覚悟」で本田圭佑選手を追いかけた。６月１０日(火)の「岡田武史の見る世界基準と日本の挑戦から２０１４ＦＩＦＡワールドカップ」(総合 後 10:00～10:48)は、知りたいことを見せてくれた気がする。その当事者しか分からない一流の高みに達し、肉声がなかなか聞けない人たちの場面を捉えていて参考になった。それを見たうえで６月１５日(日)の「日本」対「コートジボワール」(総合 前 9:45～後 0:03)を見ると、世界の舞台でやっている慣れもあるが、まだ至らない部分があることもよく分かり、参考になった。初戦が行われた６月１５日(日)の昼のニュースでは日本のあちこちでパブリックビューイングが行われ、多くの人が熱狂的に見たことをかなり長く紹介していた。４０％以上の視聴率を取ったのでしかたがない部分もあるが、各地域での様子を「ゆく年くる年」のように取り上げていた。それよりも日本はアジアの代表なので、アジアのほかの地域の人たちがどう見てくれているのかという取り上げ方のほうがよいのではないか。戦う相手の国のことも少しでも紹介したらよいと思う。どんなチームなのか、どんな経過を経ているのかぐらいは事前に紹介があるとより深く試合を見られると思う。

（ＮＨＫ側）

ＦＩＦＡワールドカップについてはいろいろな番組を放送していて、それぞれのチームも紹介しているが、日本戦の前にあらためてコンパクトにまとめて放送すればよかったかと思う。

○　６月４日(水)の歴史秘話ヒストリア「女王・卑弥呼はどこから来た？～最新研究から読み解く　二つの都の物語～」は、卑弥呼が伊都国から纒向（まきむく）遺跡に遷都したのでないかという納得できる作り方がされていて、おもしろい番組だと思った。

○　「着信御礼！ケータイ大喜利」は、視聴者参加型で視聴者から笑いをもらう、長年続いている貴重な番組だと思っている。出演の３人も役割分担があり、自然体なところに好感を持っている。６月８日(日)は「海外から何人メジャーがでるのかな！？スペシャル」として 100 の国、地域を超えて生放送を行っており、その場で投稿してもらっていることに驚いた。ただ、ゲストで出ている若い出演者たちがとにかく笑っているのだが、自然な笑いであるならばよいが、作った笑いはいらないと思う。

○　東日本大震災で被害のあった東北のことをできるだけ取り上げ、忘れないようにしてほしいと要望していたが、先日とてもよい番組があった。６月３日(火)の地方発ドキュメンタリー「ふたり～わが子を亡くした夫婦の歩み～」を見た。父親、母親、子ども３人を亡くした夫婦がかなり厳しい状況におかれ、夫婦別れするのではないかという寸前のところから、徐々に再生していく様子を長くしっかりと撮っていた。深夜の放送だったので、再放送も含めてもっと視聴しやすい時間帯で放送してほしい。

○　６月１０日(火)の地方発ドキュメンタリー「学力日本一　躍る教室」は、秋田の小学校を取り上げたよい番組だったが、どこまで教訓として使えるかは疑問の残るところがあり、いろいろな角度から検討する必要があると思う。

（ＮＨＫ側）

「地方発　ドキュメンタリー」については、反響があった場合など、たとえば１月１４日(火)に放送した岩手県釜石市の鵜住居の建物が取り壊される「最後の場所がなくなるとき～“釜石の悲劇”家族の２年１０か月～」を３月２８日(金)の「釜石の悲劇～残された家族　４年目の春～」（総合　後 10:00～10:49)に展開した例や、２月４日(火)に放送した声を通じ夫婦が語り合う「たどたどしいけど　私の声」を５月３日(土)の特集ドキュメンタリー「声～家族がつながるとき～」（総合　後 4:00～4:49)にした例などのように、再構成して放送している。今後もこうした意見をもらい工夫して放送したいと思う。

○　首都圏ネットワークでは、連続して「ストップ詐欺被害！私はだまされない」を放

送している。詐欺被害に遭ったお年寄りが自分の体験を紹介している。詐欺被害をなくすために、お年寄りが見られる時間帯の夕方に放送しているのはＮＨＫらしくてよいと思う。また、ＡＥＤの使い方についても連続して取り上げていた。ＡＥＤが設置されていてもなかなか自分で使えないところを心配せずに使うようにと繰り返し放送しており、公共放送らしいよい内容で、とてもよいと思う。

○　ＥＴＶ特集「本当は学びたい」は、社会から孤立した若者をどう支援するかというもので、意図はすばらしいが、自治体と学校が番組に登場しなかったのが不満なところだ。地元の自治体は事実を知っているのか、どう見ているのかをしっかりと押さえてほしかった。番組の中で、つながりが持てないということが出てきたが、子どもの貧困に合わせていつも指摘されていることだ。関連して、子ども社会の問題は大きな問題だが、一方、学校のホームルーム活動や学級活動で、子どもたちが集まって相談して物事を決め、それを実行し、役割を果たすという当たり前のことがほとんど行われなくなったという指摘がある。この問題は子どもたちのつながりを育むという意味でかなり深刻だと思う。学力の問題もそうだが、基礎となる部分の問題については番組として取り上げてほしい。

○　６月３日(火)と６月１０日(火)の先人たちの底力　知恵泉（ちえいず）　戦国のプロデューサー「千利休」（前・後編）は、千利休をプロデュース能力のある男という形でとらえていた。貧乏で、立派な茶道具を持っていなかった千利休がどうしてその時代の先頭を走るようになったのかというのは普遍化してみるとおもしろいし、千利休が行ったことを現代にどう生かせるかというように上手く構成されていた。よい番組だが、夜１１時からの放送なので、視聴しやすい時間帯だとよいと感じた。

○　６月４日(水)のスーパープレゼンテーション「教育に革命を！才能を掘り起こせ」を見た。プレゼンテーターはケン・ロビンソンという有名な教育者だった。２４分の番組なので、笑わすことや間を空けること、引用文の使い方とか、プレゼンテーションのしかたは勉強できた気がするが、ケン・ロビンソンという人がなぜ有名で、なぜ世界で賞賛を浴びているのかということまでは伝わってこなかった。あと２、３分あれば、ケン・ロビンソンの言っていることのすごさを伝えることができるのでないかと感じた。

○　５月にセルビア共和国で大きな洪水があり、120 年に１度の洪水と言われるぐらいのたいへんな被害をもたらしたそうだ。セルビアは月収が４万円ぐらいしかない国だが、東日本大震災のときにヨーロッパで最も寄付をしてくれた国の１つだ。セルビアの大使館も寄付を呼びかけている。それに対し、インターネットを中心に恩返しをし

ようというキャンペーンが繰り広げられ、多くの寄付がセルビアに集まっている。セルビアの洪水について、ＮＨＫはニュースなどで取り上げたのか。諸外国においての自然災害なども、日本と無関係ではない部分があるので取り上げてほしい。多くの被害が出た場合、ニュースを見た次のアクションとして寄付はありうると思うが、ＮＧＯなどでは難しいと思うので、たとえば大使館が窓口になっている場合はその情報も出し、ＮＨＫのニュースのサイトでそこへ行ける動線を引くことで、次の一歩、行動を促進できるのではないかと思う。検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

セルビアは日本人にとって少し縁遠い場所かとも思うが、そういう国がかつて日本に大きな援助をしてくれたことも含め、機会があれば取り上げたい。

（ＮＨＫ側）

バルカン半島のセルビアの洪水のニュースの件だが、５月１８日(日)と５月２０日(火)に報道している。

○　内閣府の「選択する未来」委員会で、人口減少に関するかなり衝撃的なレポートが発表された。かなり本腰を入れ、人口減少問題に取り組まなければいけない状況にあると思う。ＮＨＫでも、国民に近未来の日本がどういう状況にあるのか、リアルに体感できるような番組を作ってもらいたい。

○　生活保護の切り下げによって就学援助が受けられなくなる市区町村が出る。就学援助は低所得の家庭に教育の支援をする制度だ。生活保護法が変わったことによる余波が就学援助に来て、縮小する自治体が出てくることで、子どもに直接影響が出ることが懸念されるというニュースがあった。これに関わるテーマとして子どもの貧困がある。日本の子どもたちの６人に１人は貧困ライン以下の生活をしており、これはこれまでの日本の歴史の中できわめて異例なことだと思う。日本の教育の公的支出はＯＥＣＤ３２か国のうち３１番目という状況だ。それゆえに子どもの貧困が発生し、貧困の子どもは教育が受けられないために貧困になり、その子どももまたという形で社会的な連鎖が起こる。それを国民全員が知り、次世代に貧困が連鎖しないようにする行動を起こすべきだと思う。これまでもＮＨＫは取り上げていると思うが、より多角的に番組づくりをしてほしい。人口減少とも密接にかかわる。日本は私的な教育負担が最も大きい国で、子どもが大学を卒業するまでに2,000万円の負担がかかる。それが子どもをたくさん産むことのブレーキになる。社会が子どもを支える、子育てを支えるということをしっかりと出さなくてはいけない。高齢世代の人たちは、かつては「向

こう三軒両隣」でそうしたことが地域で行われていた記憶があり、社会が公的な補助や助成をすることに理解しづらい部分があると思う。ＮＨＫは高齢の視聴者がかなり多いので、現状は過去の子育てと違っていることをしっかり出すことによって世論をきちんと形成できる意味があると思う。

（ＮＨＫ側）

人口減少社会の問題については５月１日(木)のクローズアップ現代「極点社会～新たな人口減少クライシス～」などで取り上げている。特に限界集落と言われているようなところから集落そのものが消滅してしまうという危機的な状況があり、しかも 2040 年という間もなく来る時代にそういうことが起きるとされている。人口減少社会は引き続き重要な問題として取り上げたいと思う。女性の働き方の問題、子育ての問題、さまざまなことが含まれると思うので、そうしたことも総合的に取り上げたい。

子どもの貧困の問題は、貧困の連鎖をどこかで断ち切るのは重要であると思う。今の日本社会が抱えている１つの大きな問題だと思うので、引き続き取り上げたい。

子どもの貧困については、６月１４日(土)のＥＴＶ特集「本当は学びたい～貧困と向き合う学習支援の現場から～」で正面から取り上げた。子どもたちを支援しているところを３年近く継続して取材をし、子どもたちとの信頼関係の中から撮影できたドキュメンタリーだった。担当者は番組を通して、子どもたちの自己責任でないことを社会に伝えたいという思いで制作した。一過性で終わらせるのではなく、社会の側、親の世代が継続的に考えなければいけない問題だと痛切に感じている。引き続き取り組みたい。

○　少子高齢化は差し迫って重要な課題であり、ＮＨＫでもさまざまに取り上げているが、今後の方向として取り上げ方についての要望を述べたい。少子高齢化対策はいろいろな柱がある。１つは子育て支援であり、子育て支援の中には子どもの貧困、難病など、すべての子どもをどのように視野に入れ、よりよい発達環境を提供するかという問題がある。そのほか、女性の活力促進の問題、高齢者問題、認知症の問題、ワーク・ライフ・バランスなどを含め、広く社会保障全体の問題に関わる。来年、子ども

に関して、子ども・子育て支援新制度が始まる。1990(平成２)年から国が施策を積み重ねてきたある種の集大成だが、国民にはあまり知られていない。この新制度をわかりやすく伝えてほしい。少子高齢化対策に関しては、５月４日(日)の日曜討論「どう向き合う　少子化・人口減少」でも議論されていた。一定の見識のある人たちが出ていて、しっかりとした意見を述べていたので、取っかかりとしてはよかったと思う。ただ、今求められているのは具体策だと思っている。各地に先駆的な事例がたくさんある。そういうものを取り上げてほしいし、見ている人たちは具体的なヒントが欲しいと思っている。自分の自治体ができなかったことで他で取り組んでいることをまねしてみようと思えるような具体策を示してほしい。ＮＨＫのネットワークを使い、各地で少子高齢化対策として取り組んでいるものを深掘りした取り上げ方を期待する。

（ＮＨＫ側）

少子高齢化問題を含め、問題点の指摘だけではなく、解決策のヒントでもよいから何か具体的な事例を盛り込もうとしている。日本社会は課題が山積しており、その中で課題だけを指摘しても閉塞感が強まるばかりなので、各地の事例のヒントになるようなものも取り上げている。少子高齢化の事例でもそうした事例を取り上げたい。

○　政府の成長戦略の中の雇用、ワークルールについては「ニュースウオッチ９」や「週刊　ニュース深読み」などのニュース番組で若干触れているが、手薄感があるのでＮＨＫらしい本格的な企画を随時放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

雇用・労働法制関連の企画については、６月１日(日)に「日曜討論」(総合 前9:00～10:15)の第２部「与野党論戦　どうする雇用・成長戦略」で、９党の政策責任者の討論を放送した。また、「クローズアップ現代」では、６月１１日(水)に「シリーズ　人手不足ショック（１）見直し迫られる企業の戦略」と、１２日(木)に「シリーズ　人手不足ショック（２）どう向き合う　外国人労働者」を放送した。企業の人材確保の問題、外国人労働者の問題など、雇用・労働問題は継続的に取り上げている。本日６月１６日(月)には労働政策審議会があり、政府の産業競争力会議で働き方の問題の素案も示されるということだ。そうした問題も引き続き継続的に取り上げたいと思う。

○　規制改革に関するものが政府の成長戦略にまとめられるところだ。それらについてはいろいろな評価があると思う。密室性があり、平場に出る議論があまりされていない中で答申がまとまる感じがしている。解説委員による談論風発、歯に衣を着せないような「解説スタジアム」などの番組で、今度まとめられる医療、雇用、農業の成長戦略の課題認識と対策についての評価の議論をしてほしい。

○　食品表示については、いろいろな省庁が関わりあっており、とても分かりづらい。消費者庁ができてから一元化するということで、昨年６月に新しい食品表示法ができた。２年をかけて中身を精査することになっており、３つの法律が合わさっているので文言から一本化しなければならないということで、消費者庁、消費者委員会の中で検討されていて、今月が山場だ。食品表示は私たちに身近なもので、消費者は表示を見るしかない。食品表示に限らないが、すべての表示が分かりやすく、うそがないことが基本だ。現在たくさんのもめごとがある中で、消費者にとってどういう表示がよいのか、消費者庁はどう考えているのか、事業者はどう考えているのか、消費者にきちんと伝えなければならないと思う。ある日突然でき、これを見てくださいというのでなく、事前にみんなで考えながら作ることも重要だと思う。こういった状況をふまえた、よい番組を作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

食の安全の問題については、国民的な課題であると認識している。一方で行政の対応を見るとメニューの虚偽表示など、何かあったときに対策を講じることが多い。この問題は総合的に考えられていないと思っている。継続して総合的に表示はどうあるべきかという問題を含め、取り上げたいと思う。

○　以前にも、公共放送のあり方について継続して取り組んでほしいと要望した。韓国のＫＢＳでは沈没事故の報道について政府の圧力があったなど、かなり大きな社会問題になっていると伝えられている。今すぐということではないが、どういう問題が起き、われわれはどう学ぶべきかということについて課題意識を持ち、いずれ企画にしてほしい。

○　前回提言した女性の職員を番組審議会に同席させてほしいという要望を早速今回から実施してもらい感謝する。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２６年５月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

５月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「放送番組の種別および種別ごとの放送時間」（平成２５年１０月～２６年３月分）について報告があった。

続いて、「しあわせニュース２０１４春」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
委　員　有森　裕子（元マラソンランナー）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
小田　　尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
駒崎　弘樹（ＮＰＯ法人フローレンス代表理事）
東儀　秀樹（雅楽師）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
若月　壽子（主婦連合会事務局）
和田　　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜番組カルテと質的指標について＞

○　視聴率は調査機器を設置している世帯数が分母になるのか、それともテレビをつけている世帯数が分母になるのか。

（ＮＨＫ側）

分母は関東地区では調査用の機器を設置している600世帯で、視聴率は１分間ごとにどのチャンネルがついているのかを集計している。

○　中学生、高校生はあまりテレビを見ていないという数値はよいことなのかもしれない。パーセントを上げることが日本社会にとってよいことかどうかだ。ほどほどでよいという考えもありえる。

（ＮＨＫ側）

視聴率はリアルタイム視聴している方の割合を示したデータなので、録画で見ている人は反映されていない。動画サイトなどインターネットで番組に触れている可能性もある。

番組カルテの「リーチ」で示している世帯／個人視聴率はビデオリサーチ社の数字で、「インパクト・クオリティ」はＮＨＫが行っている別の調査での数値だ。世帯視聴率は関東の 600 世帯に視聴率を計る機器が設置されており、その 600 世帯にあるテレビの何％がついていて、どのチャンネルを見ているかの数値だ。そして 600 世帯の中には単身世帯もあるし、４人家族世帯もあり、それらを合わせると 1,500 人ぐらいとなり、その内訳として２０代が何人、３０代が何人、４０代が何人いて、それぞれの年代の人の何％の人がどの番組を見たかのかを示す数字が個人視聴率だ。個人視聴率は番組を見ているときに個人を識別するボタンを押すことで計っている。

○　ニュース番組の質的調査の質問項目に「演出に挑戦している」とあるのはどのような意味か。

（ＮＨＫ側）

この「演出」はドラマなどの演出の意味ではなく、どのようにわかりやすく、見やすくなっているかということだ。たとえばグラフを使うとか、これまでの経緯を盛り込んだ表を入れるという意味での演出だ。

○　東京電力福島第一原発の凍土壁について丁寧に報道しており、全体としてはわかりやすかった。一方で、東京電力がいろいろと試みていることに対し、ほとんど無理だろうというスタンスのコメントや、規制委員会の人たちの話として、それだと地盤が変形し、たいへんではないかということを伝えていた。実際に起きていないことが起きたらこれほどたいへんだということを伝えるのも大事だが、４号炉の燃料を取り出すのに真剣に取り組んでいる人たちの身になって、本当に駄目ならば駄目と言えばよ

いのだが、規制委員会のある委員の「駄目かもしれない」という発言をそのまま強く伝える必要があるのだろうかと思った。うまくいくとよいという言い方はないかもしれないが、取り組んでも駄目ではないかという言い方は、苦労している人たちがいる中でいかがなものかと思う。そういうことを演出と言っているのかと思って質問した。

（ＮＨＫ側）

凍土壁に関しては、その効果とどのような影響があるかについてわかっていない部分がある。凍土壁は１つの選択肢として出しているが、若干疑問視をする声もあり、そういう指摘を伝えた。これが駄目ということではなく、われわれも成功してほしいと思っている。廃炉の問題もそうだが、４０年かかる廃炉をどのように実現していくかは大きな課題だ。また、それができないとたいへんなことになると認識している。ＮＨＫスペシャル「シリーズ　廃炉への道」などでも、作業員を確保する問題も含め、いかにたいへんな問題であるかを取り上げている。否定的な意味で伝えているものではない。

○　基本方針の指標はすばらしいと思う。期待度と実現度の差が縮まり、より右肩上がりになればよいと思った。各波の質の評価と基本方針の実現度の評価、各波の接触率と基本方針の実現度の評価は相関していると思う。基本方針に掲げられているすばらしい理念、価値は、たとえば「新規性・創造性」の部分について、「ＮＨＫニュース７」にどれほど期待するのか、また、「記録・伝承」については「ＮＨＫニュース７」にどれほど関連するのかといえば、直接的な関連性はないだろうと思う。番組ごとにそれぞれに対する期待と達成があれば明らかにリンクするのでないかということだ。すべての番組に、指標すべての関連性があるのかないのかをもう少し吟味すると、現場の目標意識、価値への連動につながるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

これはあくまでデータのみで、このデータをもとに日常的に編成の見方、現場の考え、役員レベルでの経営的なねらいなどを意見交換している。たとえばニュースについても「ＮＥＷＳＷＥＢ」は新規性に重点を置いて制作している。１つの番組ですべての期待に応えることは難しいので、番組ごとの得意技を生かし、全体でよい結果が出ればよいと考えている。

○　「経営計画における達成状況の評価、管理」は、これまで経営側の立場で作られてきたと思うが、総合的に見て視聴者がこの番組で満足しているかということを聞いたほうがよいと思う。「これさえあれば満足・見逃せない」という質問のしかたよりは、「この番組に満足したか」という質問のほうがよいと思う。「これさえあれば満足か」と聞かれるとそこまでは言えない人もいると思うので、「これはＮＨＫらしい番組だったか」と質問をしたほうがよいと思う。いろいろなところでこの番組に満足したのかとか、ＮＨＫの今の放送に満足しているのか、番組がＮＨＫらしいのかを直接聞いたほうがよい。「公平・公正」とか、「正確・迅速な情報提供」とか、いろいろな項目を聞いているが、それで満足しているのかどうかを直接聞いていない。ＮＨＫらしい番組として視聴者が見ているのかを聞いていない。今後、管理・評価のしくみを考える上で検討してほしい。

＜「しあわせニュース２０１４春」（総合　４月２５日(金)後 8:00～8:43 放送）について＞

○　笑えるだけではなく、考えさせられながらも感動して泣ける内容で、１回だけではなく、３回ぐらい見たいと思える番組だった。ＮＨＫの全５４局から厳選したというのはＮＨＫならではだと思う。年に４回放送するのであれば、日本だけではなく、宗教や文化、慣習は違っても、ほかの国のしあわせはどうなのかについても取り上げてみてはどうか。国際交流やスポーツ外交がこれから注目を浴びていくが、どういうところで人が何を感じているのか、世界と分かち合うような部分も知りたいと思う。どこの局のニュースとして扱うかが難しくなるかもしれないが、各局からの話題の合間に少し挟む感じででも、海外の話題も入れてもらえれば、子どもたちが早くから世界を意識し、世界の人の感情を意識してものを言えたり、ことば遣いも変わってくるのではないかと感じた。

○　すばらしい番組だと思った。ニュース番組はともすればだれが亡くなったなど、ある種の悲劇が矢継ぎ早に繰り出され、１つ１つはすごく悲しいことにもかかわらず、感情がまひし、心が何となく冷たくなってしまうことがあるのではないかと思う。すべてのニュースが心温まるもので、ニュースの見せ方にはこのようなあり方もあるという新たなニュース番組の一面を感じさせてくれた。視聴者参加型でリモコンのボタンを押してみんなで参加できるようになっていた。今やテレビの前で決まった時間に座ってテレビを見るスタイルではなくなってきており、番組を録画するとか、スマートフォンで見るとか、テレビがより個別化している状況だ。テレビのもつすごさはみんなで見て盛り上がるような、人々をつなぐ意味合いがかつてはあった。今でもサッ

カー日本代表の試合などではみんなで応援し、ゴールするとツイッターで盛り上がっている。みんながつながり合うプラットフォームとしてのテレビの可能性はあると思う。そういう新しい可能性を試せる場所としていろいろ試みてほしい。すばらしい番組だが、今後こうなるともっとよいということがインターネットとの連動だ。この番組の楽しいホームページがある。鈴をクリックするとニュースが吹き出しで出てきて、どんな内容かがわかるようになっている。たとえばここで視聴者がいちばん反応したニュースは何だったのか、それをランキング化すれば各放送局も盛り上がると思う。アーカイブ化をしているが、個別のニュースにいくと「○○局のサイトはこちら」とあって、該当局のホームページに飛ばされるだけになっている。どこかに動画はあるのかもしれないが、インターネット上に動画を上げ、見られるようにすれば、ランキング１位はこれだったのかというように、後からの需要にも応えられる。せっかくインターネットと連動しているので、後から見ることができるようにすればもっとよいと思う。よい可能性にあふれている番組なので、積極的に取り組んでほしい。

○　全国に５４局あるＮＨＫならではのすばらしい内容で、今後の可能性を感じた。今後も放送があると言うことなので見せ方について検討してほしいことがある。今回はどちらかというとバラエティー形式で、いろいろなタレントが出演しており、それも楽しいと思う一方で、もう少し余韻に浸りたいニュースがあったときにすぐにスタジオの映像になり、ゲストが感動したり、泣いたりしている様子を見せていた。もう少し静かに見たいときにタレントのコメントで聞き取れなかったところもあった。それがいけないのではなく、そうした演出で親しみやすいＮＨＫを打ち出したいのも理解できるので、演出に幅を持たせてほしいと思う。今回は地方局の技術カメラマンの制作する側の苦労話が出ていた。５４局の制作現場の人たちがどういう苦労をしているのか、地元の人とどういうコンタクトをし、ニュースを発掘したのか、そういう話も聞いてみたい。その場合にはバラエティ形式ではなくてもニュースのすばらしさを実感できるのではないかと思う。民放にも地方によい番組はあるが、それらを集めて放送するということが、スポンサーの関係などがあるのか、民放ではできない。それをＮＨＫができるのであれば、全国５４局の顔が見える形のニュース番組、新しいニュースを伝えてほしい。

○　“ひな壇”ゲストのような民放がよく取り入れている手法をまねする必要はまったくないと思う。番組を見ている人がこうだと感じているところに、違う方向の意見ではやし立てられると寄り添えなくなる。ゲストの意見を聞くぐらいならもっとほかのしあわせニュースを見たくなる。カメラマンの話はとてもリアルだった。カメラマンでも、ディレクターでも、現場を取材した人たちが、テレビではこのようにしか映せなかったが、実はどうだったのかなど、現場のもっと深い部分を語ってくれる人のほ

うがタレントより胸に響くものを話してくれる。タレントは自分をアピールする方向にもっていこうとするのが常なので、そういうところはこの番組に必要ないと思う。全国に５４局ある局の地域色がとても豊かな、地域ならではの情報を集めて見ることができ、日本にはこんなところもあったのかとうれしくなるものや知識欲が育つものが見受けられた。もっと日本ならではの、日本人はよい、日本人は世界で最高と思えるようなものを追求してもらいたい。これからグローバル化が進む中で、日本人は国際化に向け語学を勉強することより、日本の文化に対して誇りをもった気構えを持つことがいちばん必要だと思う。この番組には、そういう部分を啓発できるものになりえる可能性を感じた。年に４回放送するということだが、全国に５４局あるのでちょっとしたことでも、大きなことでももっとたくさん集められると思うので、月１回程度の放送にすれば、毎月楽しみにする人が出てくると思う。この番組を見ると元気になるとか、自分もがんばろうとか、自分もこんなことをして地域貢献したいと思えるようになるのではないかと思う。私はそういう気持ちになった。各局のランキングを年末に行い、集大成として練り直すとかなり見応えもあり、楽しいのではないかと思った。

○　地域のニュースとしてその地域向けだけに伝えるのはもったいない話題を集めて番組化しているので、それほど制作費もかからず、再利用の話題にタレントで味付けしている番組という見方もできる。大分のカメラマンの制作現場の舞台裏を見せるというのは確かにおもしろかったが、この番組に出そうとねらって作ったものではなかったと思う。これから先、このような番組を増やすときに、ねらって作ったらおそらくおもしろくなくなる。今回もニュースはかなり玉石混交だったが、二次利用だけでなく、質を高めるためにも最初からしっかり作るものがないと厳しいと思う。

○　全国各地のふだん見られないニュースが見られるので、素材としてはおもしろいが、番組としてはバラエティーになっており騒がしく感じた。実際の放送で番組を見ていたら５分ぐらいでチャンネルを替えていたと思う。ゲストは感動を強調し、こちらが余韻に浸る間がなかったため、ゲストの位置づけに疑問を感じた。アシカが笑うところで女性タレントまで笑わせる演出は必要ないと思った。ＮＨＫらしさはいつも話題になるが、よい素材がたくさんあるのでうまく使ってほしい。

○　たとえば新幹線は事故や運行ミスがなく１日が終わるとニュースにならず、だれかが失敗するとニュースになる。みんながんばって社会が成り立っているので、がんばっている人たちを応援する番組を放送してもらえるとよいと思う。そのような番組ももちろんあるが、今後も取り組んでほしい。

○　この番組を見るのは若い視聴者が多いのかと思う。４３分の番組で１６件の話題があったが、画面の切り替わりと展開の早いトークで集中力がそがれるような気がした。１位となった「旅立ちのオルゴール」もあらためて再生されたものを見て感動した。５４局が切磋琢磨（せっさたくま）し、感動するものを集めるのは、感動を創造する意味でよいのでないかと思う。朝のニュースでもインターネットで公開されている世界の感動映像を紹介しているが、インターネットの感動映像をまとめて紹介するというアイデアもあっていいと思う。

○　ゲストが話す分だけニュースを紹介する時間がなくなる。ゲスト無しで、司会者だけで伝えていくという方法もあるのではないか。番組はＮＨＫらしくという話をしても、やり方は民放に近い感じを受けたので、もっとＮＨＫらしさに徹してもよいのでないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

海外の話題については検討したことがある。ＮＨＫは国内５４局だけではなく、海外にも支局があるので可能性は考えられる。短いビデオクリップは国境を越えて伝わり、わかりやすい楽しさは意外と分かち合えるので、世界にいろいろな形で出すこともありえる。日本のちょっとしたニュースも国境を越えて伝わるものがあるのでないかと現場でも検討しているので、そのあたりは考えたい。ホームページについては指摘のあった点を検討している。著作権などの問題はあるが、短い動画で放送したニュースを伝える場があるのではないかと現場の若いディレクターからも意見が出ているので考えたい。素材を集めるために全５４局のアナウンス、報道、制作部門にアンケート調査を毎回実施している。たとえば１～４月に各局で、しあわせを感じる、おもしろい、感動できるニュースはあったかというアンケート調査をし、ニュースの素材を集めている。地方局ならではの土地柄が見えるようなニュースはこれからも積極的に活用していきたい。そのうえでスタジオの設計については賛否の分かれるところかと思うが、今回は夜８時の放送なので若年層というか、ファミリー層、４０代とその子どもを強く意識した部分もある。感動できるニュースの内容に今回は恵まれたこともあり、お年寄りからはもっとじっくり見たかったとか、若い人からは強引な共感をタレントがつくるのはどうなのかという意見もあった。タレントの人選、どういうコメントをもらうの

か、演出も含め、今後は考えたい。昨年の大みそかには、午後５時からの２時間弱の放送で５４局すべてのニュースを出した。時間帯的にもゆっくり落ち着いて見られるような配慮をし、少しゆったりめにした。芸能人も年配のゲストでゆっくり自分らしいことばで表現できる人を人選したつもりだった。今回は夜８時ということで若い視聴者を少し意識した。夏、秋、大みそかと番組は続くので、いただいた意見は大事にし、番組作りに生かしたい。現場の制作スタッフは可能性のある番組だと認識している。この番組は素材とニュースのポテンシャルを見つけ、再構成していかないと視聴者からはまた同じようなことをしていると見えがちな部分が多々あると思う。現場は年４回の放送になって喜ぶのではなく、より新鮮な形の切り口だったり、そんなこともあるのかという驚きなどが必要だと思う。今回は大阪のコマ回しの話題があったが、懐かしいとか、こういう遊び方もあると知ってもらいたいと思った。生放送ということもあるので、今回桜の中継をしたが、桜を見に行きたくても見に行けない人たちに桜を見せようというのが現場のコンセプトだった。桜が咲いていること自体がニュースというところから放送したが、生放送、中継、双方向ボタンも含め、期待が高い分、毎回内容を発展させ、「しあわせニュース」を伝えていきたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　４月２７日(日)のＮＨＫスペシャル「調査報告　女性たちの貧困～“新たな連鎖”の衝撃～」は、すばらしいテーマを取り上げていた。今忍び寄っている貧困について深く掘り下げていた。よい切り口だったがゆえに確認したいことを指摘する。ネットカフェで暮らす２人の女性が取り上げられており、劣悪な状況で生きている女性に焦点が当てられていた。どのケースを取っても生活保護水準以下の人たちだったと思う。番組では生存権のもとに生活保護が本当は受けられるが、彼女たちは受け取っていないというような話が出ていなかった。状況を改善するために保育士の資格を取ってがんばろうという話になっていたが、彼女たちは生活保護で一時的に保護されてしかるべき人たちなので、そこにある程度触れなければ、番組を見た人はここまでの状況でも自己責任でがんばって資格を取らなければいけないのかと思ってしまうので

はないだろうか。なぜ生活保護にまったく触れなかったのか教えてほしい。番組で取り上げた人たち、貧困で苦しんでいる人たちに、番組では使わなかったにせよ、生活保護があるとＮＨＫから情報提供をしたのか聞かせてほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「調査報告　女性たちの貧困」については、大きく言うと生活保護対象と思われるのは最初に出てきたコンビニで働いている女性とネットカフェの女性の２つのケースだが、生活保護水準に達していなかったのでそのことに触れなかった。

○　５月１１日(日)のＮＨＫスペシャル“認知症８００万人”時代「行方不明者１万人～知られざる徘徊の実態～」についてだ。認知症については、昼のニュースなどでもずいぶん伝えており、よい企画だったと思う。それに伴って行方不明となっていた女性が群馬県で見つかったのもよかったと思う。

○　５月１６日(金)ＮＨＫスペシャル「集団的自衛権を問う」では、賛成意見、反対意見を述べる発言者がお互いに敬意を払い、議論がかみ合っていたと思う。一方で５月１７日(土)の週刊　ニュース深読み「新たな“労働時間制度”あなたの給料は？働き方は？」では意見がまったくかみ合わない感じだった。ＮＰＯの人が一方的に話し、議論をするというより自分の意見をみんなに聞かせたいというような形だった。「週刊　ニュース深読み」は、いつもは難しいことを一般の人にもわかりやすく紹介している番組なので、今回は出演者の選び方が好ましくなかった感じがした。意見が対立する出演者の組み合わせをもう少し考えたほうがよいのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

ゲストの選び方については、今後も考えていきたい。「週刊ニュース深読み」は生放送番組で、議論がうまくかみ合わない場合があるが、視聴者がよくわかるように、お互いの話をしっかりと聞いて意見を述べ合うことが重要だと思うので、今後も検討していきたい。

○　集団的自衛権の問題については、昨年の特定秘密保護法の報道ぶりから見て、公平性が大丈夫かと心配していたが、今回はかなりバランスの取れた構成になっていたと思う。５月１６日(金)の時論公論「集団的自衛権　懇談会報告書の意味」も気になるところが少しあったが、よかったと思う。特定秘密保護法案のときは有識者でレベル

のばらつきがあったが、５月１６日（金）のＮＨＫスペシャル「集団的自衛権を問う」（総合 後 10:00～11:13）では、賛成派が北岡伸一氏、反対派が柳澤協二氏で、この２人を軸に議論をかみ合わせたのことがとてもよかった。憲法の専門家を出すと抽象論で議論が混乱することも多いが、北岡氏と柳澤氏はお互いに敬意を払って議論をしており、そのあたりのことまでうかがえた。

（ＮＨＫ側）

集団的自衛権については５月１６日(金)のＮＨＫスペシャル「集団的自衛権を問う」のほか、５月１８日(日)の「日曜討論」でも放送した。国の基本に関わる問題なので多角的に論点や人選にも気をつけ、伝えたいと思う。憲法記念日の夜のニュースはバランスを取っているつもりだが、どの部分を放送で使うかというところも確かにある。多くの人にバランスが取れていると見てもらえるような工夫と試みをしていきたいと思う。

○　「首都圏ネットワーク」は、ＮＨＫ首都圏のツイッターアカウントと連動しているのか。もし連動していないのであれば理由を教えてほしい。キャスターの橋本奈穂子アナウンサーは以前「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」を担当しており、ツイッターと連動した双方向的なやりとりをしている。橋本アナウンサーの持ち味を生かし、連携するともっとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

「首都圏ネットワーク」は「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」のようにインターネットと連動しているところまでいっていない。「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」のようにツイッターなどを入れるためには対応する人間が必要で、そこまではできていない。橋本キャスターは「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」でインターネットとの連動の先駆け的なことを担ってきたので、そういう志向をもって、その方向で何とかインターネットとの連動もできないかと模索していることは事実だ。そうした方向で今後も検討したいと思う。

○　４月２６日(土)のＥＴＶ特集「辞書を編む人たち」を見た。少し前に「舟を編む」という映画があり、中身は似ているが、本人たちのドラマではなく、仕事のことがより深く放送されていた。ことばに対する真摯な態度、鋭さがあり、そこまで考えるのかとよくわかり驚いたし、これほど真摯にことばに向き合っている人がいるのかととても感動した。

○　４月２７日(日)の古典芸能への招待「能『道成寺』～喜多流」（Ｅテレ 後 9:00～11:00)を見た。解説がとてもよかった。舞台の振り返りを交え、とてもわかりやすく解説をしており、能はこんなにおもしろいのかと思った。歌舞伎の「道成寺」は見る機会があるが、能の「道成寺」がこれほどすばらしく、エキサイティングなものだとよくわかり、とても楽しめた。これからも古典芸能を放送してほしい。

○　５月１０日(土)のＥＴＶ特集「発見！謎の金銅製馬具～古代日本と朝鮮半島の交流史～」では、日本と朝鮮半島は深いつながりがあったという話が出ていた。日韓の学者が話をしており、現在はいろいろなことで不幸なことにもなっているが、深いつながりがあることを認識させられた。発掘された出土品を３Ｄプリンターを使ってパーツを再現し、組み立てていく様子はとても感動的だった。３Ｄプリンターで銃を作ったという報道もあったが、このように使われればより役に立つとわかってよかった。

○　５月１４日(水)のスーパープレゼンテーション「建築特集（１）坂茂　紙で作る仮設シェルター」を見た。この番組では日本人はめったに出てこないが、今回は日本人のプレゼンテーションだった。建築家の“さが”のような話もあり、短かったがとても印象的だった。モニュメント的な建物を建てたということだけでなく、被災地などで実際に長く地道な活動をしていることなど、まったく知らなかった。とてもおもしろいプレゼンテーションだった。

○　教育番組全般についてだが、ＮＨＫの教育番組はたいへんよくがんばっていると思う。子ども関係の番組は２つ意味があると思う。小さい子どもたちに直接文化を伝えることや、次世代を育成するという点だ。若い親たちが頼りにしており、日本に暮らす親だけではなく、海外に仕事で行っている日本人の親たちが子どもに日本語を伝えるときに役に立つので見ているということだ。子どもたちにとってすばらしいことだと思う。今の子どもだけではなく、若い人たちはほとんどテレビを見ない。若い世代がＮＨＫに就職を志願をするだろうかと心配なぐらいにテレビを見ない。学生、２０代になってもテレビをしっかり見ている人たちは、子どものときにＮＨＫの教育番組を見ており、長期的な時間幅で影響が出ていることを実感している。中央放送番組審議会でも教育番組を取り上げ、議論をしてもらえればと思う。教育番組は影響が長期的なものなので、番組を制作する立場でも長期的にどういう理念で、どういう計画のもとに教育番組を作ろうとしているのかも教えてもらえればと思う。

○　５月１９日(月)の再放送でワイルドライフ「よみがえれ！アジアの野生生物　中国３０００ｍ高山地帯　幻の“黄金サル”を追う」を見た。昔はもっと普通のところに

暮らしていたサルが、なぜ山の上で暮らしているのかという話から、環境問題に対する話や植樹など、中国のよさをＮＨＫの取材で伝えているのがとてもよかった。ベトナムとの関係や尖閣諸島の話もある中、この番組では文化の面で貢献しているのがよいと思った。

○　憲法記念日の５月３日(土)の夜のニュースはバランスを取ってほしいという感じがする。今回は護憲派の集会が２つ、護憲派と改憲派両方が出てくる集会が１つ、最後に護憲派と改憲派が出てくる構成だったと思う。この構成は若干偏りがあったとあえて申し上げる。特に最初のニュースで学習院大学の教授が出てきて「私たち、子ども、孫がほかの国の戦争に加担することになる」という演説をそのまま使っていた。生ニュースだからと言えばそれまでだが、切り口のところでもう少し工夫があってもよいという感じはする。年齢や性別でバランスを取っているのかもしれないが、そこは一考の余地があるかと思う。

○　ＮＨＫワールドに「ＫＡＢＵＫＩ　ＫＯＯＬ」という番組がある。１か月に１回程度の放送で、ライブストリーミングでも視聴できるようだ。モバイル端末などを持っていれば見ることができるが、この番組を見つけるのがなかなかたいへんだ。ＮＨＫワールドの番組もＢＳなどで放送されるものがあるが、この番組が放送されていないのが残念だ。ストリーミングできるのならば語学番組のように放送してからしばらくの間はいつでも見られるようにしてもらえるとありがたい。

○　東京オリンピック開催が決まってから“2020 年”が合言葉のようになっているが、2020(平成３２)年はアスリートにとっては少し先の話だ。2020 年のオリンピックで活躍が期待され、今の高校生、中学生、小学生が目指している競技はあるが、その前に2016(平成２６)年のリオデジャネイロオリンピックがあり、そのことがあまり取り上げられていない感じがする。2020 年がすぐ来るような印象でスポーツの現場が取り上げられすぎていて、2016 年に向かってがんばっているアスリートたちを見ていない。パラリンピアンはただでさえ注目が少ない中で、今から 2020 年の話をされてしまうと本当に光が当たらなくなってしまう。2020 年の東京オリンピックを盛り上げることはありがたいが、まずは 2016 年に向けてがんばっているアスリートたちがいることを取り上げてもらいたい。2016 年に向けてがんばっている選手たちにも光を当てたうえで 2020 年を盛り上げてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

５６年ぶりに東京オリンピック・パラリンピックが決まったということでそこに焦点が当たっていると思う。今年はＦＩ

ＦＡワールドカップもあり、それが終わればリオデジャネイロオリンピックだ。そこに向けて盛り上げていく構想はできている。スポーツは国民が強く関心をもつコンテンツなので、リオデジャネイロオリンピックに向けても、いろいろな番組を制作していく。

○　中央放送番組審議会ではよい議論が展開されており、多くの学び、生かしていこうという意見があると思う。その中でＮＨＫ側の出席者が全員男性というのはいささかもったいないのでないかと思う。番組を制作するのには女性が多く関わっていると思う。特に若手、中堅の女性層の人たちが今後管理職になり、多様性のある番組作りを行い、多様な人々に番組を届けるのであれば、オブザーバー席のようなものを作り、若手の女性、若手の男性、多様な人たちが議論に参加することは意味のあることではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫは女性の番組、女性の問題をいろいろ取り上げるが、中央放送番組審議会のＮＨＫ出席者は男性ばかりとなっている。意見を参考にし、どういう形かは別として出席した方がよいと思うので検討する。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成２６年４月ＮＨＫ中央放送番組審議会（議事概要）

４月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１５日(火)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１２人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２５年度第４四半期・１～３月）について報告があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　北城恪太郎（日本アイ・ビー・エム（株）相談役）
副委員長　小林いずみ（前世界銀行グループ多数国間投資保証機関長官）
委　　員　秋池　玲子（ボストン コンサルティング グループ パートナー&マネージング・ディレクター）
大野　博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
大日向雅美（恵泉女学園大学大学院平和学研究科教授）
鎌田　實　（諏訪中央病院名誉院長）
倉重　篤郎（毎日新聞社論説室専門編集委員）
駒崎　弘樹（ＮＰＯ法人フローレンス代表理事）
龍井　葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
谷口　　肇（全国農業協同組合中央会常務理事）
若月　壽子（主婦連合会事務局）
和田　　章（東京工業大学名誉教授）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２５年度第４四半期・１～３月）について＞

○　量的指標のジャンル別世帯視聴率では報道・解説が７．７ポイントと高い数値であるにもかかわらず、質的指標では「丁寧に取材・制作されている」「正確な情報を迅速に伝えている」「社会的な課題について考えさせられる」のポイントが下がっているのはどのような理由によると考えているのか。

（ＮＨＫ側）

量的指標でみると、「ＮＨＫニュース７」の視聴率が１４．９％から１６．２％に、「ニュースウオッチ９」も９．３％から１０．４％に上がっている。その中でなぜ質的評価が下がったのかということについては、１～３月には、ＮＨＫにとってあまりよくないイメージを持たれる出来事がいろいろとあり、それらのイメージが質的評価に影響しているのかもしれない。質的評価を調べる調査では、補完として自由記述も回答してもらっているが、その中には就任会見での会長の発言、佐村河内守氏の問題に関して番組でおわびをしたこと、ＮＨＫ放送技術研究所での不祥事などについても意見が記入されており、それらのことが質的評価の低下に影響している可能性があるのではないかと考えている。

○　こうした調査はこれからも続くのか。３か年の経営計画に基づくものなので今後変わるのか。

（ＮＨＫ側）

現在の「平成２４～２６年度　ＮＨＫ経営計画」を策定した際にこのような指標による評価・管理を取り入れている。以前の「平成２１～２３年度　ＮＨＫ経営計画」では、放送に対する接触者率と受信料の支払率という２つが経営目標となっていた。しかし、現在の３か年経営計画を策定する際に、放送はより多角的な点から評価していく必要があることから、今の質的指標を取り入れている。イギリスやオーストラリア、カナダなど各国の公共放送でも、少しずつ違った形ではあるが、こうした指標による評価・管理を用いている。平成２７年度からの次期経営計画については、今の指標のままでよいのかという議論はあると思う。多少設問を変えたり、項目を増やしたり削ったりということはあるかもしれないが、このような方法でＮＨＫの放送を質と量の両面から評価をする形は必要ではないかと思っており、今後、次期経営計画に向けてさらに議論を深めていきたい。

○　ＮＨＫの放送の質を評価することはすばらしいことだし、重要なことだと思うが、現在のような調査だと何がよくて何が問題なのかがわかりにくいところがある。現在

の番組編成が視聴者から見て好ましいのかどうかということもあると思う。現在の調査の方法がよいのかどうかも含め、中央放送番組審議会での意見だけが番組の意見なのか、もう少し幅広い視聴者の声も反映するということもあると思う。視聴者がＮＨＫに何を期待しているのか、期待度に対する達成状況を把握するには現在の項目立てでよいのかどうかも検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

指標に関する調査のほかにも各種の調査があるが、いろいろと議論して検討していく。

○　「世界への情報発信」については、ＮＨＫの放送に対する期待感をさまざまな人たちが強く持っている。国内での調査だけではなく、海外で受け止めている人の意見を聴取しないことには評価ができないのではないかと思う。この枠組みで行うのか、違う形なのかということはあるかと思うが、そのような意見が反映されるとよいと思う。同様に「地域社会の発展」についても、東京にいる人だけを対象にしているのではなく、おそらく全国で調査していると思うが、地域の視聴者の意見も見えてくるとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

「世界への情報発信」は、国際放送の分野になるが、国際放送の場合、国内放送のように接触者率や視聴率を調査することができない。現状は、どれだけ認知されているかを世界のさまざまな国で調査しているほか、各国で番組を視聴しているモニターから国際放送についての意見を聞き、国際放送に反映するように努めている。国内に比べると国際放送についての調査はきめ細かく行われていないのは事実だと思う。これからもいろいろな形で調査をしながら国際発信の充実に努めていく。国際放送とは別に、日本で制作したコンテンツを海外の放送局に売り込み、各国で放送してもらうことなど、そうした形でも発信できるように力を入れたいと考えている。

○　ＮＨＫの国際発信への期待は、日本について正しく伝わることや、日本のよさが伝わるということもあるが、番組を通して日本を好きになる人が増えたり、観光が振興されたりすることへの期待もある。現地でビジネスをする人、勉強をする人、文化を発信する人の後押しになるなど、いろいろな人がいろいろな側面から期待をしている。世界への情報発信が、これらの人々のどの程度後押しになっているのかも含めて

見てもらえればと思う。

○　「公平・公正」などの評価が下がった問題への認識はとても重要で、ある意味深刻だと思う。信頼性の向上に向けて何が必要かということについての現状分析をしっかりと行い、きちんとした対策を講じてもらいたい。

○　番組審議会に参加し、長い間皆さんと議論をさせてもらい、とても勉強になっている。委員の皆さんはプロフェッショナルであり、たいへん深い知見をもっている。発言を聞くたびにそういう視点もあったのかという新たな発見もある。番組審議会の議論は毎回すばらしいと思う。この議事の内容は議事概要としてインターネットで公表されているが、発言の部分は基本的に匿名となっている。国の審議会においても匿名の議事録は存在していないと思う。開かれた政府ということで何が起きているのか、どのような過程において政策が作られているのかという意味合いでも途中経過を出すことが望ましいということから、今は基本的に動画中継などがされていて、議事録もインターネットで見られるようになっている。中央番組審議会は密度の濃い、すばらしい議論がされているのだから、きちんと国民に開くことが必要ではないかと思う。それが視聴者の信頼を勝ち得ることにもつながるのでないかと思う。番組審議会の議事録も匿名ではなく、開かれる形にしてはどうかということを検討してもらえればと思う。

○　その件については、われわれ委員としても議論することが必要だ。発言そのものは恥じることはないが、自由闊達（かったつ）な発言を求める番組審議会の場において、委員の発言が出にくくなることは好ましい事ではない。今後検討し、また委員の皆さんとも相談したいと思う。

○　受信料のほかに、ＮＨＫオンデマンドも利用し、料金を払っている。ＮＨＫオンデマンドはどれぐらいの収入があるのか。一生懸命に制作したよい番組が、どの程度収入に反映されているのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫオンデマンドについては、サービスを開始してから赤字が続いていた。平成２５年度は現在、決算をおこなっている最中だが、ぎりぎり黒字を達成できそうなところまで利用者の数が増えている。経費の削減をしたこともあり、初めて単年度黒字になるかどうかというところだ。受信料収入は 6,000 億円を超える額なので、それと比べるとＮＨＫオンデマンドの収入

はそれほど高い割合ではないのが現状だ。

○　「社会的課題」の共有について述べたい。例を挙げると、紹介サイトを通じて預けたベビーシッターによる２歳の男の子の死体遺棄事件は社会的に大きな問題になった。発生したのは３月１７日(月)で、１８日(火)、１９日(水)はＮＨＫも他局も一斉に取り上げ、当初はかなりセンセーショナルな取り上げ方をしていた。ＮＨＫがそういう放送を行ったかは記憶にないが、民放は一斉に母親にマイクを向け、首から上は隠していたが、涙ながらにわが子を失った悲しみ、自分の至らなかったことを反省する母親のことばを放送していた。こうした扱いは母親だけを責めるもので、解決のつかない問題をなぜセンセーショナルに取り上げるのかと、じくじたる思いで見た。３月２５日(火)の時論公論「ベビーシッター事件　今問われること」では、わずか１週間で内容を精査し、対策まで考えるような内容になっていた。この問題に胸を痛めている人たちにとってはたいへんすばらしいメッセージだったと考えている。残念ながら放送時間があまりにも深夜で、こうした大事な問題、社会的な課題を共有させる発想が本当にあるのだろうかと思った。「時論公論」はすばらしい番組だと思うが、放送時間も配慮してもらえれば公共性に対するＮＨＫのすばらしい取り組みはもっと評価が高くなるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

「時論公論」については、もっと早い時間に放送するべきだという意見は部内にもある。ＮＨＫは夜７時に「ＮＨＫニュース７」、９時に「ニュースウオッチ９」、１１時２０分に「Ｓｐｏｒｔｓプラス」、また、１１時３０分には「ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」というスタイルの違う形のニュース番組を放送している。そしてその後に「時論公論」を深夜０時から放送をしている。放送時間をもっと早くしたほうがよいという意見もある一方で、大きな問題があった場合に普段の１０分間ではなく、１５分や３０分で放送するという編成が、０時台だと行いやすいという利点もある。解説番組はこの「時論公論」のほかに、午前１０時台の「くらし☆解説」や、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の午前６時台にも解説コーナーの「ここに注目！」があるなど、いくつかの時間帯で放送している。世の中が複雑になっているので、ニュースをそのまま伝えるだけではなく、解説力を伴ったニュースが視聴者から求められていることはいろいろな事から感じている。全体の中でいろいろと検討したい。

解説番組については、深夜の時間帯以外にもさまざまな番組の枠があるが、通常のニュースの枠の中も含め、いろいろな形で解説の場を作っていこうと少しずつ広げている。いただいた意見をたいへん心強く受け止め、放送時間についても引き続き議論していきたいと思う。

○　「正確・迅速な情報提供」の期待度は高いが、その達成度、実現度が低い。それをどのように高めていくのか。ＮＨＫ全体として高めていくのだろうが、そのほかの指標に対しても、だれがどのように担い、達成していこうと考えているのか。期待度と実現度をＸ軸とＹ軸とすると、右肩上がりで進むことが望ましい。具体的に「正確・迅速な情報提供」がビッグデータ時代にどう展開されていくのか。局内的、横断的な取り組みなど、難しさはあるだろうが、どんな工夫をしているのかも教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

「３か年の基本方針」の１４指標のうち「受信料制度の理解促進」と「受信料の公平負担」は受信料制度のことで、ここは営業が中心になるところだ。それ以外は技術のこともあるが、国際放送と国内放送を含め、大部分は放送にかかわることが記載されている。放送総局の報道局、制作局などのそれぞれの部署はそれぞれの担当番組をもっている。ドラマならばドラマ、報道ならば報道、教育ならば教育など、それぞれの担当番組の質を高めることが最終的に経営の指標を押し上げる。１４指標と放送の質的１０指標、量的指標の話をしたが、われわれの役割は放送の質を高めることと、いろいろな人に見てもらえるようにすることで、その結果として経営の指標が上がる。番組を作るそれぞれの部署で自分の受け持つ番組の質を高めていくことが、結果として全体の指標を上げていく。「正確・迅速な情報提供」についても、個々の担当が役割をしっかりと果たすことによって全体として正確性、公平性が実現するように努めたい。番組編成を考えるときに、こういう課題について放送で取り組もうという重点項目を決めている。中央放送番組審議会にも諮った「編集の基本計画」がそれに当たる。それを基に、具体的な「編成計画」を作成し、その実現を図っていく。放送分野を担当する者としてはそういう形で取り組みたい。

○　わたしが所属する組織では、組織の価値のようなものを全職員が共有し、個々が具

体的な職務目標を通してその価値を実現するというスタイルで、その中で人事考課を働かせ全体が右肩上がりになるように組織運営をしている。ＮＨＫでは全職員で価値を共有し、職員全体で実現しようとしているととらえてよいか。

（ＮＨＫ側）

放送は地上で２波、衛星で２波、ラジオで３波あり、さらに国際放送もある。放送全体については会長が編集権をもっており、それを私も含め理事、部局長がそれぞれ分掌している。そして放送法や放送ガイドラインに沿ってそれぞれの現場で番組を作っている。組織の価値や目標、存在意義をそれぞれの現場でみんなが共有する、徹底することによってしかよい番組、ＮＨＫにふさわしい番組はできないと思う。人材の育成も含め、長い間かけて取り組まなければいけない。実際に番組が好評を得るかどうかは時代をどう読み取るか、視聴者の要望をどうとらえるかということもあると思う。「連続テレビ小説」は最近高い支持を得ているが、脚本もよいのだろうし、視聴者に訴えるテーマが適切に選択され、それが脚本として生き、ドラマという形で実現しているのでないかと思う。

○　すべての番組が「公平・公正」と絡まるわけでなく、ドラマはドラマでおもしろさがいろいろあると思う。調査結果からはどうしてもＮＨＫ全体の話になってしまう。「ＮＨＫニュース７」はどうだったのか、「ニュースウオッチ９」はどうだったのかなど、ある程度個別に対策が取れるような調査をしないと結果に結び付かないのではないか。全体の数字はよかったとか、悪かったとか、もう少しがんばらなくてはということでは何をどう直せばよいのかよくわからないのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

番組カルテというものがあり、放送の質的１０指標は個々の番組ごとに落とし込まれ細かく分析している。それぞれの質の評価を番組ごとに行ったり、視聴率や世代ごとにどういう人が見ているかなどを調査している。Ｅテレの番組は視聴率が低くても、福祉番組はそれを見てもらいたい層に実際に届いているのかなど、番組を担当する者は番組カルテを見て、この番組は狙いどおりに見てもらい評価されているのか確認している。こういうことを狙ったが見ている人たちは違う人だったとか、見てもらえなかったという場合ならば番組の作り方を変えないと

いけない、あるいは編成を変えないといけないという課題を共有し、次年度の番組編成などに反映している。そういう積み重ねを全体としての底上げにつなげていきたいと考えており、現場ではそのような作業が行われている。

○　３か年の経営計画である各指標に対する達成状況についての全体的な報告だったが、１つ２つ具体的な番組を取り上げてもらうとわれわれも理解しやすい。全体的な話になると何をどう捉えたらよいのかよくわからない。次回は報道番組、ニュース番組だけを取り上げ、評価がどう出ていて、こう変えたらよい評価が出たとか、問題があったなど、具体的な番組を１つ２つ取り上げもらうとわかりやすいのかもしれない。

（ＮＨＫ側）

番組カルテは、テレビ放送のすべての定時番組について四半期ごとにアンケート調査をしてまとめている。視聴率、接触者率は毎日のデータがあるので平均値を取っている。参考までにそのいくつかを次回に説明したい。

○　だれがどうやってこれらの指標に貢献していくのかが、職員の一人ひとりにまで理解されていくことが成果を生み出すことにつながるのだろうと思う。

（ＮＨＫ側）

番組審議のテーマから外れるが、組織運営としては、経営が作っている経営目標があり、それぞれの項目に基づいて制作局や報道局、その他各部局が部局目標を作っている。そしてその下にそれをどうやって達成するかというグループ目標を立てている。さらにその下に職員個人が自分の目標を立てている。組織目標はそういう形で各職員にまで浸透するようになっている。

編成の立場から言うと、いくつかの目標に対する職員の意識の共有に加え、質的な評価、量的な評価も含め、放送の１０指標の結果に基づいて年間の編成計画を立てている。それに合わせ、限られたＮＨＫの資源をどこに重点的に投資すればよいのかもこの結果をもとに考えている。実現度と期待度が開いているときにどうやって実現度を上げるかというと、職員の意識も

大事だが、ヒト、モノ、カネの手当てがないとその番組、そのジャンルは充実しない。指標の結果はどのジャンル、どの番組に投資するかというところまでつながっている。

＜放送番組一般について＞

○　３月２９日(土)のＮＨＫスペシャル　人体　ミクロの大冒険　プロローグ「ようこそ！細胞のミラクルワールドへ」を見た。人間は６０兆の細胞からできていて２０兆が赤血球であるとか、細胞をベースにした人体の秘密についてわかりやすく、しかもなぞ解きめいている番組だった。自分の健康についても問題意識がもてる出来のよい企画だったと思う。その出来のよさの原因を考えると、山中伸弥京都大学教授を案内人にして番組を作ったことで大きな信頼感が出せたと思う。山中教授のことばの使い方が抑え気味で、かつ心に染みるようなことばがいくつかあり、そういうところがよかったと思う。

○　ＮＨＫスペシャル「人体　ミクロの大冒険」はたいへんすばらしい番組だったと思う。４月５日(土)の第２回「あなたを変身させる！細胞が出す“魔法の薬”」では、母性に関係するオキシトシン、幸せホルモンと言われているホルモンのことがわかりやすく伝えられていた。４月６日(日)の第３回「あなたを守る！細胞が老いと戦う」では、老化に関しては健康番組では免疫力をアップすればよいと言われていたが、その免疫が老化に関係しているという驚く視点をとてもわかりやすく伝えていた。テレビだからこそこれだけわかりやすくできたという感じがした。

○　ＮＨＫスペシャル「人体　ミクロの大冒険」はおもしろく見た。ＣＧの部分はとてもよくできていておもしろかった。こういう番組だと折々にイメージ映像のようなものが挟まり、横断歩道みたいなところを渡る少女の映像がときどき入っていたが、演出の必然性を感じなかった。せっかく山中伸弥教授が出演していたので、もう少し話をしてもらえばよかったと思う。

○　４月１２日(土)のＮＨＫスペシャル「いま集団的自衛権を考える」(総合 後 9:00～10:29)は、今までにない質の高い討論だったと思う。建前だけを連発するのではなく、しっかりと論点を深め、相互のやりとりがなされていた。番組を制作するときのシナリオがしっかりと描かれていたのではと思う。ただ、かなり重要な論点の部分で、出演者がしっかりと対応できないまま次の論点に移っていったところがあった。賛否を決着させる場ではないが、あれだけのメンバーがそろっている中で、もっと深

く掘り下げてほしい点だった。次の企画に期待するが、番組づくりの段階でもっと押さえておいてほしい。

（ＮＨＫ側）

集団的自衛権についてはこれで終わりではなく、これから安倍総理大臣の私的諮問機関である「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」の報告書が出るとか、閣議決定されるとか、それに関連する法律が国会で議論されるなど、いろいろなタイミングがある。指摘されたことも含め、さらに質の高い討論を行っていく。

○　ＮＨＫスペシャル「いま集団的自衛権を考える」では、はっきりと立場の違う３人ずつで討論していた。発言者と反対の意見の人たちが発言を聞いている時の表情も画面を分割するなどして映すと、目は口ほどにものを言うところもあるので、おもしろいのでないかと思う。

○　３月２１日(金)の「テレビはネットでどこまで変わる？～放送と通信　世界最前線～」(総合 後 10:00～10:49)は、テレビはインターネットでどう変わるのかという、番組審議会でも何回か話題になっていることを取り上げていた。わかりやすい内容で、コメンテーターの指摘も興味深かった。箇条書き風に課題が羅列されたが、ＮＨＫオンデマンドで番組を全部見られるようになればなるほど、報道など同時発信する機能が重要になるという指摘もされていた。それが番組づくりにどのような課題となるのかという点はもう少し整理してもらいたかった。引き続き番組を通じて、そうした課題の整理をしてもらえればと思う。

○　放送記念日特集の「テレビはネットでどこまで変わる？」を見て、テレビの現場の人々もたいへんなのだとあらためて学んだ。中央放送番組審議会委員の１人として新たな心得を学んだような気もする。インターネットの進展で視聴者も家族そろってテレビを見る時代が過ぎつつあり、好きな場所で、好きなときに月 1,000 円以下でビッグデータをもとにした有益なコンテンツの提供を受け、端末で視聴できることを紹介していた。こうなると受信料、あるいは広告料を基盤にした既存のテレビの役割は本当に難しくなると強く思った。ゲストの人が双方向時代にすべての人へ向けた番組づくりは幻想だとか、真実への粘りや伝える内容が必要だとか、２４時間の時を共有すること、生放送の価値がテレビだということを言っていた。ソチオリンピックでは、浅田真央さんの演技の瞬間に国民は同時にその中継を見ていて、そのようなところにテレビの価値が傾いているのかと私の耳には残った。引き続きインターネット時代の

テレビの価値について問いかけを続けてほしい。

○　「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の中の午前７時台のニュースの位置づけはもう少し何とかならないかと思う。４月１日(火)の消費税引き上げにあたっては民放でもほぼ同じ企画を放送していた。値札の張り替えの問題や混乱している状況などいろいろあった。ＮＨＫはそこから高齢者の問題にいき、年金制度の改革の問題にまで広げており、全体として負担の問題を取り上げていた。この点は民放では放送していないＮＨＫらしい視点だったが、これが２０分以上続いた。民放は消費税引き上げを放送した後にニュースのラインアップを流していた。朝の出勤前はそちらのほうがニーズとしてはあり、悩ましいところだ。今に始まった話でないと思うが、あの時間帯のニュースをどのように仕上げるか、ニーズに基づいて構成しているのか気になった。引き続き検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫニュース　おはよう日本」については、朝の忙しい時間帯に長い企画ニュースを見ている暇はないという人もいる一方で、解説も含めてじっくりとニュースを視聴したいという人もいる。そのへんの兼ね合いについて、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」をどう作るかといつも議論になるところだ。そのため、午前６時３０分と７時に主な項目を並べており、６時３０分では短くニュース項目を伝えている。出勤する人は６時半ぐらいのところまでテレビを見て、その後に出勤の準備をして出かけていくことが多いとみており、去年から６時３０分からニュース項目を出すようにしている。７時台に入ると出勤する人たちはだいたい外に出ているか、準備をしていて、じっくり見ている人はこの時間に出勤しない人が多い。長い企画にすればよいというものでもないと思うので、工夫をしていきたい。

○　「タイムスクープハンター」がまた始まった。４月１２日(土)は「大江戸入れ歯事情」で、江戸時代の入れ歯師の話だった。あの時代も入れ歯を、しかも総入れ歯を作っていたのかと驚いた。木で作っていたが、材料が違うだけでしていることは今と同じだった。「タイムスクープハンター」はリアル時代劇で、取り上げる題材も普通の時代劇に出てこないものですごくおもしろい。これからも楽しみにしているので、おもしろい視点で取り上げてもらいたい。

○　４月１４日(月)のクローズアップ現代「日本のコメ　輸出に挑む～新たな市場をひ

らけるか～」では、コメの輸出に努力している人たちを取り上げていたが、輸出米がなくなり始めている問題がある。補助金が輸出米には付かず、せんべいや飼料にするコメには補助金が付く。これは政治の問題になるわけだが、番組でしっかりと取り上げたことで、飼料にするコメなどと一緒に、外国へ輸出するコメにも何らかの応援が必要だということがテレビを通してわかった。民放では取り上げないことをＮＨＫではしっかりと伝え続けており、こういうことの存在価値はかなりあると感じた。

○　連続テレビ小説「ごちそうさん」が終わった。意図されたものかはわからないが、あの家族の折り目正しさのようなものがたいへん印象に残った。子どもも、大人も外から帰ってくると必ず「ただ今戻りました」と言ってから家に入る。とても印象に残った。我が家でも実践しようと言っている。

○　連続テレビ小説「花子とアン」はとてもおもしろい。毎回涙しながら番組を見ている。小説では出だしの部分でつまずくと読む気がなくなることが多いが、「花子とアン」は最初からとてもよい。ＢＳプレミアムで見ているが、ＢＳプレミアムではほかにも短い時間でクラシック音楽を楽しめる「クラシック倶楽部」や、４月１４日(月)にはユキヒョウを取りあげたワイルドライフ「モンゴル　アルタイ山脈　ユキヒョウ親子　天空の断崖をゆく」の再放送を見た。ずっとテレビを見ていて仕事にならないほどだ。引き続きがんばってもらいたい。

○　「連続テレビ小説」はとても調子がよいと思う。このところ３作続けて形態は違うがそれぞれにきめの細かいシナリオと時代背景で、当時の世相にも思いをはせるストーリー展開に飽きが来ない。これまで「連続テレビ小説」には出来不出来があり、おもしろい作品の次は人気が下がるという流れがあったように思うが、このところは調子がよい。

○　日本が貧しかったころや、戦中、戦後の苦労などを今の人たち、子どもたちはたぶん知らないと思う。子どもが見ているかはわからないが、「連続テレビ小説」で紹介するのはよいと思う。そういうことを知る機会もないのでドラマで知ることができるのはたいへんよいことだと思う。

○　３月２９日(土)の「にっぽんの大地から生みだそう～第４３回日本農業賞～」（Ｅテレ 後 3:00～3:59)では、紹介された受賞者の人たちの農業実態、販売に対する工夫、本音の話が出ていた。多くの現場の農業者の人々の元気につながるものだと思った。８１歳の受託加工所会長が登場し、「農家の思いや希望に沿って６次産業として成功できるものは少ない、でも成功させなければ農業は楽しいものへと変化しない」

と言っていた。ゲストの杉浦太陽さんは「このことばにしびれた」と話していたが、私も共感した。ゲストの滝沢沙織さんは自らも農業にいそしんでいるそうだが、現地へ出向き、とても楽しく、わかりやすくトップランナーの成果の話を紹介していた。多くの人に理解が行き届く番組だったのではないかと思う。

○　３月３１日(月)に人生デザイン　Ｕ－２９「オンライン動画クリエーター」を見て、インターネットで一人ひとりが放送局になっているような実態と、生計も立てられているという現実に驚いた。

○　４月１２日(土)の地球ドラマチック「星　宇宙の神秘～誕生から死まで～」は、とてもおもしろい内容で、星の誕生や太陽系がどのようにできたのかということがよくわかり、映像もきれいだった。３月２８日(金)のアンコール放送で、白熱教室海外版ＭＩＴ白熱教室　第８回「星はどう生まれ　どう死ぬのか」(平成２５年２月２３日(土)本放送)も見たが、それよりも「地球ドラマチック」のほうがわかりやすかった。アメリカで作られた番組で、それをＮＨＫで監修したのかはよくわからなかったが、たいへんよい番組だった。Ｅテレではなく、もっと多くの人に見てもらえれば地球の誕生などがよく理解できたのでないかと思う。４月５日(土)の「ポンペイ“骨”が語る真実」はイギリスで作ったもので、たいへんよい番組だった。「地球ドラマチック」はおもしろく、たいへんよい番組なのでもっと上手にＰＲし、多くの人に見てもらえればよいと思う。

○　東日本大震災から３年を迎え、民放は取り上げ方が薄くなった。ＮＨＫは努力をしていたと思うが、それでも少なくなりつつあると思う。３月１１日の後はますます東日本大震災の話が減ってきているのでないかと思う。わたしは被災地に通い続けているが、忘れられてきているのでないかという思いが強まっているし、復興感の「二番底」ということばもあり、福島県では自殺が増えてきており、数字上にも出ている。電話が１日４万件来る「よりそいネットワーク」で機能評価委員をしているが、そこで見ているとＤＶなどを含め、相談が非常に多くなっており、心がかなり疲れているのでないかと思う。東日本大震災のことに関してはＮＨＫがしっかりがんばり続けないと日本全体が忘れてしまうのでないかと思う。取り上げにくいだろうと思うが、定期的にいろいろな番組を通し、東日本大震災のことを取り上げ続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

東日本大震災関係については４月からの番組編成でも「明日へー支えあおうー」や「東北発☆未来塾」など、いくつかの定時番組を引き続き放送している。月１回、東日本大震災関連の

「ＮＨＫスペシャル」を制作することも引き続き行っている。震災から３年ということで３月９日(日)には「震災から３年特集　明日へ－支えあおう－」(総合 前10:05～11:54、後1:05～4:00)で東北から長時間の番組を放送したほか、「ＮＨＫスペシャル」を７本制作した。東日本大震災については、原発の問題も含め番組を制作し、地元を支援することについては変わりなく取り組んでいく。東北の人とそれ以外に住む各地の人では関心に若干差が出てきていると感じている。３月に放送した７本の「ＮＨＫスペシャル」は、番組としてはそれぞれの成果が上がっているが、視聴率は残念ながらそれほど高くはなかった。どういうテーマを取り上げるかが重要であり、４年目、５年目となればテーマ、課題は変わると思う。とりわけ仙台、盛岡、福島の各局と東京とで緊密に連携し取り組んでいく。平成２５年度は連続テレビ小説「あまちゃん」が東北を舞台にしており、大河ドラマ「八重の桜」も東北支援として取り組んだ。平成２６年度のそのような大きな番組はなくなっているが、ＮＨＫのキャラクターのどーもくんとチャロが東北を旅する番組を放送するほか、地元の大学でさまざまな番組を収録する公開復興サポートも引き続き行っていきたい。どれほど役に立てるかはわからないが、このような気持ちをもって取り組んでいく。

仙台局、盛岡局、福島局の担当者たちとともに、東日本大震災のプロジェクトに取り組んでいる。「ＮＨＫスペシャル」のような問題提起型の番組や「今地元の人たちががんばってここまで復興したがまだこれが足りない」ということをしっかりと知らせる番組、東北で行う公開番組などを制作している。東北各地で行う「公開復興サポート」は地元の大学で実施することがとても取り組みやすいとわかってきた。大小さまざまな教室があるので、手芸の番組、将棋の番組、料理番組、歌番組のほか、復興をサポートするにはどうすればよいのかということを専門家に話をしてもらうなど、いろいろ大小さまざまな番組が考えられる。その中で「あさイチ」や「ラジオ深夜便」などの公開放送も行っていく。女性はこうしたイベントを行うと３、４人で来られ、楽しんで参加してもらえるが、男性にはなかなか来てもらえなかった。ところが男性は将棋や囲碁の番組を行うと参加してもらえることがわかった。将棋はおじいさんと小学生

が同じ教室で見ており、こういうことはとてもよいと思う。少しでも仮設等から外に足が向かってくれればと思うし、こういうイベントは続けていかないといけないと思っている。５月２５日(日)に福島県いわき市で「公開復興サポート明日へｉｎいわき」を計画している。こういう取り組みを平成２６年度も続けていく。

「あさイチ」は４月２１日(月)から３日間、宮城県から放送する。こういう試みは去年福島で行った。岩手、福島、宮城と回りきったが、今後とも続けていく。

○　ＳＴＡＰ細胞の問題で４月９日(水)の理化学研究所・小保方晴子研究ユニットリーダーの記者会見を見ていて考えることがあったので述べたい。ＮＨＫの番組にこと寄せての意見だが、実際にはＮＨＫだけではなく、新聞も含めたメディア全体の問題かと思っている。この問題は２つの構造があると思う。１つはＳＴＡＰ細胞は存在するのかというそのとおりの問題。もう１つはＳＴＡＰ細胞問題騒ぎという次元があると思う。ＳＴＡＰ細胞問題は現状でも落ち着いているわけではないが、問題の構造自体はそれほど複雑ではない。ある論文が比較的権威のある雑誌に発表されたが、さほど時間がたたないうちにその論文の問題点がインターネットなどを通じて、ほかの専門家から的確に指摘された。その結果、アイデア、理論は十分に検証が済んでいないこととなり、今のところはっきりした反証もなく、宙ぶらりんな仮説という状態で、今は検証ができるかどうか待っている段階だ。決着はついていないが、状態については割とはっきりしている。論文発表の流れ自体には問題があったが、比較的早く指摘もあり、社会に対する実害が発生しているわけでもない。チェック機能が働いた話だと思う。２つ目のＳＴＡＰ細胞問題騒ぎが話をややこしくしている気がする。若い女性のリーダーで、かっぽう着を着て実験をするなど、科学的な成果の発表が一種の人間ドラマに仕立てられるという条件、演出が割と行き渡った。その結果、専門性が高く、高度な科学研究の話が一般の人に等身大のストーリーとして伝わるように広まった。今回の場合はさらに、閉塞感が漂っている日本社会にとって一種のナショナルプライドの発露のきっかけにもなっている。理研がそのような演出をしたこともあり、メディアが一斉にそうしたストーリーに乗ってしまったところがあるのでないだろうか。その科学的成果に疑問符がつくと一転、２つ目の次元の人間ドラマも劇的な展開、場面転換を強いられることになった。そうした文脈の中で４月９日に小保方リーダーの記者会見があった。ＮＨＫだけでなく、テレビ局は記者会見を中継し、新聞もかなり大々的に報じた。ＳＴＡＰ細胞の論文の問題点と性質が語られてもいたが、実際に科学的な真偽に焦点が当たる以上にそれまでの人間ドラマの続きを見せようと

するところがあったのでないかと思う。これだけ専門性が高く、難しい話についての記者会見を中継することが従来はあったのだろうかと思った。リーダーが中年で見栄えのしない男性だったらこれほどまでに注目されたかとは誰しもが考えることだ。小保方リーダーが涙を流す表情をアップにして映していたし、カメラのフラッシュも浴びせられていた。弁護士が論文の詳細について細かく難しい専門的な解説をしているときにＮＨＫでは画面右下にはめ込みで小保方リーダーの表情を流していた。これは関心の焦点が、両方にあるとも言えるが、本当はどちらなのかということを見せていたような気がする。メディアはＳＴＡＰ細胞の成果の発表のときに、人間ドラマにやや傾きすぎてきまりの悪い思いをしたところがあると思う。論文の問題が指摘されたときにも人間ドラマにやや傾いていく。確かにそうしないと一般の人に関心をもってもらえないという宿命的な問題はあると思うが、もう少しそうした部分を相対化し報じたほうがよいのでないか。科学と社会の橋渡しのようなものがメディアの役割だとすれば、そこは少し冷静な方法を考えなければいけないのではないかと思う。何人かに話を聞くと、近年の科学的発見、成果は個人に帰することが難しくなっているそうだ。ナショナルプライドと重ねるのも難しくなっている。国籍もあまり関係なくなっているし、個人よりネットワークの果たす役割も大きくなっている。人間ドラマ風に描いて報じることを顧みる視点もあったほうがよいと感じる。

○　拉致問題に関する報道はいろいろあるが、その中で特に拉致被害家族側からの報道がよくある。ＮＨＫはそれについて量的によくフォローし、報道していると思う。逆にいえば若干過剰に感じる部分もある。３月２４日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」では、拉致被害者の家族会が結成から１７年という報道があった。海外メディアの記者が鹿児島を訪れ、鹿児島の海で拉致された市川修一さん、増元るみ子さんのケースについて、家族にも会って話を聞いていた。家族からコメントを引き出し、記者自身も感想を述べるというニュース報道だった。趣旨としては、国際世論にどう訴えていくかという拉致問題の１つの解決のしかたの流れに沿った、それをサポートする報道だったと思う。ＮＨＫがそのように意味づけたかは定かではないが、私はそう受け止めた。それはそれとして１つのニュースであるし、興味深い話題だ。ただ、取材をした外国人記者の表情を見ると、自発的に関心をもって取材をしているというよりは、私の推測だが、内閣府、役所が絡んだ企画取材であったはずで、記者が鹿児島へ行って取材する活動そのものが内閣府、役所によってサポートされた企画になっていたのではと受け止め、不自然な感じがした。取材とは本来そういうものではないはずだ。記者がそこへ行くまでの旅費をだれが出したのか、取材の便宜を役所がどう図ったのかについて疑問をもったが、そこについての間接的な言及は一切なかった。記者がメディアの役割として自主的に判断し、取材をしたという形を取っているが、そうではないのではないかと疑いを感じさせるような内容だった。拉致問題はあると

きから突然大きなニュースになった。それまで政治もメディアも拉致被害者の側に立って何もしなかったがゆえに、彼らの悲劇が事実と判明してからは彼らの立場に立つ報道をずっとしてきたと思う。彼らの悲劇を受け止め、なぜその悲劇が起きたのかという分析もいろいろある。それらをいろいろな角度からバランスよく報道することがメディアの務めだ。そういう観点から見ると新聞にもいろいろ差があるが、公共放送たるＮＨＫの扱い方は行き過ぎていることが多々見られると感じる。この問題についてのＮＨＫの報道指針、姿勢のようなものがあれば聞きたい。

（ＮＨＫ側）

ＳＴＡＰ細胞についてはさまざまな指摘がある。なぜこんなに長く中継するのかという意見となぜ途中で中継をやめるのかという意見もある。そうしたことも踏まえ、どの程度の報道がよいのかを考えている。拉致問題の鹿児島取材の件は、ニュースそのものについてどういう事実関係があったのか再点検する。

委員から相対化、バランスということで、重要な指摘をもらったと思う。感情的な部分で報道が流れていく、大騒ぎをしてしまう部分はどうしても出てくるところがあり、そこを常に戒め、反省している。われわれはさまざまな角度から伝える指針をもっており、常に自分たちの報道を見直し、指摘を受けた点は今後もそぐわない部分がないようにしていきたいと思う。

○　消費税関係の報道で気になった点がある。報道の多くの部分が駆け込み需要、家計・企業への影響が主眼で、増税分の消費税がどのように使われるのかを国民に考えることを促す報道が少なかったように感じた。おそらく全体の１～２割ぐらいで、そういうことは全く伝えないのかと思ったときに消費税の今後の使い道について触れられている程度で、駆け込み需要の部分がエスカレートしすぎていた。私も家の中を見回し、買っておかないといけないものがあるのではないかと考えさせられるような傾向があった。ＮＨＫの役割としては消費税がどう使われるのかを、今後しっかりとフォローしてもらいたい。

○　配偶者控除の縮小検討について「クローズアップ現代」などで報道してほしい。この話題はともすれば専業主婦いじめや、専業主婦対共働きのような話に矮小（わいしょう）化されてしまう。税制とは、人々の生活にきわめて大きな影響を与え、われわれがどのような共同体になっていくのかというデザインをある程度決めるような話だ。どちらが得かではなく、税制が戦後どのような形で人々のライフスタイルに影響

を与え、どのように陳腐化し、今後このような形のライフスタイルが望まれるというような歴史軸も切り取った形で報道してほしい。それに絡め、インターネットに配信されている「ＮＨＫ　ＮＥＷＳＷＥＢ」で配偶者控除に関する記事があるが、多少誤解を招くのではないかと思われる箇所がある。板橋区のパートの人の例を挙げて、配偶者控除が受けられる 103 万円以内に年収を抑えようと１日６時間、週３回の勤務にしているが、今より働く時間を増やすには、民間の保育施設に預けることも考えなければならず、いくつかの保育施設を調べたところ、パートで得られる収入と同じくらいの利用料がかかることが分かったという内容だった。しかし、板橋区の場合、週３回の勤務を週５回にしたとしても学童保育の値段が変わることにならない。民間の保育施設を探しているということだが、公立の学童保育をそのまま回数を増やすだけであれば収入分がそのまま利用料になるということにはならない。これに類する議論で、保育所の保育料がパートタイムの収入より大きいというような話をする人もいるが、認可保育所の場合、応能負担で所得に応じ、保育料が変わる仕組みになっている。そういうことも含め、公的なインフラに預ければ負担が増えてしまうという議論はよくよく考えると成り立たない。もし特殊な事例を拾い上げているとすれば多少問題だと思う。

（ＮＨＫ側）

税制は社会のデザインだというのはそのとおりだと思う。損得という問題以上に、社会をどうデザインしていくのかという問題が大きいのだろうと思う。４月１４日(月)の「ニュースウオッチ９」でもこの問題は放送したが、今後も取り上げたいと思う。具体的な事例については確かにさまざまなケースがある。子どもの年齢や仕事の形態もいろいろあると思う。事例で取りあげた人を特定の意図をもって取り上げたことはないと思うが、仮に誤解が生じているとすれば別の事例を挙げ、こういうことで困っている人もいるというような形で取り上げたいと思う。

○　両論を併記しなければならない問題で、おそらく困っている人を探したのだと思うが、若干特殊な事例だ。たとえば低所得者で、働きたくても働けない人をどう手当てするかということがこの議論においては重要な話なので、その部分を取り上げてもらったほうがより生産的な話になるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

介護や育児などで働きたくても働けない人の手当てをどう

するのかという部分も確かにある。そうした部分も４月１４日(月)の「ニュースウオッチ９」で放送したが、そうした事例も探し、取り上げたいと思う。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局